

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT Society of Architectural Design Education
巻号 / vol.	023
発行日 / Pub. date	2002, 6
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

本館1F-東工大出版物

華 : ka

20020000 23

大岡山 20100720 00014802 (2009)

## Headline: Architectural Conservation

## 巻頭: 建築の「保存」を巡る状況

長寿の記録は1997年に亡くなったフランス人女性の122歳で、いずれは200歳に達するという説もある。

若さ juvenile を保つために整形したりするのを rejuvenation と言うのだそうで、建築や街並みについてもこの言葉を使うことがあるとのこと。

リバイタライゼーションの vital もバイアグラの vigorous も元気を意味し、都市も人間も若さや元気を保つためには努力を要する。

人間は最長寿国であるのに、建築は恐らく先進国のなかで最短命国の日本、

元気がないように見える建築界も、こういう時代だからこそ建物の長寿を真剣に考えるべきであろう。

今号では、保存再生の実務面から、京都の新風館を設計したリチャード・ロジャース事務所のベンジャミン・ウォーナーさんと、

日本設計/イコモス国内委員会の田原幸夫さんを迎え、本学の藤岡洋保教授と議論していただきました。

華[ka]2002年春・夏号

[巻頭記事] 建築の「保存」を巡る状況、消えゆく境界

[2001年度学生設計課題] 建築設計製図第一、第二、第三、第四

[ニュース・投稿] コンペ入賞作品紹介/[INFORMATION]

# 巻頭記事: 建築の「保存」を巡る状況

Headline: Architectural Conservation

## 鼎談: 建築の「保存」を巡る状況

Architectural Conservation

田原幸夫 [建築家・日本設計] + ベンジャミン・ウォーナー [非常勤講師・CDI青山スタジオ] + 藤岡洋保 [教授]

TAHARA Yukio (Architect, Conservator, NIHON SEKKEI, INC), Benjamin WARNER (Architect, CDI Aoyama Studio), FUJIOKA Hiroyasu (Professor, Tokyo Institute of Technology)

司会: 山崎綱介 [助手]

YAMAZAKI Taisuke (Assistant, Tokyo Institute of Technology)



田原幸夫 [写真左端]

TAHARA Yukio

1949年長野県生まれ。1975年京都大学工学部建築学科卒業。1975～現在、日本設計勤務。1983～85年ルーヴァン大学コンサーベーションセンター(ベルギー政府給費留学)。現在、日本イコモス国内委員会理事。日本建築学会ドコモ対応ワーキンググループメンバー。

藤岡洋保 [写真右端]

FUJIOKA Hiroyasu

東京工業大学教授

ベンジャミン・ウォーナー [写真中央]

Benjamin WARNER

1954年イギリス生まれ。1985年東京工業大学大学院修士課程修了。1985～86年日建設計。1986年リチャード・ロジャース パートナースhipジャパン(代表取締役)。1993年CDI青山スタジオ設立(代表取締役)し、現在に至る。1999年～新潟大学非常勤講師。2002年～東京工業大学非常勤講師。

以下は2002年3月4日に文教センター小会議室で行われた鼎談の様子を、学生編集委員の増田泰良(DI)と編集部(担当:山崎)がレポート・編集したものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

山崎——今回は、建築の保存がテーマですが、まず最初に、最近ウォーナーさんが手掛けられた「新風館」、これは吉田鉄郎設計の京都中央電話局(1926)を保存・活用したプロジェクトですが、この経緯についてウォーナーさんからお話しいただきたいと思います。

### 「新風館」について

ベン——このプロジェクトは4年前前から手掛けています。最初は東工大の卒業生で現在東京芸大にいらっしゃる野口先生がNTTの依頼で基本的なスタディをしていらしたのですが、私がお話を聞いてリチャード・ロジャース事務所にぜひやらせてもらいたい、話し合いに行ったわけです。この建物は煉瓦タイルのせいかイギリスのヴィクトリア時代の建築みたいで日本では例外的な建物だと思いました。そこに非常に近代的な商業施設を付け加えるというプログラムが非常に面白そうなプロジェクトだと思ったわけです。それでロジャースの事務所がプロジェクトに参加することになり、最終的に私たちが考えた提案に決まったんです。このプロジェクトは、この場所と隣の敷地を再開発するまでの10年間、ここを商業施設として活用するというもので、予算的には非常に厳しく坪あたり約25万円ということでした。そうした条件だったので仮設的なものしか考えられず、結局、テンポラリーなストラクチャーでやろうとということになりました。計画上の主なコンセプトは、古い建物と増築部分との真ん中に大きな四角い広場を設けるということでした。敷地は烏丸通りと御池通りの交差点に近い所で、普段は人があまり流れない所です(fig.)。ですから建築で

面白いことをやらなくては人は来ないと思ったのと、京都という街には広場の歴史がそんなになかったと思ったので、夏の暑いときに人が集まる日陰のある場所を作ろうと考えたのです。イベントやテナントの中身については施設課と半年間くらい検討して、真ん中に円形のパーンスタンドを置くことにしました。私は今も京都で仕事をしています。よくここで食事するのですが、竣工して約2年経って感じるのは、基本的には非常にカラフルで楽しい空間かもしれないけれど、人が足りません。せっかく広場を作ったんですが、なんとといっても人が少ない。同じものを京都駅前に作れば人がたくさん入るんでしょうが、目的がないとなかなか人が集まらないのですね。テナントの選び方にも問題があって、半分はがらくたで半分は非常に高級品という組み合わせ方はあまり良くなかったと思っています。

藤岡——このプロジェクトの場合の、開発側→クライアントのNTT都市開発から設計者であるリチャード・ロジャース事務所に与えられた条件や自由度は何だったのかをもう少し詳しく教えてもらえますか。

ベン——まずこの古い建物の道路側のL字型半分、つまり古い煉瓦タイルの顔を残したいというのが大前提で、古い建物に付属するようにその中にある程度の床面積を確保したいというのが基本的な要求でした。基本的に床面積は予算配分の上で出てきたもので、あまりたくさん床は作れないということでした。ですからこの建物は容積率を使いきっていません。当初は人が集まるホールが欲しいということでしたが、予算の都合でそれは途中から中庭のパビリオンのような屋外ステージになりました。あとは京都にふさわしい建物・外観を作りたいといわれましたが、元々この電信局の建物が京都らしい外観かどうかという問題もあり、非常に難しい課題でした。管理部門の入っている増築部分は仕上げの上に京都の格子をイメージしたグレーチングを全面に張っています。

藤岡——商業施設にするというのはNTT都市開発からの希望ですか。

ベン——そうです。この建物は半分くらい壊された状態で何年間もそのままになっていたのです。10年後に開発するまでやはりそのままにしておくのか、京都の人達が集まれるような場所を作るのか、どちらを取るかということになり、後者を取ったのですね。実際、人が行って食事したいようなオシャレな感じの場所が、今までの京都にはあまりありません。NTTからの要求は基本的に商業施設、レストランや飲食、物販などでした。

藤岡——この建物での構造の補強法についても教えてください。

ベン——建物の耐震補強については、梁型が連続する空間を残すために免震レトロフィットや耐震壁の増設などさまざまな案が出ましたが、調査の結果、鉄筋コンクリートの躯体に所要の強度が期待できることがわかったので、ここでは耐震壁をできるだけバランス良く配置することにしました。また鉄骨の歩廊部分の床レベルを既存建物の腰

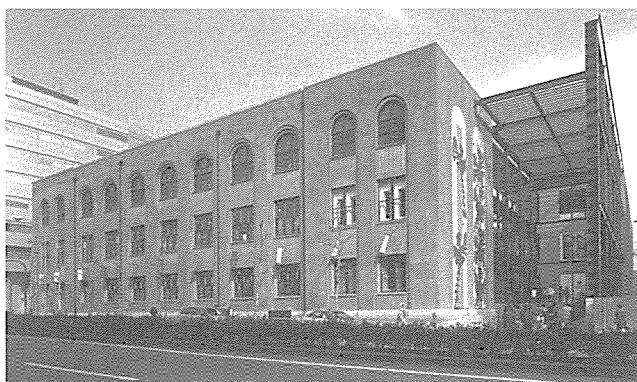


fig. 「新風館」烏丸通り側外観

22.7.2

窓の高さに合わせることで、既存の躯体に手をつけることなく店舗の出入り口を確保することに成功したと思います。

藤岡——なるほど。そこがこの計画のユニークなところで、この内側のデッキの床のレベルと、オリジナルの床のレベルがずれている。店によっては床に段差を付けたり、楽しんでいるところがあるよね。そこには設備も入っていますか。

ベン——設備も入っています。ただやはりこれは商業施設ですから、あくまでも建築までをデザインし、内装はそれぞれのテナントがやっています。ですから設備スペースに使っているところもありますし、インターネットカフェのように演出に使っているところもあるわけです。

藤岡——それにそのデッキで回遊性が生まれているし、このデッキの付け方が大きなポイントだったと思う。

田原——僕は学生時代から最近のしばらく使っていなかった状態までずっと見ていまして、これは確か京都市の登録文化財になっていたから壊される心配はないけれども、どういう使い方をされるんだろうと思って注目していました。たまたまこれが竣工した直後に京都に行ったときにちょうど夜、前を通りかかって、こんな形で再利用されているんだと知りました。中に入ると、藤岡先生が言われたように透明のフロアで躯体を見せたり、窓のレベルで床を張るなど、オリジナルの躯体を生かした床の使い方が上手いなと特に感心しました。あと道路側のファサードでは昔の上げ下げスチールサッシュをそのまま使って、上部は排煙窓として活用していますよね。サッシュによっては一番細かいバーを取って少しガラス面を大きくしたり、その使い分けをテナントに合わせて工夫している。自分自身設計者として見ると、なるほどこういうこともできるのかといういろいろなヒントが読みとれたし、非常にうまい使い方をされているなと思いました。

藤岡——全般に床のレベルに非常に神経を使ってあって、1階の広場の床もテナントの床と同じレベルなんですね、普通日本では雨仕舞を考えてあまりやりたがらないけれど、床レベルを揃えてその内側に側溝をとるやり方とか、あれは意識してやっているんでしょうか。

ベン——はい。やはり商業施設の場合は段差のないのが一番好ましいんです。そのため通りからはランプで1メートルくらい上げています。

藤岡——基本的にお店は若者向けですが、テナントを選んだのはどちらですか。

ベン——基本的にはクライアントのNTT都市開発西日本がリチャード・ロジャースとジョイントして建築を監理し、テナントの選定等はエリックという商業施設コンサルタントが行ないました。基本的な方針は若者向けの生き生きする場所を作りたいという事でしたが、私の個人的な意見では、テナントは中途半端であり良くないと思っています。

藤岡——やはり人を集めるには、もっとソフトウェアというか、たとえば広場に屋台がいっぱい並んでいるとか、いろいろな仕掛けを考えるべきという感じもするし、さっき言われたようにちょっと広場が使い切れていないという感じはありますね。さっきの田原さんの言われた話に戻りたいのですけれども、スチールサッシュがオリジナルでそのまま使えるというのは今かなり珍しい。どうしてあんなことができたのですか。

ベン——リチャード・ロジャースのロンドンのオフィスも同じような煉瓦造り3階建ての建物で、スチールサッシュの色もこの建物と同じ濃いブルーなんです。イギリスでは一般的に元のスチールサッシュが丈夫であれば別に取り替える必要はないと考えますし、この場合も掃除をしてペンキで済んだわけですからそれで良かったんです。

藤岡——私はそれを評価するんです。この建物、特に吉田鉄郎の設

計ではプロポーシオンがとても大事なわけですが、窓の割り方もとても大事で、立面全体の中でその位置づけが決まっているわけです。それがそのまま残せたのはすばらしいことで、たとえば、京都で言うと中京郵便局(cf.1)は外壁の窓を全部1枚ガラスのフィックスにしてみました。そうすると窓の表情が全然なくなってしまう。1枚で大きいのがいいのではなくて、小さく分けてあることが建物全体のスケールの秩序にとっても大事なことなんです。ここではそれがうまく残っているわけです。

田原——当初のスチールサッシュのグレードが相当高かったのではないですか。厚板の曲げ物で、細い形鋼ではないですよね。メンテナンスもずっと良かったと思うんですけどね。

藤岡——それから、私は、こういう仕事を見るときが一番のポイントは、建物を残すことになったときに、どこに歴史的・建築的価値を見いだすのか、そしてそれを継承する際にどのようなデザインが可能なのか、その可能性をどれだけ追求したかだと思っています。まだこちらが気づいていない部分でこの建物の可能性をうまく引き出した所があったら教えてください。

ベン——当初の提案で、一番多かったのは、同じ形の物を反対側にも作るというものでしたが、私たちは、もう少しカラフルで軽い現代的な感覚でやるという考え方が良いと思いました。またエントランスの設け方にも特徴があって、この建物では道路側から入る時には直接中が見えないで、ランプを登りながら少しずつ面白い風景が見えてくる、というシークエンスを大切にしているのです。このエントランスまわりの計画は結構成功していると思うんです。

藤岡——既存建物の側壁のデザインはいろいろ考えましたか。

ベン——窓にするなどの案も出ましたが、最終的には取り替え可能なグラフィックパネルにしました。これは商業施設ですから通りを走る車に対して「あ、何かあるよ」「イベントがあるよ」というような宣伝をする場所は絶対に必要でした。そこで、アーチ型のへこみがあったのを利用しました。夜間の照明計画は少し物足りなくて、特にエントランス部分は夜はどうしても暗過ぎます。見上げるとガラスのキャノピーが全部緑や赤になっていてそれは良かったんですけども、もっと強くやれば良かったですね。

藤岡——古い建物の中庭側のテクスチャーはいろいろ検討したんですか。色や素材には他の選択もあり得ると思いますが。

ベン——いろいろ検討した結果、塗り壁にしてあります。煉瓦タイルは保存できる状態ではなかったですし、残っている部分は本当に少なかったんです。塗り壁の色はなるべく煉瓦タイルに合わせた色にしました。もう少し沈んだ感じでも良かったかもしれません。

藤岡——道路側の表の顔と広場側の顔は全然違っていい、という発想ですか。

ベン——そうですね。外側を少し堅いイメージにして、中は小都市みたいな柔らかいイメージにするのがコンセプトだったんです。

#### [[「保存・再生」を支える制度の不備]]

藤岡——京都にはもう1つ吉田鉄郎が設計した建物(京都市中央電話局新上分局:1924)がありますが、見たことがありますか。今はリニューアルされてレストラン(カーニバル・タイムズ)やスポーツジムとして使っているちょっとドイツ風の建物です。

ベン——これはまたリニューアルするそうで、東京のロジャース事務所でも今仕事をしています。同じ保存というテーマでは銀座の交詢社(横川工務所:1929)も建て直すことになっていて、そのエントランスまわ

りだけ保存するファサードデザインコンペにも参加しています。こういう残すべき歴史的価値がある建物はそれほどないと思うんです。

**藤岡**——日本には歴史的価値のある建物はヨーロッパの街ほどはないけれど、それでも全国で見るとかなりの数があるわけです。けれどもそういう建物がどこにあるかという情報も、今はけっこうリストなんかで出てくるようになりましたが、オーソライズされているわけではありません。それから、建物の構造診断などもその建物を壊して新しい建物を設計する側の会社がやっているようなこともあって、公平性という点で問題点が多い。第三者機関のようなところでちゃんとした診断をすとか、そういう体制がまだないんです。これは日本のかなりの大きな問題で、その根底にあるのは「更地に新しい建物をつくる」という前提で法律もシステムもできているということなんです。建築基準法もそうです。既存のものをどう維持するかという考えで法律や技術ができていない。けれどもこれからはそうならざるを得ないという部分があると思う。その点からも今の日本のあり方は問題なんです。

**田原**——それと今日本では、設計者選定の方法はプロポーザルシステムが一般的になりましたが、もう少しオープンにすべきだろうと思います。特に保存の話というのは、応募案とその評価についての公開みたいなものが絶対に必要で、そうしないと自分の案が落ちた理由も当選案の内容もわからない。著作権上の問題も不明確です。かつてはオープンコンペなんかで全部の作品が紹介されるケースもありましたが、今はほとんどがプロポーザルという形で、ひどいのは審査員もわからない、評価もわからない、結果も「落選」っていうのしかこない。それぞれの応募者はすごいエネルギーをかけているわけです。たまたま当選した案というのはクライアントの要求に一番合っていたかもしれませんが、落選案の中にも今後に繋がるアイデアというものがおそらくたくさん入っているはずなんです。それがそのままオープンにされないで、クライアントのお蔵入りというのは僕は非常にもったいないという気がします。たとえばヨーロッパの最近の例ではテートモダン(cf.2)とか、ライヒスターク(cf.3)とか、公開された全部の応募案を見ると、落選案の中でも非常にシンパシーを感じる案がたくさんあるわけです。そういう応募者の案に込められたエネルギーをもっとみんなで共有すべきではないか、そういう気がしています。

**ベン**——現行法規との関係で言うと、イギリスの場合も避難通路とかに関しての考え方は日本と同じなのですが、役所と交渉して解決していくわけです。たとえば古い建物の場合、全く法規に合っていない場合もたくさんありますが、それはそこで避難のテストをしたりするわけです。日本の法規も当然古い建物に合っていないのにどうしてもそれでやらなくてはだめだとか、プラグマティックなところがあると思うんです。

**田原**——日本には地震というものがあるために建築基準法は非常に構造に厳しくできていて、建築基準法をクリアしてないと一般のクライアントは安心して建物を使えないわけです。反面文化財保護法というのがあって、今まで重要文化財というのはそんなに使わないという前提で、建築基準法の適用除外(第3条)ということになっていましたが、重要文化財でありながら普通に使う建物がどんどん増えてくるとそうはいかない。その辺をどう折り合いを付けるかということが今非常に難しい課題になってきています。それから構造補強については、これは一般的には設計者の能力にもよると思うんですが、日本ではすごいことになってしまいます。一方で文化財の場合はできるだけ手を加えないというミニマム・インターベンションの考え方があって、実際には手を加えたくないけれども構造的には加えざるを得ないということになっ

て矛盾してくる。僕は今の日本の保存の問題の出され方というのは、アーキテクトには解けない問題が多過ぎると思うんです。解けない問題を一所懸命解こうとして、結局は妥協の産物でしか物事が終わらないから日本には妙なコンサーベーションの例が多いのではないか。これは実務家として最近特に感じていることです。

**藤岡**——元をたどって考えると「文化財が特別なものだ」という発想自身も歴史的に形成されたものです。国による文化財保護は1897年の古社寺保存法からはじまったのですが、名称からも明らかのように、古いお寺や神社だけが対象だった。それは近代化の過程でお寺や神社が経済的に困窮したからというのと、京都が明治維新後衰退していた経済の復興のために、運動してできた法律だったという経緯があります。でも当時の政府にはお金がなくて、多くの建物を保存の対象にすることができない。それが結果として「厳選保存」という文化財行政のやり方を方向づけたきらいがある。そういう経緯があるから、建築基準法で「例外」ということになるんです。ところが、町中に建っている大きいヴォリュームの建物にも価値を認めようという流れが1960年代以降に出てくるわけです。このときに歴史的価値を認めたとしても、一般の人が使うとしたら安全性が無視できない。そこで適用できる法律は現行の建築基準法や消防法しかないから、建築基準法や消防法の考え方をそれとは別のポリシーでつくられた建物に適用せざるを得ない。そうするとどうしても安全側に振って診断せざるを得ないということがしばしば起こってきて、たとえば窓を全部潰して耐震壁にしなくてはいけないとか、防煙垂れ壁をつけなければならぬという問題が起こってくる。そうすると歴史的建造物が持っているよさや特長が損なわれることもある。

**ベン**——イギリスでは重要文化財の中にかなり近代的な建物も入っているんです。一番最近のものは多分1970年代位のものだと思うんです。

**藤岡**——イギリスと日本で一番大きく違うのは所有権の位置づけ方だと思う。特に不動産に対して日本は所有権が絶対という社会ですが、イギリスはむしろ利用権を重くみる社会なんです。たとえば日本では、景観上好ましくない建物を建てても問題にできない。それは建築基準法などを満たしている建物に対しては、社会の公益よりも個人の所有権の方が大事にされる社会だからです。

**ベン**——日本では、ビルのオーナーが納得しないと基本的には文化財にならないと。

**藤岡**——そういうこと。イギリスは違うよね。しかもさまざまな記録文書が建物に付いていて、建物を買うときにはその文書が求める義務も継承しなくてはいけないという社会です。それは個人の権利と公益の関係をどう位置づけるかという社会の理解にかかってくるわけで、保存の問題というのは実はそういうことにも触れることなんです。歴史的建造物の保存という問題は、単なるノスタルジックな問題ではなくて、結局今の我々の社会のあり方を問題にすることでもあるし、法律も含めた制度の問題を問題にすることでもある。つまりとても現代的な、今の社会の問題点をクリアに見せる断層みたいなものだと思うんです。

#### [[復元]の意義]

**田原**——僕はたまたまベルギーでの体験から、コンサーベーションというものに興味を感じて、それで日本に帰ってきてからも細々とやっているわけですが、帰国後今まで僕がやってきた仕事というのは、おそらく日本の一般的な民間設計者の現状というものを表しているような気がします。我が国では長い間、民間設計者にとって保存というのは

あまり関係のない分野でした。今やつと民間設計者もさまざまな形で保存に関わりつつあるわけですが、設計者がプログラムから関与できないケースがほとんどであることは残念に思います。民間の設計者が現在携わることの多い保存関連の仕事には大きく3つの流れがあると思います。1つは業務ビルのリニューアルです。霞が関ビル(cf.4)は日本で最初にできた超高層ビルですが、そのリニューアルの最初の企画と基本計画をやる機会がありました。リニューアルと保存は厳密には区別されるべきかもしれませんが、霞が関ビルの場合は私たちの組織の先輩が設計したものであったこともあり、設計者がプログラム作りから参加できた数少ない仕事でした。次に大建築家の作品としての歴史的建造物の保存の仕事。いくつかプロポーザルに参加しましたが、そのときの問題は「この壁やこの部分を保存すること」といったように、ほとんど決められた条件の中での提案しか許されないという点にありました。また前述した非公開性も大きな問題だと思っています。もう1つは「復元」です。天守閣の復元などにみられるように、日本人は割と復元という行為に対して抵抗がない国民だと僕は思うんですが、そういう中から出てきたのが新橋停車場の「復元」計画です。国指定史跡「旧新橋停車場跡」の中に、昔の駅舎を「復元」しようというものです。ところで日本語の「復元」という言葉は非常にあいまいなところがあるので、私は今回の計画はリコンストラクション、つまり「再建」と呼んでいます。新橋停車場は日本で明治5年にできた最初の鉄道駅で、鉄道自体はイギリスの技術ですが、駅だけアメリカ人の建築家・ブリュンツェンが設計しています。文献は全部関東大震災で焼けてしまって、今では写真と錦絵しかありません。しかしこの中に非常に鮮明な2枚の写真が残されています。錦絵は夥しい数ありますが、これは正確さが全然保証されないし信憑性もかなり疑わしいので、我々としては「再建」に当たってこの2枚のクリアな写真のみを根拠にするという大方針をまず決めました。つまり写真によってわかる外観のみを再現しよう、というのが今回の計画です。開発前の発掘で旧駅舎の礎石が出てきたので、平面的な位置と寸法は確定しました。高さ方向は、現地から正面階段の1段目の石が出てきたので、この蹴上げの実測値170mmを基本に、古写真の3次元分析をして建物の高さを出しました。敷地は汐留の再開発地区の中心です。ですから周りは全部超高層です。この場合にも大きなプログラムは既に決まっています、我々の仕事はそこでいかに最終解答を出すかというものでした。それとこれは根本的な問題ですけれども、あくまでこれは建築基準法100パーセント対応の現代建築なんです。そうすると元の木骨石貼りという構法は採用できないので、鉄筋コンクリートの筐の外側に石を貼って昔の外観を再現したわけです。話は飛びますが、もし今回の場合、鮮明な写真が残っていなければ、別のやり方があったかもしれないと思っています。たとえば、昔ヴェンチューリがやったフランクリンコート(cf.5)のように、わからないものはフレームだけでイメージさせるというやり方もあったかもしれない。しかしこれは今回のプログラムの範囲ではありません。特に我国においては史跡の中の行為の場合は、何らかの「復元」行為でないと許されないのです。

藤岡——このようなテーマは、いろいろなことを真面目に考えれば考えるほど解決不可能な問題が増えてくるといえるタイプのものなんです。これについては、むしろ建築家としてこういうテーマにどう向かうべきかということで議論したいんですが、こういう仕事はどう思いますか。

ベン——これは保存といえるのですか。作り直しというか……。この建物を新しく作って今度はどのように使われるんですか。

田原——ここでの保存というのはあくまでも史跡になっている地下の

遺構であって、もちろん建物は前述したように100%現代建築です。用途はレストランと展示室です。

ベン——どのように使うんですかという質問をしたのは、当初駅だったのにその駅という機能ははずしてまで作る意味はないのではないかと感じるからです。

藤岡——たとえば、オルセー美術館(cf.6)みたいに元は駅だったけれども違う機能になるという例がないわけじゃない。それと同じように考えたらどうですか。

ベン——オルセー美術館は保存したわけで、作り直したわけではない。私は基本的にこういうものを作り直すのは、アカデミックな目的としてはいいと思う。この建物自体非常に歴史的なものですから作るのには非常に面白いと思うんです。ただ、汐留のスカイスクレーパーに囲まれたところに作るというのは、駅自体に対してちょっと可哀想だという感じがするんですね。

藤岡——これは大事な問題で、「なぜこれを再現するのか」ということに関係する問題です。もしも復元が大事だと思えば、その建物が再現されたときに周りもそれに合わせて作るべきなんです。新しい大きな建物を作るとか、古い建物を作るとか、小さく見えてしまう。だからある程度空間を空けて周りの建物を作るとか、ヴォリュームの置き方に配慮するとか、そうすればこれを再現する意義もみえる可能性がある。それからウォーナーさんが問題にしているのも、要するにフェイクではないかという問題意識ですよ。フェイクだということをもっと考えるならば、あまり正確さを装ったやり方をしないという選択もあり得て、さっき話に出たヴェンチューリの、鉄のフレームで外だけを象徴的に表現する方法(フランクリンコート)もあり得たかもしれない。個人的には私はその方に賛成です。

ベン——少なくともレストランというのはやめて欲しいですね。たとえば、ロンドンのコヴェント・ガーデンでは昔の駅が交通博物館になっているんですが、これはなかなか面白いんです。駅としては使われていないのだけれども。

田原——既成のプログラムの枠の中ですが、設計者としてそうしたことも常に考えてはやっています。私のスタンスは、平成の時代に建てる以上それは現代建築でしかあり得ないわけで、これはたまたま昔の写真によってわかった新橋駅の外装を1つのデザイン手法で再現しただけだと。これはみなさんが言われているとおり、保存のフィールドでお話しすべきことではなくて、どちらかというと汐留の街づくりの中で話すべきテーマなのですが、なかなか一般的な見方はそうではないですね。我々は、とにかく写真からわかるところだけはきちんとやる、わからないところは我々の手でデザインしようという、その区別を最後まできっちり守っていかうということです。

藤岡——私自身は、復元という行為そのものを否定する気はないんです。たとえば鹿鳴館を復元してみたいとか、そういうものがあってもいいと思っています。問題は、どうやってそれに現代の建築としての有効性を込めることができるかということだと思います。だから普通の建物のつくり方とは違う「復元」ということをやったことによって、どう世界が開けるのかという視点で見るべきだと思うんです。一般的に復元などの場合は、完全な元の姿が再現可能であるという前提や思いこみでいろいろなことが進んでいますが、これは文化財という概念にまつわりついているオブセッションだと私は思っています。たとえば今我々が法隆寺を見ている時にも、これは建ったときの姿がそのままあると思っ込んで見ている人が多いのではないのでしょうか。それは文化財の修理という行為によって、それが可能になっているとい

う思いこみです。文化庁も「当初復元」というような言葉を使うから、本当にできているかのような錯覚が生じるんですが、実際にはそれは不可能です。

**田原**——たとえば新橋の場合、当初の外壁の石は伊豆の斑石というものですが、これはもう採取できないし、仮に手に入ったとしても性能的に現代の建材としては使えません。つまりこれ1つとっても「当初復元」はありえないわけです。「復元」建物とはいえ、設計者としての基本思想は、いかにして平成という時代における質の高い建築を創り上げることかというところにあり、ここを「復元」という概念でごまかさなことが大切だと思っています。

**藤岡**——私としては、「文化財」という概念自体を相対化する、という視点で過去に行われてきたものを問題とすることを建築史のテーマとしたいと考えています。従来の文化財保存の歴史というのは、進歩の歴史として書かれるきらいがありました。つまり、保存の対象が社寺建築から城郭や民家、茶室にまで広がったという点や、最初は「姿」にしか価値をみなかったけれども、小屋組や材料など技術的なことにも価値をみるようになったという「進歩の歴史」として認識されているように思います。でも実態は、保存すべき対象や範疇が増えれば問題も同時に増えるわけで、少なくとも材料のオーセンティシティを守ることと、姿を維持することは両立しないことが多いわけです。ましてやそれがこれからも使う建物であるならば、意識的に変えなければならぬところも出てきます。問題はより複雑になっているというのが実態だと思います。その部分をまともにもみないまま、文化財のオリジナルな状態が保存できるかのような幻想を振りまくことは問題だと思います。

#### 【「保存」とナショナル・アイデンティティ】

**田原**——保存の概念や手法についても、ヨーロッパではどうこうという時代はもう過ぎていて、ヨーロッパでも日本でもさまざまですし、人によっても違います。ただ復元に関して言えば、日本における復元というものを、ヨーロッパの事例とさらに具体的に比較してみる必要があると思っています。たとえば大戦の後は復元建造物というのが溢れているわけですが、少なくとも第2次大戦以降においては、ヨーロッパの方が日本よりはるかに論理性・合理性があるような気がする。それはやっぱり戦争という破壊行為がもたらしたもっと根元的な国民のアイデンティティのようなものから「復元」という発想が出てきているのかなと思うんですが。

**藤岡**——でも似たような状況は日本でも指摘できると思います。たとえば法隆寺によく使われる「世界最古の」というフレーズは、やはりナショナル・アイデンティティに響く言葉だからこそ意味があると思われているんです。また長い間、いわゆる歴史主義の建築が保存の対象にならなかったのは、あれは日本のものではないという認識によるもので、その裏返しにあるのは古社寺こそが自分たちのものであるという、まさにナショナル・アイデンティティの問題です。

**田原**——しかし、ある程度国民の持っている遺伝子じゃないですけども、やっぱりそういうものもかなりあるのかなと。まだまだ明治以降の欧風近代建築というのはわれわれ日本人にとって本物の文化になっていないのではないかという気も一方ではします。日本の長い歴史からいうと古社寺は圧倒的にそういう文化の中で流れてきたものがあるわけですが、どうもまだ明治期以降のものは日本人の心に深く根ざしていない危うさがあるのかなという気がします。

**藤岡**——少なくともこの問題を考えるときに、まずある特定の古い建物を歴史的な価値を認めて、国・地方自治体などの公の機関が残して

いくという制度そのものが近代の産物で、日本だけでなく世界中どこでもそうだとことを認めることが前提だと思うんです。ではなぜ近代でそういう行為がはじまったのかというと、その裏にあるのはやはり近代国家特有のあり方です。他の国家との関係の中で位置づけられて、ナショナル・アイデンティティを何らかの形で認め得る1つの拠り所に歴史的建造物があった。その典型的な例がフランスですね。まさに中央集権国家の中での「文化財」という位置づけ、国の威信の拠り所になるもの、という考え方です。その点でベルギーなんかは私は非常に面白い例だと思っているんです。あそこのナショナル・アイデンティティはどこに求められるのか。歴史もそんなに長くはなく、近代に独立して国家となった。しかもそこにはワロンとフラマンという2つの言語が同居していて文化的伝統も違うとしたら、それをどう扱うかというのは極めて重要な問題です。文化財というテーマに絞ったとしても、過去の何に国家としてベルギー的な価値をみるかというのは避けて通れない問題だったはずで、文化財保存の歴史という点でいうとベルギーはすごく面白い例だと思います。

**田原**——ベルギーという国自体は本当に小さな国ですけども、文化財の面で1つのアイデンティティなものとして延々と流れているのは、中世に繁栄を誇った多くのフランダース諸都市の遺産ではないかと思えます。ベルギーは文化財保存に非常に熱心な国であるにもかかわらず、数年前まで世界遺産条約も批准していないんですが、理由はおそらくワロン、フラマンの問題だと思います。ベルギーという国のアイデンティティを守るためには、基本的にはどちらが優位になってもいけないわけで、常にバランスの中で動いている。ですから世界遺産条約を批准して最初に登録されたベルギーの世界遺産(文化遺産)というのは、ワロンで1つ、フラマンで1つ、それからブリュッセルで1つという風に、見事に地域のバランスをとっている。

**藤岡**——今言われて、象徴的なのはブリュッセルという町は、また特殊なんですね。2つの言語圏があるけれどもその統一的な首都であるということで意図的にそういうことをしなければいけない。私が最初にブリュッセルに行ったときに印象深かったのは、町中と同じポスターが2つ並べて貼ってあって、よく見ると言葉だけが違う。要するにどちらにも平等な位置づけをしなければいけない。あれは本当に印象的でしたね。あれはブリュッセルだけなんですよ。

**田原**——ブリュッセルだけがバイリンガル、と法で定められています。

**藤岡**——そういう目でみると、首相は国会で同じ内容を2つの言語で施政演説しなければいけないとかね。そういう国で文化財とは何なんだろうというテーマが、個人的には非常に興味があります。

cf.1:京都電信郵便局(吉井茂則・三橋四郎)1902竣工、改修工事:1978年3月竣工

cf.2:Tate Modern(Giles Scott:発電所)19世紀竣工、改修工事(Herzog and de Meuron):2000年竣工(『SD』2000年10月号)

cf.3:Reichstag(Paul Wallots:議事堂)1894竣工、改修工事(Norman Foster and Partners):1999年竣工(『SD』2000年10月号)

cf.4:霞が関ビルディング(三井不動産+山下寿郎)1968年竣工、改修計画(日本設計):2002年9月竣工予定

cf.5:Franklin Court(Venturi, Rauch and Scott Brown):1972年竣工(『a+u』1981年12月増刊)

cf.6:Musée d'Orsay(Victor Laloux:駅)1900年竣工、改修工事(Gae Aulenti設計):1986年竣工(『a+u』1987年6月)

## 消えゆく境界

Beyond the boundary

齊藤哲也 [日本学術振興会特別研究員]

SAITO Tetsuya  
(Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science)

### [拡大する対象と概念]

保存とは何なのか？ 今この質問に答える事はなかなか難しい。かつて保存と聞けば、誰もが、歴史的な建築物を出来る限り残そうと努めることだと思っていた。新たな創造活動を担う我ら建築家には縁のない事だと。しかし昨今は状況がだいぶ違う。再生、活用というように、現代社会に生きたかたちで使い続けていくことが求められるからである。しかし、よく考えてみると妙な話である。保存することと使い続けることは矛盾するかのように見えるからだ。実際、我々は最近少々混乱の様相を呈している。今回はこの場を借りて、この矛盾めいた話題に触れてみたい。

近年、歴史的建造物に限らずとも各種の既存建造物を再生活用する動きは盛んになりつつある。これは、経済的理由もあるだろうが、それだけではない。従来通りの社会的必要性からの保存だけでなく、個人的または商業的な理由からの保存も生じてきたからである。歴史的価値と言わないまでも、個人的な記憶を身近な空間に留めるためや、前世代の空間感覚や意匠表現を商業的な価値として売りにしようとするものである。こうした保存対象の拡大は、これまでの固定概念を多岐に展開させている。

そして、再生、活用、改修、転生、転用、リノベーション、リニューアル、レストア口など、多くの用語が持ち出された。しかし、これらの用語が意味する中身は極めて不安定である。「リノベーション」と言ってしまうと、スタイリッシュで、何か新鮮な印象を与えるが、保存再生と言っても、さして大きな違いはないのである。

以前、これらの用語を欧語も含めて、分りやすく定義してくれと頼まれたことがある。これは極めて難儀な課題であった。例えば英語の「Preservation」や「Conservation」は、日本ではいずれも保存と訳されることが多いが、完全な状態を保つことを意味する Preservation に比べ、Conservation は浪費なく資源を使うという意味をもち、両者は異なるニュアンスをもつ。そもそも、日本語に存在しない欧語が圧倒的に多いのだ。これまで既存の建築を積極的に扱わなかった日本にとっては Preservation も Conservation も大した違いはなかったであろう。そうした単一的な保存概念が、保存することと使い続けることは矛盾するかのよう認識させていたのである。この矛盾と捉える認識が、新たな用語の

混乱を招いているのではないだろうか。確かに氾濫する用語の区別をハッキリさせたい気持ちも分かる。しかし、従来の用語の定義に翻弄されて実態を見失うのはナンセンスに他ならない。古い枠を乗り越えて、今動き始めた現状を、的確に位置づけていくことのできる、新たな概念と枠組みの確立こそが必要だろう。

### [開発と保存の境界]

動き始めた現状とは、議論の場にも見て取れる。用語がその枠を越える時を同じくして、再生計画に関わる者もこれまでの専門の枠を越えている。凍結的な保存ではもはや建築が生き続けることはできないと悟りつつ、あらたな可能性を模索する保存側。歴史や文化という名を売りに新たなビジネス展開を目論む開発側。両者も互いの範囲を侵し始めている。歴史、文化、環境、経済、生活、豊かさ、安らぎ、とあらゆる時代の要望を満たすべく、この両者は相反する立場を乗り越えて、同じ方向に向かい始めたようである。

しかし、これまで真っ向から対立姿勢をとっていた両者には、警戒心がまだ強い。両者の参加する席で、互いの歯車がすれ違うのである。先に出した話のように、用いる用語にもズレがある。同じ用語を使っても、それぞれ意味する内容が違ったり、同じイメージを抱いていても、用いる用語が違ったり、いらぬ誤解と警戒心を煽り立てる。むろん昨今の新用語に明確な意味の伝達力はなく、お互い自分の使い慣れた用語を拡大解釈し、相手のそれと押し合っているのが現状である。要するに、両者の境界を越えて共通意志を示すイメージと用語が不足しているのである。こうした事態が形となって、保存と新築とが完全分離したような再生建築を、どこかで見たことがあるだろう。

### [境界なき再生プロセス]

先日、あるシンポジウムで聞いた言葉が印象的だった。「保存とは思想である、思想のない保存はない。」言われてみれば確かにそうだ。ちゃっかり借りて言ってしまうと、「思想のない開発はない」し、「思想のない再生もない」のである。古い枠に頼っているから抜け出せないのである。思想という大風呂敷を広げてしまえば、古い境界を越えて話を進めることができる。

思想などと言っても、恐れ多くてワープロを打つ手も鈍くなるが、思想ならぬ、最優先すべきコンセプトを、古い用語の枠に捕らわれず、提示していくことこそが大切だろう。コンセプトにもとづいた新たな創造があつてこそ、晴れて現代社会に息を吹き返すことができるのである。そして、保存に創造性を求めるならば、もはや保存と新築とを相容れないものと捉える必要もない。保存すべき建造物を設計条件の一

つと捉え、積極的に創造活動に組み入れる事も可能だろう。

保存と新築の境界が薄れるならば、手法(技術)の境界も消したくなる。これまで、保存手法は保存のため、新築手法は新築のため、と関わる専門家の違いがそのまま手法の境界も築いていた。しかし本来、手法が目的に拘束されることはないのである。境界を無くして話を進める方法は、先程と同様に、大風呂敷を広げてしまうのが最適だろう。ならば、これら各種の建築手法をすべてまとめて表現できる、包括的な用語が必要だ。

実はこれに適した用語がある。英語で言えば「インターベンション」(Intervention)、日本語で言えば「介入」である。これは、欧州の再生プロジェクトではもはや無くしてはならない表現であるが、日本の建築分野ではまだまだ馴染みがない。その名の通り既存の状態に建築的に手を加えることを意味するが、何より貴重なことは、完全にニュートラルな存在であること。すべての手法を介入手法として扱い、一つ一つの介入手法が保存のためとか、新築のためとか、そうした意味は問わないのである。

思想に基づく新たなコンセプトを定めて、それに適した介入手法を分け隔て無く幅広く選択していく。こうした保存再生の計画プロセスがあつてもいいかもしれない。そして、既存状態に対して、多くの介入が施されたのか、最小限の介入であつたのか、その介入度合が保存再生された建築をひとつの総体として評価する一指標ともなり得るのである。「ここが保存部でここが新築部です。」こういう説明は、出来ることなら、もう聞きたくない。この両者の融合した空間にこそ、保存再生された空間の魅力と意義が達成されるのだ。

これまで、私たちは過去や歴史を別次元のものとして暗黙的に断絶してきたといえるだろう。しかし、冷静に考えてみれば、無条件に白いキャンバスが用意されていることはあり得ないのである。机の上には何もなくても、現場に行けば、限らない情報がある。こうした意味において、保存再生は日々の建築活動と決して無縁のものではない。そこには、新築とも共通し得るコンセプトや手法を持ち込む必要があるし、そこから新たな創造のヒントを見出すことも可能であろう。保存再生プロジェクトには、法規的にも経済的にも課題はまだ多い。しかし、保存再生された建築には、これまで味わうことの無かった魅力が確かにある。まずは意識の境界を外していこう。そして、いつか新たな空間に結晶させる日を迎えよう。

# 建築設計製図第一

Sophomore-studio Work: Spring Semester

## 住宅設計課題:「仕事場のある住居」

"HOME OFFICE"

担当:

八木幸二 [教授] 藤岡洋保 [教授] 宮本文人 [助教授]

YAGI Koji (Professor), FUJIOKA Hiroyasu (Professor), MIYAMOTO Fumihito (Associate Professor)

奥山信一 [助教授] 塚本由晴 [助教授]

OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

那須聖 [助手] 斉藤哲也 [D3.TA] 松本淳 [D2.TA]

長岡大樹 [D2.TA] 吉村英孝 [D2.TA]

NASU Satoshi (Assistant), SAITO Tetsuya (D3, Teaching Assistant), MATSUMOTO Jun (D2, Teaching Assistant), NAGAOKA Daiju (D2, Teaching Assistant), YOSHIMURA Hidetaka (D2, Teaching Assistant)

以下は、授業の内容と講評会の一部を那須(助手)と松本(TA)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

### 1—「最小限住居」

第一課題では、最小限住居(増沢洵自邸)の平面、立面、矩計図のトレースを行い、木造住宅の基本的な構造を理解した上で、10坪程度の小空間の設計を行った。課題は、7件の住宅を各自が選択し、増築するもので、既存の建物の価値や空間の大きさを把握しながら新しい空間を付加するものである。

対象住宅: 山口文象自邸、前川國男自邸、山田守自邸、清家清自邸、直方体の森(篠原一男)、猪股邸(吉田五十八)、増沢洵自邸

### 2—「仕事場のある住居」

第二課題は木造小住宅の設計を行った。まず、浜田山の家(吉村順三)のトレースを行った。トレースの内容としては、平面、立面図、断面詳細図である。

続いて木造住宅の設計を行った。本課題では、「仕事場のある住居」と題して、住居の基本的な空間と仕事場を合わせて計画することによって、諸機能の計画、内部・外部の空間全体を計画する能力を養っている。

講評会においては、建物の形式が、住宅と仕事場の空間とその関係に対してどのような意味を持つか、空間のスケールが適切に計画されているか、といった点から、開口のプロポーションや床のレベル差にいたるまで議論がなされた。初期の段階から、ヴォリュームスタディーによって敷地と建物の関係を検討していたため、庭の取り方や敷地境界との距離などへの配慮は比較的なされていた。



課題敷地: 世田谷区奥沢

### [設計趣旨]

戸建ての住宅とか、オフィスというような建物の種類(ビルディング・タイプ)は、家族が暮らしたり、人が仕事をするための建物として全く疑う余地のないもののように見えますが、実は近代以降の産物であって、ある時代のある社会の中で成立してきたものです。戸建て住宅やオフィスビルを必要としない社会も地球上にはあるのです。近年の情報技術の発達は、在宅勤務や遠隔会議を可能にし、産業構造の変化はソフト制作などの小さな組織による活動領域を拡大しました。こうした変化を捉えて、SOHO(Small Office, Home Office)というような言葉の流行もあります。このことは、住宅と仕事場を明確に区別していた社会とは違った建築の境界条件が、用意されていることの現れと言えるでしょう。

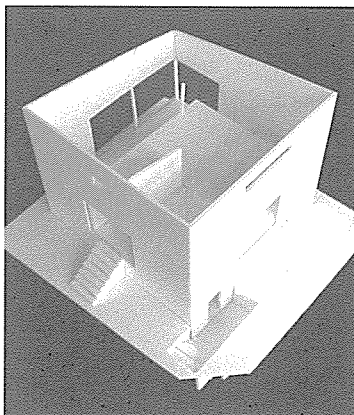
そこで、住む場所と働く場所の関係を考慮して、仕事場を併用した住宅を設計するというのがこの課題です。家族構成は夫婦+子供2人とし、生活と仕事と一緒にある空間はどうあるべきか、そこでの生活や仕事はどのような相互影響を生むのか、といったことに対する提案を期待しています。

### [設計条件]

建物規模: 原則として地上2階、地下室も可。下記の法的制限を守る。また、面積(特に容積)は最大限利用すること。/敷地面積: 175m<sup>2</sup> /用途地域: 第1種低層住居専用地域 /建蔽率(建築面積の敷地面積に対する割合): 50+10=60%、最大105m<sup>2</sup>(角地による緩和10%) /容積率(延べ床面積の敷地面積に対する割合): 100%、最大175m<sup>2</sup>(地下室の面積は、建物の住宅の用に供する部分の床面積の合計の1/3以下の場合、容積率に算入されない。車庫は延べ面積の1/5以下ならば容積率に算入されない。) 第1種低層住居専用地域 /高度地区: 第1種高度地区 /高度地区による斜線: h=5mから1:0.6(北方向から) /道路斜線: 1:1.25 /最高高さ: 10m /構造: 木造

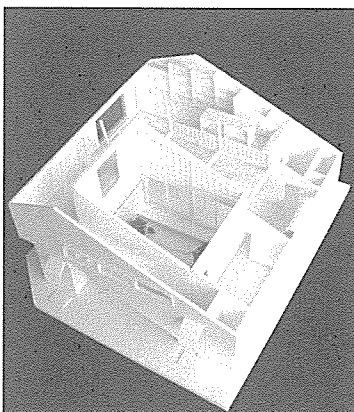
### [課題の進め方]

- 1/200 模型による建物と敷地の関係のヴォリューム・スタディー  
(各自のスタディーを全員で検討することで、多くの可能性を探る。)
2. エスキス
- 1/50 模型・図面による全体の計画と構造のスタディー
4. 図面作成
5. 最終講評



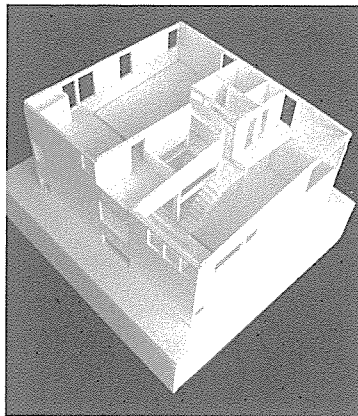
### [奥沢の家] 安藤一将

仕事場である歯科医院を、住居を突き抜けるように計画し、その形そのまま居住スペースとして利用できるよう、上部に食堂を設けている。南側と東側には窓をとり、気持ち良い空間をつくろうとした。



### [わか荘] 内部美鈴

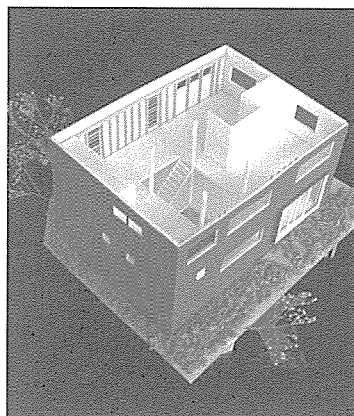
家族構成はフリーのイラストレーターの父親、フリーのグラフィックデザイナーの母親、小学校1年生、3年生の子供が2人である。居間を中心とし、家の中を移動するときは必ず居間を通る。仕事場も居間と階は分かれているが、居間が吹抜となっていることにより、居間の空気を感じながら仕事をすることができる。密集した住宅地に建ち、外からの視線が気になるため、北面は窓のない扉のような壁、また西面は外と完全に閉鎖された家になることを避けるため、外からちらりと中庭が見える程度の開放感を持つよう、外来者(仕事関係)のための階段を付けた。



**[マゾン・ド・ミルフィーユ] 大森彰子**

彫刻家のアトリエとギャラリーを備えた、光の庭を中心とした空間構成の家である。部屋と部屋を壁で区切るのではなく、床の高さの違いによって分け、一つの大きな空間の内部で広々と生活できることを目指した。

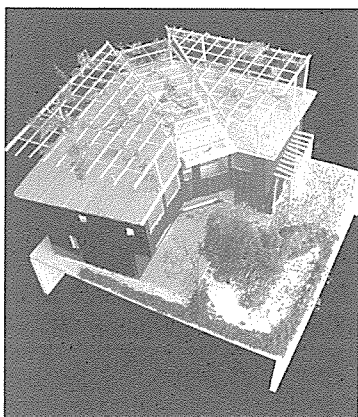
家族は光の庭のまわりをめぐる生活するよう、動線を考えている。また、父親の仕事をする姿を、家族が毎日生活していく上で感じ取ることができるような住まいにした。



**[壁穴住居] 殿井環**

父親が建築家で、母親が専業主婦、子供が小学生の家族である。日常生活を送る場を設計するにあたり仕事場からも自分の家族が見え、家族からも仕事場が見えるように計画している。

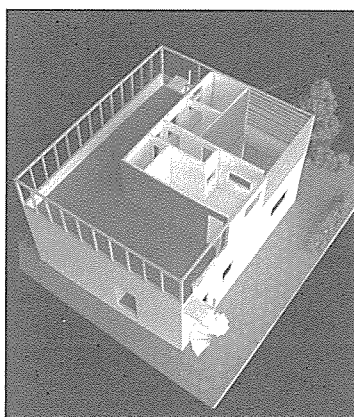
半地下部分に設計事務所の作業場があり、1階のリビングを昼の仕事時間中はクライアントとの打ち合わせスペースとして計画している。



**[翔ぶ家] 小林亜希**

夫が作家という設定。本棚と床の高さの違いで、仕事場と居間を区切った。居間は畳敷きにして、仕事場にいる人との視線の高さが違いすぎないようにした。

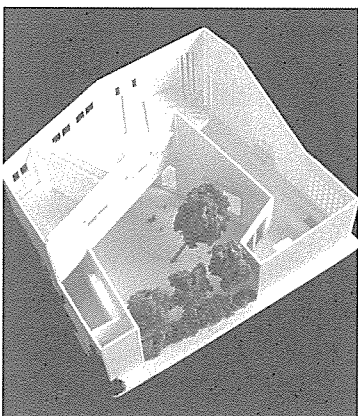
過度に仕事場が家族のスペースにとけ込んでいる。庭にはできるだけ樹木を多く植え、屋上はウッドデッキをはり、藤棚を一面に設けた。



**[甲板のある家] 長友宏**

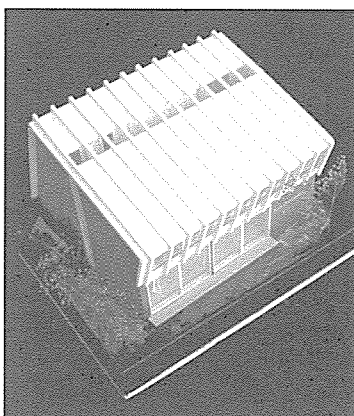
奥沢のようなそれなりに密集した住宅地でも、ある程度プライバシーを確保して、開放的なスペースをつくりたいと思い、2階部分にデッキを設けた。このデッキ周りには植物をつたわせることで、外からのみえかたも考慮した。

仕事場には窓を開け、他の部分との関係が絶たれないように配慮した。



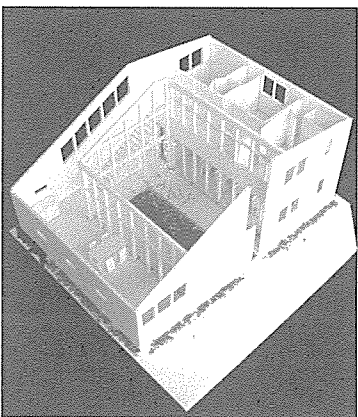
**[木箱] 小林はるか**

職業を化粧品のアドバイザーに設定して、敷地の西側に店舗を置いた。働く場所と住む場所を別にし、中庭を通じてつながるようにした。色とりどりの化粧品の容器を居間から見ることができ、夜それがライトアップされると、さらに目を楽しませてくれる。店からは庭の緑を楽しむことができる。また全ての部屋が庭に面しているので、庭は住居と店だけでなく、寝室と居間、子供室と居間、台所をもつないでくれる。庭を囲むように配置されているので、居間の窓を大きくとっても、外部からの視線をあまり気にすることなく生活できる。



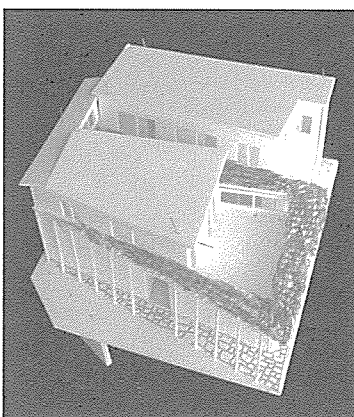
**[奥沢 紅庵] 服部祐介**

理論物理学者とその妻、小学生の子供2人の家。考えることが多い職業ゆえ、機能的には住居部と仕事部とを独立させたい。かといって別棟にするのもこころもとないので、二つを大きな屋根で包んでみた。主な開口部は住居部、仕事部ともに同じ方向にとり、家族が同じ時間に同じ風情を感じられるようにした。内部空間は屋根のカチを最大限に取り込んだ。



**[ぐるりんち] 高澤昌義**

母親が教えるそろばん教室と、夫婦と子供2人の住居からなる住宅である。そろばん教室と住居スペースの両方から見える芝生と木が、それぞれの空間を分離する役割も果たしている。リビング、ダイニング、キッチンから個室までの移動により、違った角度から連続して庭を見ることができる。



**[ティランジアを売る家] 文野義久**

ノダナガフジで装飾された通路が、オフィスをまわって内部に侵入してくる。広がりながら入り込んできた通路の延長部分は、お茶を飲んだり、軽い食事をしたりしてくつろげる場所。家を訪れる人と家族が出会う場所である。

仕事は植物の輸入販売。根を持たない小さな植物「ティランジア」を専門に扱う。土が不要で小型であるため、全国どこでも配送できる。インターネットでの販売がメインであるが、この家に直接訪れても買うことができる。不定休。家族は4人。2人の子供は高校生の姉妹。

# 建築設計製図第二

Sophomore-studio Work: Autumn Semester

## 「ふだんの居場所を考える」

"Design a daily-use Space"

担当:

青木義次[教授] 藍澤宏[教授] 藤井晴行[助教授] 大佛俊泰[助教授]

AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor),

FUJII Haruyuki (Associate Professor), OSARAGI Toshihiro (Associate Professor)

木下芳郎[助手] 斎尾直子[助手] 石原久一郎[M2.TA] 井上ちひろ[M1.TA]

川口真輝[M1.TA] 坂本洋祐[M1.TA] 百々海大[M1.TA] 東伸明[M1.TA]

KINOSHITA Yoshiro (Assistant), SAIO Naoko (Assistant), ISHIHARA Kyuichiro (M2, Teaching Assistant),

INOUE Chihiro (M1, Teaching Assistant), KAWAGUCHI Masaki (M1, Teaching Assistant), SAKAMOTO Yosuke

(M1, Teaching Assistant), DODOMI Dai (M1, Teaching Assistant), HIGASHI Nobuaki (M1, Teaching Assistant)

[講評会]

八木幸二[教授] 奥山信一[助教授]

YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor)

本課題は緑ヶ丘地区の学生のために必要なスペースを考え、設計するものである。課題を進めるにあたり、個人で設計を進める前に3、4人のグループでの調査、ディスカッションと発表会の時間を設けた。これは、ディスカッションや発表会を通して、他人の考え方に耳をむけ、これを積極的に自分の中に取り入れること、また自分の考えを他人への確に伝えることに意識的になってもらうことを意図したものである。また、学生どうしで作品を評価してもらい、他人の作品を積極的にみる機会を設けた。

### [課題主旨]

緑ヶ丘地区周辺に、建築の学部生、大学院生、および6類のためのスペースを計画する。現在設計製図の作業スペースの不足、コンペなど課題以外のグループ作業空間の不足、課題作品や卒業設計を展示するスペースの未整備、講評スペースの不足などの問題がある。CAD、ネットワークの整備が遅れているため、学生が自由に使える端末機がないことも問題としてあげられる。6類全体の学生からは、雨の日や授業以外の居場所がないこと、簡単な飲食をおこなうスペースがないこと、自由に使える外部空間の不足が不満としてあげられている。課題はこうした学生の身近なテーマに対し、具体的な空間を提案することを求めている。

### [設計条件]

敷地: 資料に示す区域内で各自配置する場所を設定する。ただし道路位置の変更、大規模な敷地の造成は原則として行わないこととする。

所要スペース:

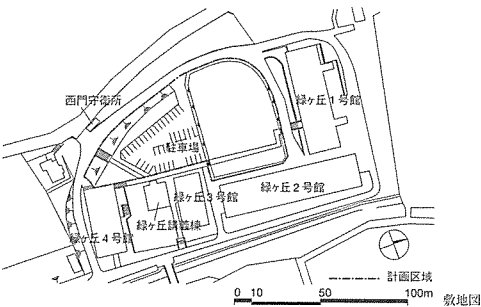
学部生、大学院生がコンペ等で不定期に利用するスペース / 講評会や講演、スライド上映、卒業設計展、OB建築家の展示会などが行えるスペース / 簡単な飲食や喫茶を行うスペース 建物へ搬入出を行うための駐車スペース

その他各自の提案するスペースを積極的に計画にとり入れること。分棟でも可。

規模: 地上2階、地下1階以内とする。延べ面積は1000m<sup>2</sup>程度を目安とする。

構造: 主構造はRCラーメン構造とする。

法規: 特に設定しないが、不特定多数が利用する公共性の高い建物であることを考慮し、2方向避難、居室条件(採光、通風)は考慮すること。



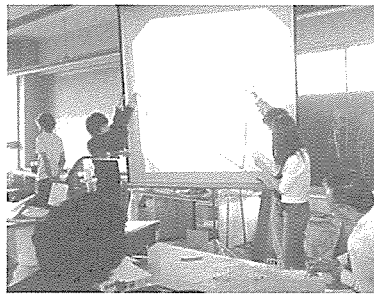
以下は課題のプロセスを木下芳郎[助手]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

## [課題のプロセス]

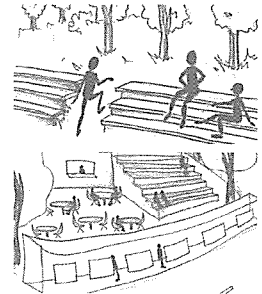
1. 課題説明、敷地調査、研究室へのヒアリング、グループディスカッション: 課題説明の後、3~4人のグループで調査、ヒアリングを行い、どのようなスペースが必要か、それをどのように作るとよいかについて話し合った。

2. 課題内容説明、発表会準備: 課題を考えるヒントとして、現在の製図室や緑ヶ丘地区での問題点等について説明を受け、発表会に向けて準備を進めた。

3. グループ発表会: 各グループが模型やOHPなどで提案を発表した。食事、ディスカッション、作業スペースを連続的に作る提案や、いくつかのスペースを部品として提案したグループ、スロープを建物内の主動線とする提案、小屋のような施設を散在させるなどの具体的な提案がいくつかあった。発表会後どのグループがよかったかを全員が記入し掲示した。提案を具体的にパースや断面図でわかりやすく表現したグループに票が集まった。



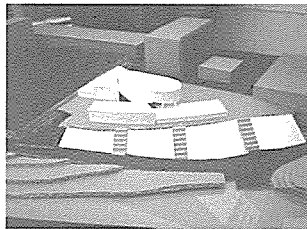
グループ発表会



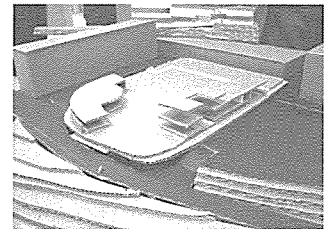
発表資料の一部

### 4. エスキースチェック

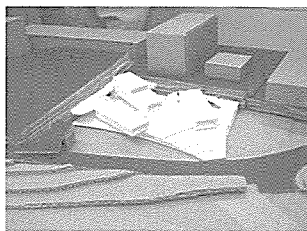
5. 中間講評会: 各自の設計が具体化し、曲線の通路によって形を作る案、広場をはさむように分棟形式とする案、現在の駐車場部分を一面斜面とする案といった様々なものがみられた。



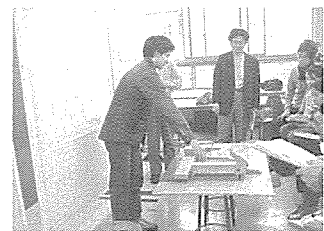
服部裕介



小林はるか



飯田留美



中間発表会風景

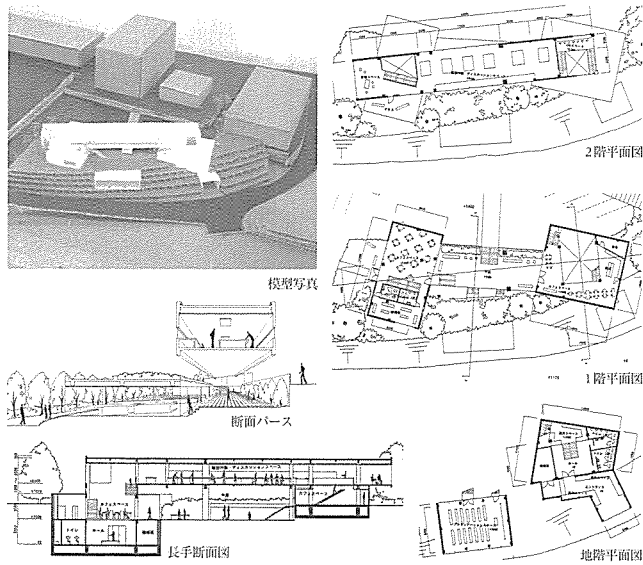
### 6. 図面表現などに関する説明

### 7. 基本図面しめきり

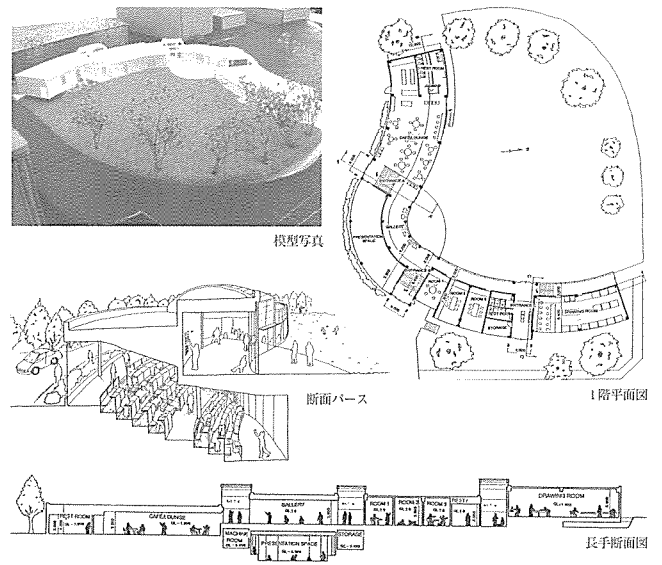
### 8. 最終図面しめきり、講評会

9. 図面掲示: よいと思った作品とその理由を全員が用紙に記入した。学生による評価結果も教官評価と類似したものとなり、評価眼も学びつつあることを確認した。

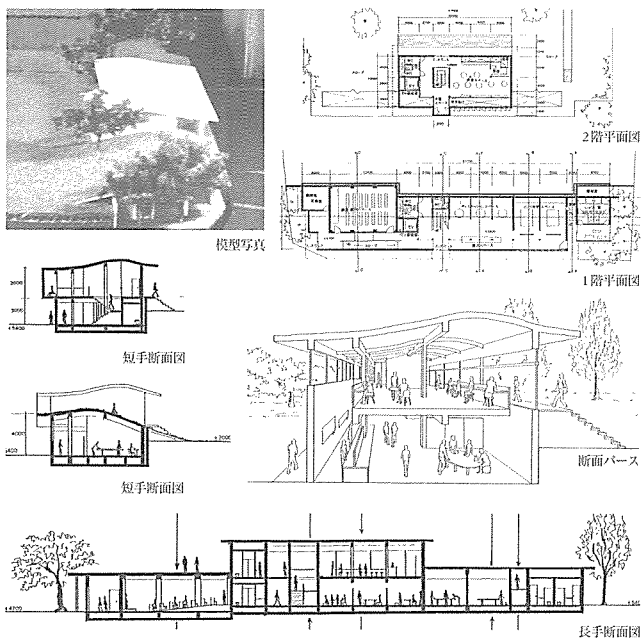
「緑門」 内部美玲 UCHIBE Mirei



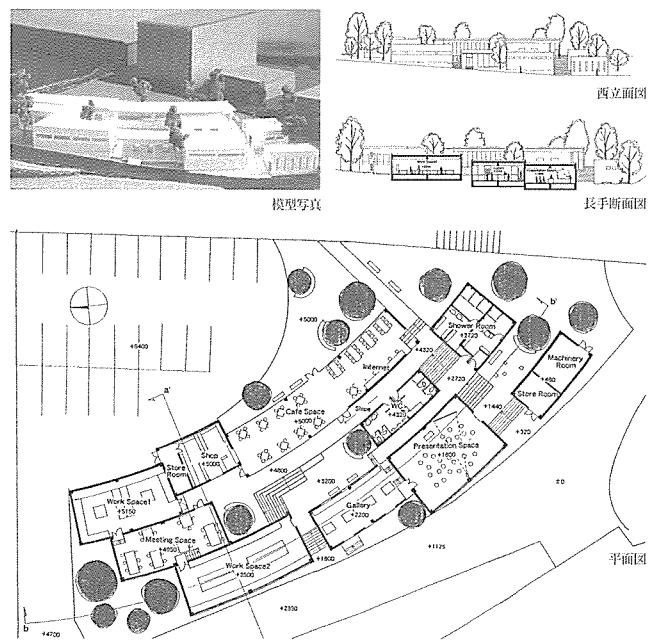
「流」 梶村健 KAJIMURA Ken



「グリーンサンド」 大森彩子 OMORI Ayako



「cube parade」 鈴木彩子 SUZUKI Ayako



〔講評会より〕

**内部美玲案**:上下の棟を離したり、ファサードのガラスとフレームを立体的に分けたほうが良かったのではないのでしょうか。社工棟側の方をもっと考えればよりよかったですよ。——青木

上手く作られています。構造を積極的にデザインに取り込むとよくなりましたよ。——奥山

**大森彩子案**:いい計画です。広場も含めて表現した断面図を描いて欲しかったです。——奥山

模型写真は見せたいところを的確に示せるよう工夫して下さい。2Fの北側は広場と一体化させることを検討してもよかったですのではないのでしょうか。——藤井

**梶村健案**:高低差を2つの階段だけで吸収させるのはもったいなかったのではないのでしょうか。西の端は通り抜けられた方がよかったですと思います。——奥山

駐車場からの見え方をもっと検討するとよいですよ。——青木

**鈴木彩子案**:動線を外部化した考えは面白いですが、周囲に対し閉じてしまい、この環境には適切でなかったのかもしれない。——奥山  
妻面があまり考慮されず淡泊になってしまっています。——青木  
こじんまりとまとまってしまったのが残念です。——藍澤  
模型や立面図と対話しながらスカイラインに変化を持たせるとよいのではないのでしょうか。——藤井

●総評 分棟型の案が出てきたのが例年になく新しかったですが、皆さん自分の好きなところだけしか考えていません。今のうちに構造をきちんと理解して設計して下さい。——青木

もっと楽しんで設計して下さい。——藍澤

建物のまわりをどこまで表現するかよく考えて下さい。——奥山

設備、構造などの授業の内容を設計に生かせるように勉強に取り組んでください。——藤井

建物としてどのように作っているのかをきちんと表現するように注意してください。——八木

# 建築設計製図第二

Sophomore-studio Work: Autumn Semester

## 「都市と住居」

"Urbanity and Housing"

担当:

八木幸二[教授] 奥山信一[助教授] 藤井晴行[助教授]

YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

FUJII Haruyuki (Associate Professor)

木下芳郎[助手] 斎尾直子[助手] 石原久一郎[M2.TA] 井上ちひろ[M1.TA]

川口真輝[M1.TA] 坂本洋祐[M1.TA] 百々海大[M1.TA] 東伸明[M1.TA]

KINOSHITA Yoshiro (Assistant), SAIO Naoko (Assistant), ISHIHARA Kyuichiro (M2, Teaching Assistant),

INOUE Chihiro (M1, Teaching Assistant), KAWAGUCHI Masaki (M1, Teaching Assistant), SAKAMOTO Yosuke

(M1, Teaching Assistant), DODOMI Dai (M1, Teaching Assistant), HIGASHI Nobuaki (M1, Teaching Assistant)

[講評会]

青木義次[教授] 監澤宏[教授] 大佛俊泰[助教授]

AOKI Yoshitugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor),

OSARAGI Toshihiro (Associate Professor)

第2課題では第1課題でのグループ作業をさらに進めたかたちとして、7、8人からなるグループに大岡山駅北側の大きな敷地を与え、各自がその一部に都市型集合住宅を設計することとし、全体のコンセプトの決定、各自の敷地割りから最終的なデザインの調整をグループ内で話し合いながら進めていくこととした。個人の設計を全体との関係の中でみる必要があるため、講評会はグループ全員の模型と1階平面を兼ねた全体の配置図を掲示しながら行われた。また第1課題と同様に、学生同志で作品を評価する機会を設けた。

[課題主旨]

私たちが生活する都市には様々な住まい方がある。たとえば、一般的な住宅地と呼ばれる地域における一戸建て住居、あるいは大規模な開発による集合住宅団地における住まい方もその1つである。本課題ではこのような既存の住まい方にとらわれず、都市に住むということをより実感できる、楽しい住まい方の提案をして欲しい。本課題では、7~8人1組のグループで敷地を分担し、各自が商業施設や公共施設と複合した都市型集合住宅を設計する。敷地は大岡山駅北側にあり、現在東急病院と住宅が建っている。敷地内の建物の関係、敷地の周辺との関係についてよく検討し、各自の設計した建物がグループ全体として魅力的な地域を形成するよう話し合い、全体のコンセプト、敷地割りを決めて欲しい。各自が設計する建物についても、住戸内部のプランはもちろん、住戸同志の関係、住居部分と非住居部分との関係について、豊かな発想力で刺激的な提案をして欲しい。

[設計条件]

所用スペース:

●住居部分(住居部分と非住居部分の比率は8:2程度とする)

●非住居部分:内容は自由とする。

●駐車場(最低7台分を確保すること)

建物規模:原則として地上4階、地下1階以内とする。実際の都市計画規制は異なるが、今回は下記の条件とする。

用途地域:近隣商業地域、第3種高度地区

●建ぺい率(建築面積/敷地面積):70%

●容積率(延べ面積/敷地面積):200%

構造:原則としてRC造または鉄骨造

設備:基本的に個別空調システムとする。

法規:詳細については規制しないが、避難経路、各種斜線規制については十分考慮すること。

以下は課題のプロセスを木下芳郎[助手]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[課題のプロセス]

1. 課題説明、グループディスカッション:課題説明の後グループごとに計画地の全体コンセプトについて話し合った。

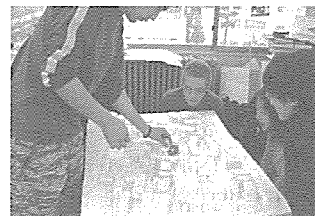
2. グループ発表会:グループで話し合ったコンセプトを模型、図面などを用いて発表した。

3. エスキースチェック:個人の設計を始める。まだ全体のコンセプトがまとまらないグループや、何度も調整を重ねるグループ、各自の設計にほぼ移行したグループなど、グループごとの進め方に差が出てきた。

4. 中間発表:再度グループのコンセプトを中心に発表した。



中間発表会時の全体模型(グループF)



ディスカッション風景

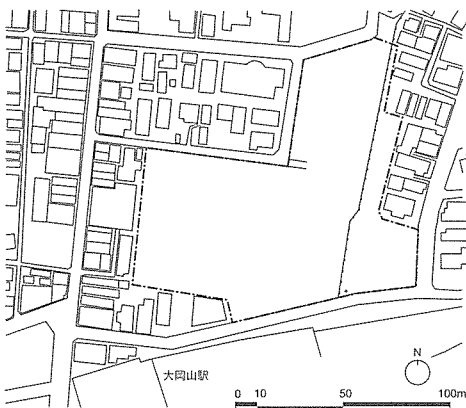
5. 基本図面しめきり、中間講評:グループFが発表した。グループFはこの後も話し合い、全体の構成などを調整した。

6. 図面しめきり、講評会:個人の講評とともに、全グループについて全員の模型と全体配置図を掲示し、グループについての講評も行われた。

7. 図面掲示:図面を掲示し、よいと思った作品とその理由を全員が用紙に記入した。



講評会風景



[各グループのコンセプト]

A: 歩くことで生まれる楽しい場を作るために、実用のための道と楽しむ道を地域に通し、2種類の道との関係で各自が建物を考える。

B: 「間」をキーワードにして小さなボリュームを組み合わせで全体を作っていく。

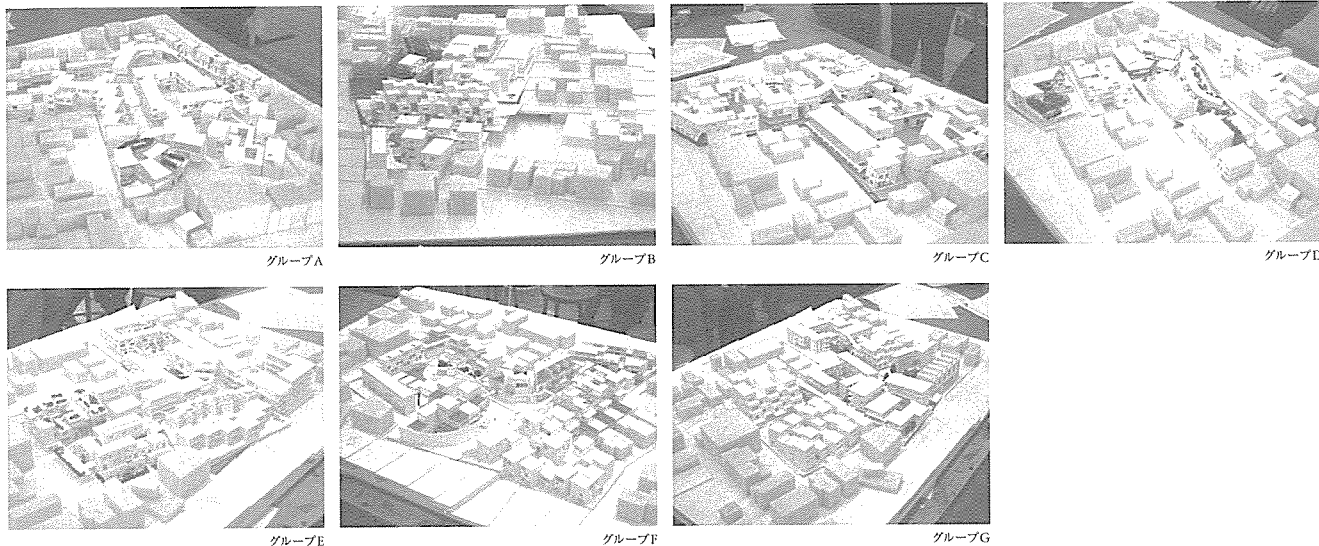
C: 南北に道を通す。その道と隣接した建物との関係から全体を構成していく。

D: 都市とは何かを根本的に考えて、そこから都市の住居について考えていく。(後に「水」をテーマにする。)

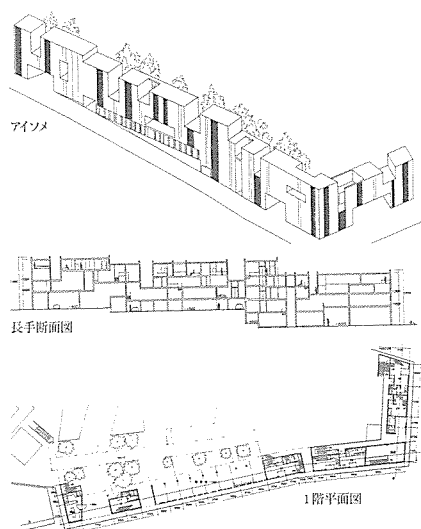
E: 各自が敷地内に広場を設けるという共通点を持ちながら、その他を各自が自由に作る。

F: 「操誘バショ」をテーマにして立体的な通路など様々な空間の仕掛けを設ける。

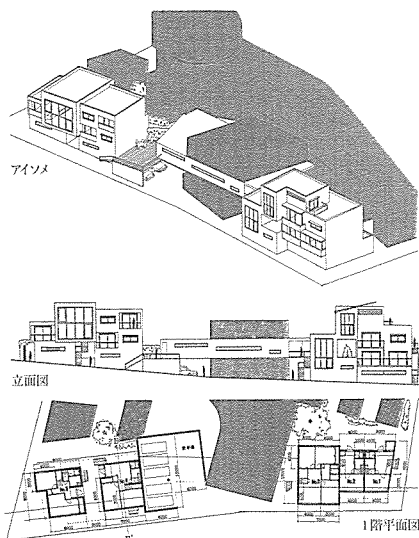
G: 1階を周辺に開かれたスペースとし、2階に住居用の専用庭を設ける。



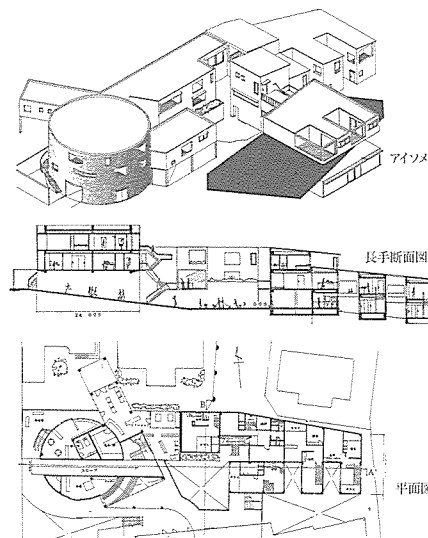
「Building of Wall」大森彩子 OMORI Ayako  
(グループA)



「アリノ巣アパート」小林はるか KOBAYASHI Haruka  
(グループC)



「人家のつぼ」新保佳恵 SINBO Yoshie  
(グループC)



[講評会より]

●グループA 誰か1人でも身障者の人のことを考えてくれる人がいてほしかったです。——青木

大森彩子案:線の種類をもう1本増やして表現することを試してみてください。——青木

通路を演出するように緑を効果的に配置するとよかったですのではないのでしょうか。——八木

●グループC 道の両側の建物の面をそろえるなど、道の両側にもっと一体感を持たせてもよかったですのではないのでしょうか。——大佛

少し過密に配置しすぎているように思います。もう少し整理した方がよいでしょう。——奥山

確かに香港を連想させる過密さですが、床面積自体はそれほど多くないようです。——青木

このグループはレイアウトが比較的良好に考えられています。——八木

小林はるか、新保佳恵案:周辺を意識的に表現してある点が良いです。レイアウトを工夫して、もっと周辺の様子を表現してもよかったです。——八木

●グループD 水と建物との関係をもっと具体的に提案してほしいです。——藤井

配置図は悪くないので、その後のボリュームでの検討に時間をかけてほしいです。——奥山

水というキーワードで安心してしまったのではないのでしょうか。——青木

●グループF 最後まで話し合った結果として、全員の案がよくなりました。——奥山

●総評 第三者がわかるプレゼンをするよう気をつけて下さい。物理的に矛盾しているミスをチェックしなくすように心がけて下さい。雨の日、夜、いざという時についても配慮すると必ずよくなります。——青木

グループ内の調整をしながら自分の主張をすることはこれからも必要なもので、いい経験になったと思います。水や屋上庭園など、時間がたつてからのこともこれから考えてください。——藍澤

要求された縮尺の図面でどこまで考えるか、どこまで表現するかということとはとても重要なことです。自分が描いている図面が何分の一なのか意識して設計するようにしてください。——奥山

遊ぶ時には遊び、やるべき時には集中的に時間をかけて、生活にメリハリをつけつつ、計画的に設計に取り組んで下さい。——藤井

このようなグループでとりくむ課題は今後ないかもしれませんが、これからも他の人と積極的にコミュニケーションをとりながら設計に取り組んでください。——八木

# 建築設計製図第三/第1課題

Third-year studio Work: Spring semester

## 「保育園/幼稚園」

“Nursery school”

担当:

**曾我部昌史** [非常勤講師、東京芸術大学]

SOGABE Masashi (Guest Professor, Tokyo National University of Fine Arts and Music)

**坂本一成** [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

**中井邦夫** [助手] **足立真** [助手] **安森亮雄** [D3.TA] **久野靖広** [D2.TA]

NAKAI Kunio (Assistant), ADACHI Makoto (Assistant), YASUMORI Akio (D3, Teaching assistant),

KUNO Yasuhiro (D2, Teaching assistant)

### 保育園/幼稚園

- 保育園あるいは幼稚園と呼ばれる、小学校にあがる前の子供たちが過ごす場所の設計。
- よくある保育園/幼稚園にとらわれず、諸室などのプログラムは自分で立ち上げる。
- 子供たちが生活する(起きている)時間のほとんどを過ごす場所であることに注意。
- 外部のスペースを、建物としてではなく、建物の一部として検討し計画する。

### [設計条件]

敷地: 世田谷区等々力5丁目。区立ねこじゃらし公園の前(右下地図参照)

延床面積は400m<sup>2</sup>程度(最大で700m<sup>2</sup>)

子供は全部で30人(3歳~6歳=小学校にあがる前までの子供たち)

保育時間は9時から18時(延長保育を前提にしてもよい)

火災時などに子供が避難しやすいこと等、計画に留意

### [提出物]

配置図(縮尺 1/100): 1階平面と兼用可

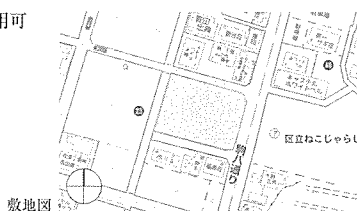
平面図(縮尺 1/100)

立面図(縮尺 1/100): 2面以上

断面図(縮尺 1/100): 2面以上

パースあるいは模型写真

(以上をA1×2枚にまとめる)



敷地図



敷地写真



### 曾我部昌史

SOGABE Masashi

1962年 福岡県生まれ

1988年 東京工業大学大学院修士課程修了

1988-94年 伊東豊雄建築設計事務所

1994年 東京工業大学工学部建築学科助手、ソガベアトリエ設立

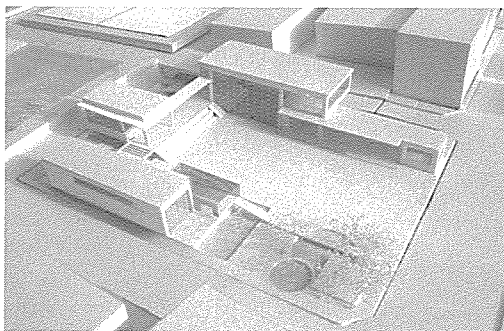
1995年 みかんぐみ(加茂紀和子、熊倉洋介、竹内昌義、マニユエル・タルディツの5人によるパートナーシップ)共同設立

2001年 東京芸術大学先端芸術表現科助教授

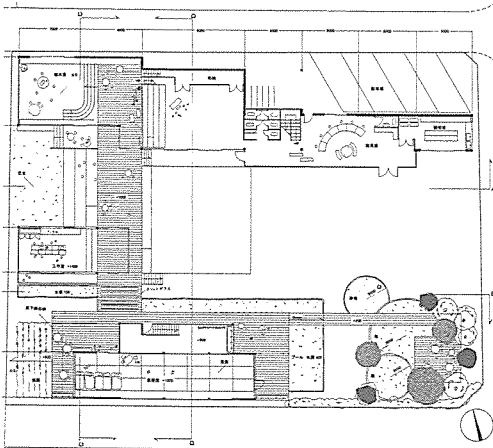
主な作品: 信濃大町の家、相模原の家、NHK長野放送会館、佐倉の家、八代公民館、逗子の集合住宅、押上の家

以下は2001年5月15日[火]に行われた講演会の模様を、学生編集員の小池秋彦[M2]、卜部祐加[M1]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(以下略)。

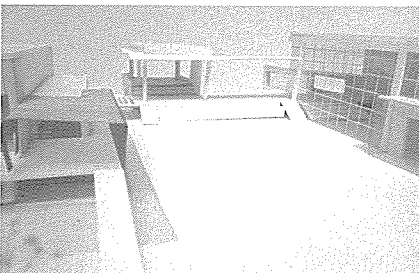
## 「STAGE」 深澤千賀子 FUKASAWA Chikako



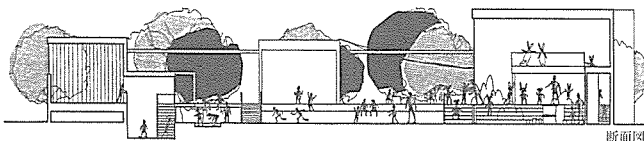
模型写真



1階平面図



模型写真



断面図

深澤——ステージを作り、そこから子供たちが緑道方面やねこじゃらし公園方面を見通しながら遊べる建物を作りました。また、ステージを配置して、そこからすべての遊び場にアクセスできるように、色々な建物をかみ合わせていきました。

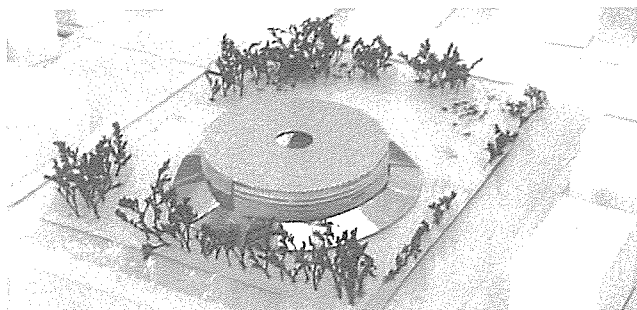
曾我部——場所ごとの見え方が魅力的になっているということはいま方向に進んでると思うんだけど、分棟化したそれぞれをどのようにつなげるかということについて無頓着になってしまったところが気になります。

深澤——屋根をかけることを検討していましたが、前に曾我部さんが「移動の時には傘をさせばいいんだ」と言っていたし、自分が子供のころは冬でも外で遊んでいたと思うので、最終的に建物の間は外部にしてみました。楽しく遊べるんじゃないかなと思ってます。あと、-800レベルの半地下を作り、デッキの下を通して園庭が見えるようにしました。そこは、ちょっとしたお仕置き部屋みたいな場所です。

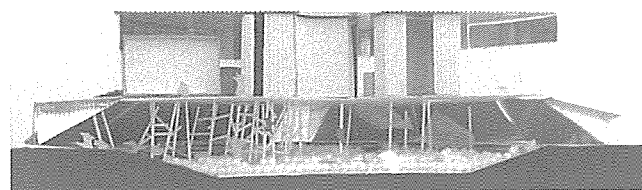
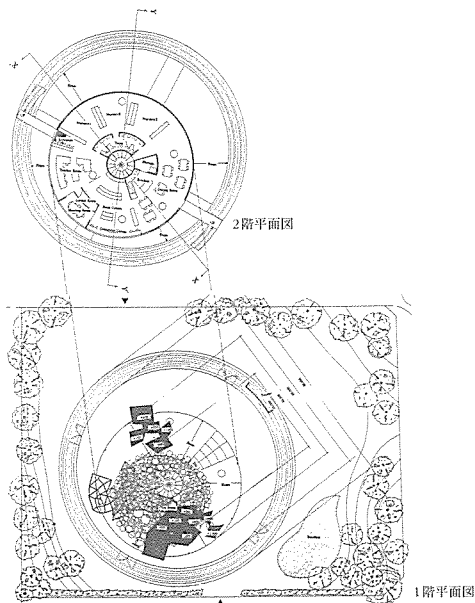
塚本——そんなことをする必要はあるの？

深澤——私が通っていた保育園にそういうところがあったんです(一同笑)。

「すべるUFO」劉敏永 YU Min Yong



模型写真



断面模型

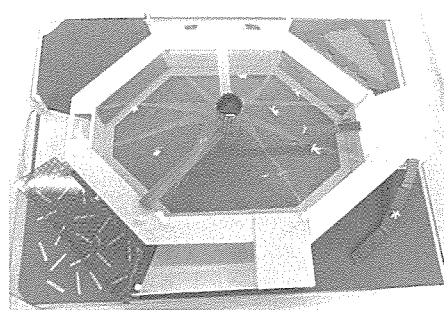
劉——違う機能をもった空間を遊具でつなぐことで全体的にアクティビティを出そうと考えました。具体的には半地下と中1階の部分をジャングルジムやネット、滑り台でつなげたり、穴を開けて1階にいる人と地下にいる人がコンタクトを取れたりすると面白いかなと思いました。それと、内部と外部を滑り台でつないで違った2つの空間をつなげました。

曾我部——内部は元気があっていいよね。建物全体の計画は、とらわれるものは何もないという計画になっていて魅力的なんだけど、一方で外部に対する説明がなかったり、計画の案としてもあまり感じられないというのが気になります。滑り台で降りた先が外部であるということ以外に何かあるのかな？

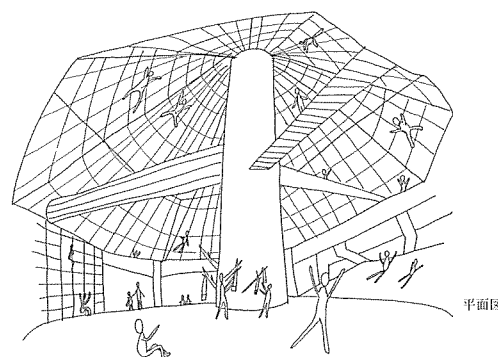
劉——建物が全体的に遊具化しているから、外もそういうもので埋め尽くすとあまり良くないんじゃないかと思って、ちょっとした山を作ったり、緑地をつなぐ感じにして、あとはインパクトのある建物を作りました。

曾我部——確かにインパクトはあるけど、配置に対する説明などまだまだ色々語れるはずだよ。木がなんとなく便宜的に外周を埋めるように植わってるのも、余白が心配だったからとりあえず描いたみたいで、建物を見てるとその辺がもっと期待できる気がします。

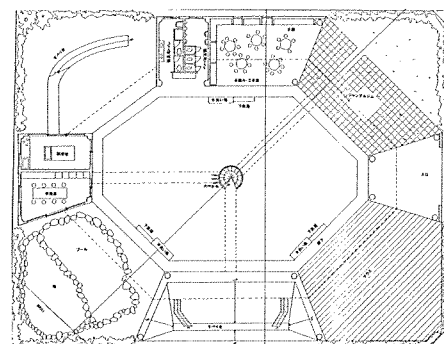
「綱山幼稚園」古挽翠 KOBIKI Midori



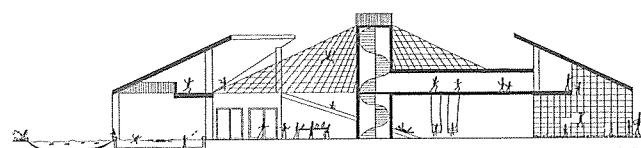
模型写真



平面図



平面図



断面図

古挽——園児が敷地内のどこにいても楽しいような、遊園地みたいな幼稚園を考えました。内も外も関係ない空間を作りたいかったので丸い感じになりました。まず園児は入り口から入り真ん中の荷物置き場に荷物を置いて、中に一度入ってから好きなところに遊びに行くようにしました。ネットへは中の螺旋階段から行くこともできるし、こちらの小さい滑り台から登っていくこともできます。

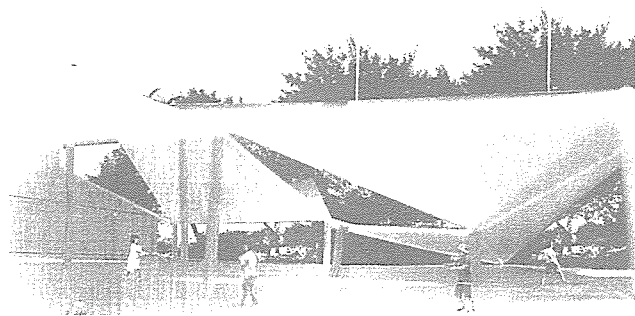
塚本——この作品はこういう風に子供たちがいれればいいなっていうイメージがはっきりあって、それがどうやれば建築みたいなものになるのかという方向で考えている。先に建築があってそれを保育園にしていこうというよりは、イメージから始めているように見えてところが素朴だけどいいと思います。

曾我部——これはモノとしてはすごく微妙なんですよ。というのは、建築的にクリアしなきゃいけない最低ラインを越えてない。

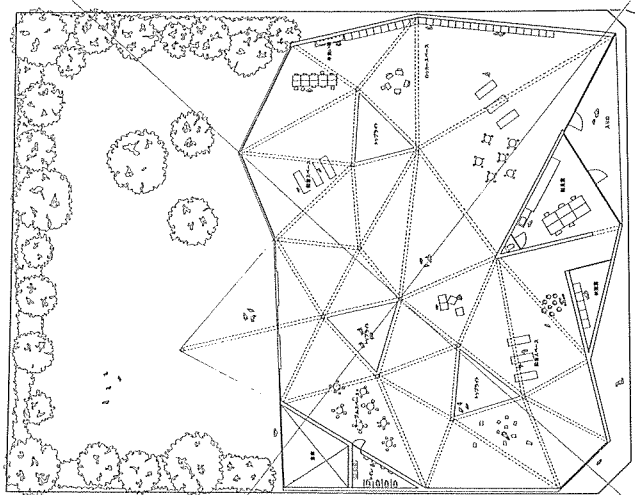
塚本——建築的にどうまとめていこうかをしっかりやる必要がありますね。ネットのところは不思議なやり方で面白いので、そういうところを強調していくといいかも。図面の書き方はまだ未熟です。そういうことも勉強したらもっとよくなるよ。

曾我部——自由さを失わないようにね。

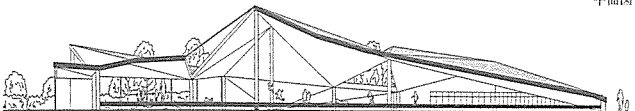
「先天性人間行動科学幼稚園」本橋良介 MOTOHASHI Ryosuke



内観イメージ



平面図



断面図



模型写真

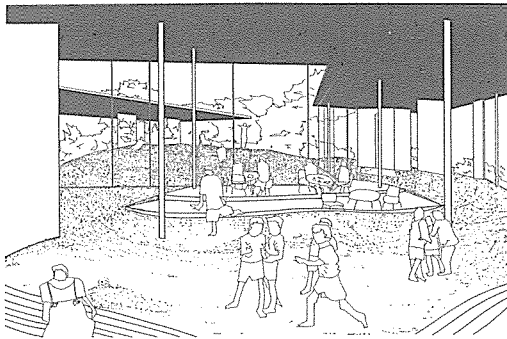
本橋——いろいろなアクティビティを想定して建築を作るという過程ではなく、ある環境に応じて園児は行為をすると考えて、その環境というのを建築としてどのように作れるかなと考えました。具体的なアクティビティを考えるのではなく、空間が高い低い、狭い広い、明るい暗いなどの環境を整えることによって、園児が想像力を掻き立てられるような建築にしたいと思いました。

曾我部——屋根の形によって内部空間の変化を作ることが可能なのではないか、という着想を得た段階で終わってしまい、具体的なフィードバックがなさ過ぎると思う。

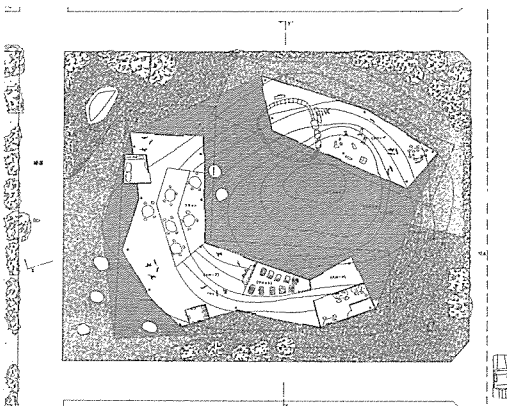
塚本——形式を変えることが目的だつてすごく意識してるんだよね。通常だったら通らないような天井高の屋根を作ってみたりして、でも幼稚園だからいい、という正当化のプロセスでいいんだろうか？

奥山——課題の内容に対応したプランニングをどう考えるかということに関してはまったく回答してないんじゃないかな。ただ、新しいスペースを作りたいという気持ちはわかりますよ。でもそれに具体的な内容が重なっていないから設計課題にはなっていない。スペースを作る課題になってしまい、そこに人間がどう関わるかというところまでいかなかったのかな。

「等々力幼稚園」松本卓士 MATSUMOTO Takashi



内観イメージ

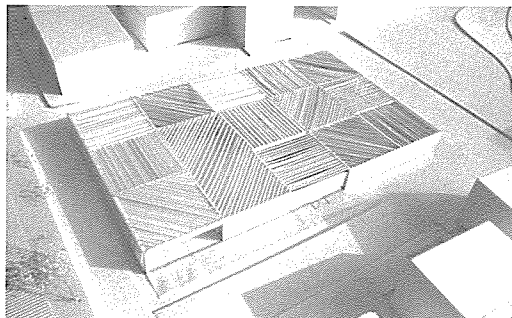


平面図

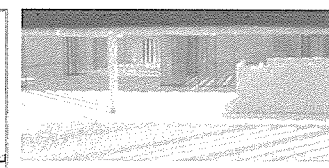
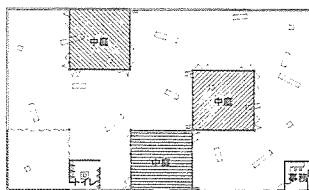
松本——緑道と公園を連続的に扱いたいと考え、子供たちを部屋で分けるのではなく、外部の状況に対応した斜面を設定しました。斜面に色々な性格を与えることで、スペースをつくりました。

曾我部——敷地と建物の大きさのバランスが決定的にまずいと思う。

「光の変容体」伊庭野大輔 IBANO Daisuke



模型写真



模型内観



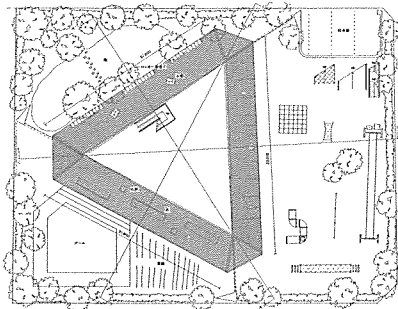
断面図

伊庭野——時間によって子供の活動が変わると考え、太陽光について考えました。全体をルーバーの屋根で覆った大空間にして、ルーバーが様々な角度をとることによって光の差しこむ方向が変化し、明るい場所が移動していくような建物を作りました。

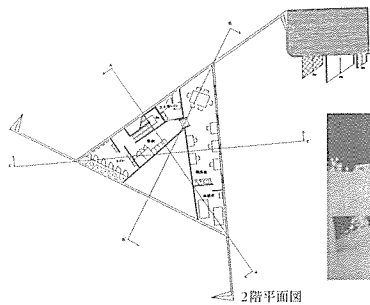
塚本——場所ごとの光の違いをどう使うかがわからない。

奥山——実際はあなたの想像するような明暗にはならないと思います。

「またたび幼稚園」油谷千佳 YUTANI Chika



1階平面図



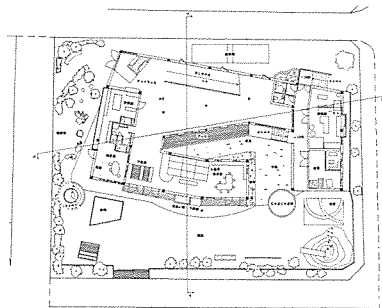
2階平面図

模型写真

油谷——機能を2階に上げて、1階を全部可動間仕切りにすることで、いろいろな空間を作れると思いました。保育室としてのデッキとその前の園庭にそれぞれ違う性格を与えたので、全部扉を開ければ自由にどこでも好きなことをして遊べます。ひとつの作業に集中したいときはドアを閉めてそこだけ分割できるようになっています。

坂本——構造がこの建物を決定付けていて、それが魅力的になる可能性もあるし、逆に幼稚園みたいに柔らかなスペースに対しては大げさな感じがして不安もありますね。

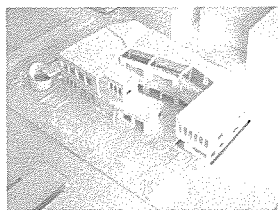
「坂道のたまり場」小林和子 KOBAYASHI Kazuko



1階平面図



2階平面図



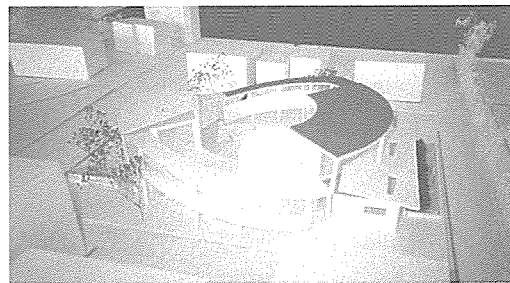
模型写真

小林——敷地をなるべく大きく使いたいと思い、階段ではなく緩やかな長いスロープを使って考えました。スロープを動き回る子供たちがどこにたまるかを考え、スロープの出発点とか折り返し地点とか一番上の点に子供達が集まると思い、そこを保育室にしました。

曾我部——道路とつながってるあたりはうまくいっていると思うけど、それ以外が階ごとに分節されてて活かしきれていない感じがあります。

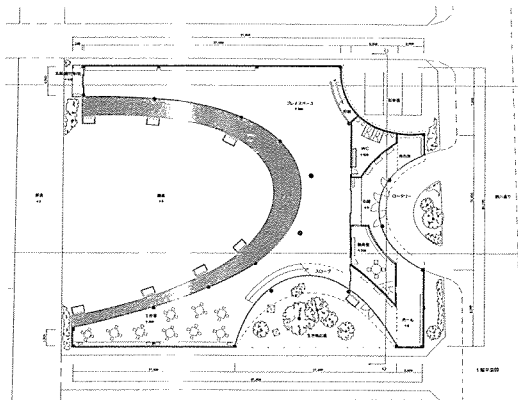
坂本——スロープで作ろうとしたことは理解できるし、それはそれでいいと思いますが、やっぱりまとめ方がうまくないね。

「こども館」筒井摩由子 TSUTSUI Mayuko



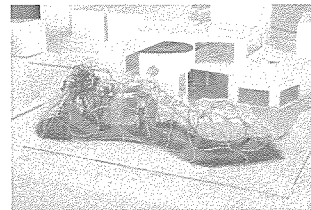
模型写真

「凹凹幼稚園」鎌田詩織 KAMATA Shiori

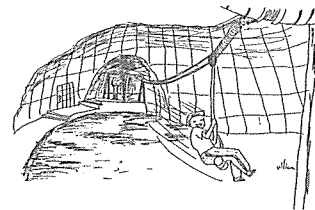


1階平面図

「わんぱく幼稚園」宮崎昭子 MIYAZAKI Akiko

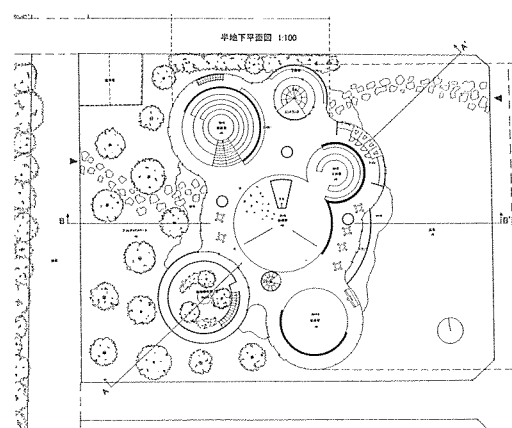


模型写真

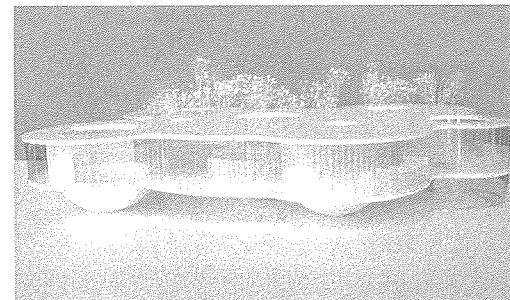


遊具のスケッチ

「トリノスホイク」吉川寛華 YOSHIKAWA Hiroka



平面図



模型写真

# 建築設計製図第三/第2課題

Third-year studio Work: Spring Semester

## 「マルチ・シネマ・コンプレックス」

"Multi Cinema Complex"

担当:

**小嶋一浩** [非常勤講師、シーラカンス アンド アソシエイツ/東京理科大学]

KOJIMA Kazuhiro (Guest Professor, C+A, Tokyo University of Science)

**坂本一成** [教授] **奥山信一** [助教] **塚本由晴** [助教]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

**中井邦夫** [助手] **足立真** [助手] **安森亮雄** [D3, TA] **久野靖広** [D2, TA]

NAKAI Kunio (Assistant), ADACHI Makoto (Assistant), YASUMORI Akio (D3, Teaching Assistant),

KUNO Yasuhiro (D2, Teaching assistant)

[ゲスト・クリエイター]

**金箱温春** [非常勤講師/金箱構造設計事務所]

KANEBAKO Yoshiharu (Guest professor, Kanebako Structural Engineers)

[プログラム]

新しいタイプの映画館。

日本にはまだあまりないタイプ(渋谷などにある3館くらいがひとつのビルに入っているものとは異なる)。

10館とかそれ以上のシアターの集合体。

各々の館は別々の映画を上映してもいいし、人気大作を10分おきにスタートすることで、いつ行っても待たなくていいといった使い方もできる。

たくさんの館があることで、マイナーな映画も上映できるようになる。

[条件]

敷地:渋谷区渋谷1丁目23(現況:東急駐車場+店舗等)/延べ床面積は自由/最低でも全体で500人程度の席数を確保すること/開演時間は24時間/各シアターは10人用でも100人用でも可(ただし100人用及び300人用を各1必ず含む)

[設計上のテーマ]

劇場系の施設は、同時に多くの人々が動くので、住宅などとは異なった視点でのアクティビティの計画が必要である。(特に上演終了後はいっせいに人が外へとあふれ出す。海外では映画館の出口の扉がずらりと歩道に直接面していることも多い。火災などの避難時と同様。)数百人がある時間をホール内で共有し通過していくということはどう設計に反映するのかを考えてほしい。多くの館が集合していること、それらがいっせいに使われたり個別に使われたりすることを考えた共通スペースの計画としてほしい。/人が集まってパニックにならないような動線計画。/十分な数のトイレ。/飲食売店あるいはバーカウンターやカフェレストラン。/グッズ売り場などを考慮し、快適で便利な施設とする。

[提出物]

配置図(縮尺1/200):一階平面と兼用可

平面図(縮尺1/200):各階

立面図(縮尺1/100):二面以上

断面図(縮尺1/100):二面以上

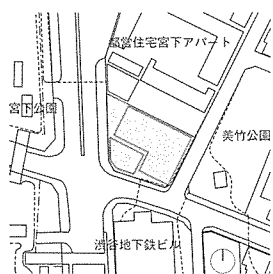
内観パースあるいは内観スケッチ:数カット

設計主旨分:400字以内

(以上をA1×2~4枚にまとめる)

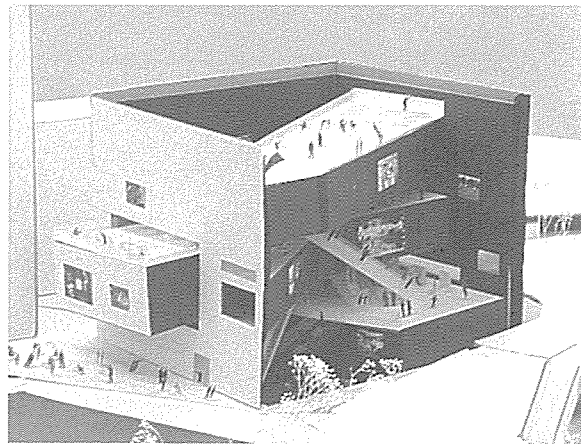
※着彩、写真の活用など、図面のプレゼンテーションに留意すること。

模型

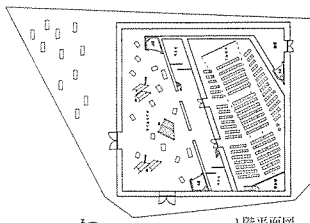


敷地図

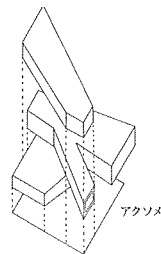
## 「ながらシネマ」油谷千佳 YUTANI Chika



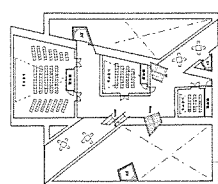
模型写真



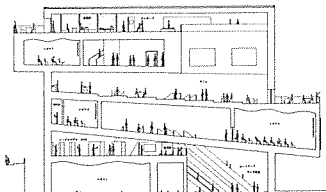
1階平面図



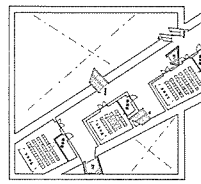
アクトム



3階平面図



断面図



5階平面図



模型写真

油谷——映画館が7つあると上映の間隔が短くなって来やすくなると思いますが、これはもっとラフにと考えて「ながらシネマ」ということを考えました。映画以外のことを主体としてこの建物にやって来て、そのついでに映画を見られるようにしました。

小嶋——やりたいことが形の上でも空間的にもはっきりしていて、かなりスタデイルしてるから、精度は結構上がっている。

金箱——構造がよくできている。閉鎖していい空間と開放したい空間が交互になっていて、建築の閉鎖と開放の関係と構造の作り方がうまくいっている。

坂本——思い切りがいいという感じがするね。

奥山——内部は完全に人工照明なんですよ。

油谷——スリット状の開口からのぼやとした光と人工照明です。

奥山——チューブの中は構造が許す限りもっと孔をあけて、光を入れてもいいんだよね。真ん中のスペースがちよっと中途半端。

塚本——コンポジションとしては面白いんだけど、冷静に見たときにたったこれだけのシネマを成立させるときにどうしてこんなことをしなくちゃいけないのか、というのがある。



**小嶋一浩**

KOJIMA Kazuhiro

1958年 大阪府生まれ

1982年 京都大学工学部建築学科卒業

1985年 シーラカンスを共同で創設

1988年 東京大学工学部建築学科助手

1994年~ 東京理科大学理工学建築学科助教

1998年 C+A(シーラカンス+アソシエイツ)に改組

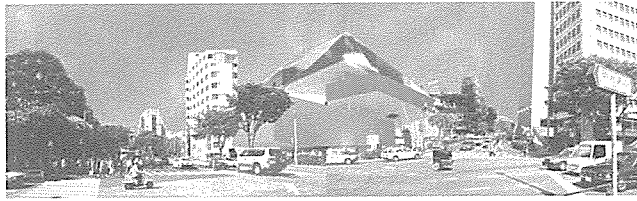
主な作品:氷室アパートメント(1987)、HOUSE TM(1994)、千葉

市立打瀬小学校(1995)、吉備高原小学校(1998)、ビッグハート出

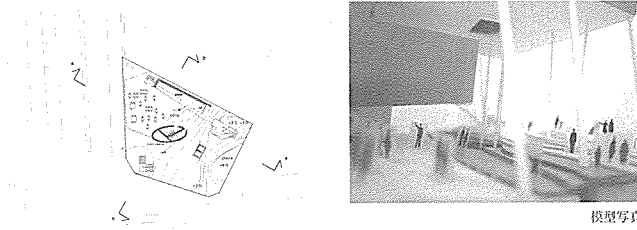
雲(2000)など

以下は、2001年6月14日に行われた講評会の一部を、学生編集委員の鈴木悠子[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

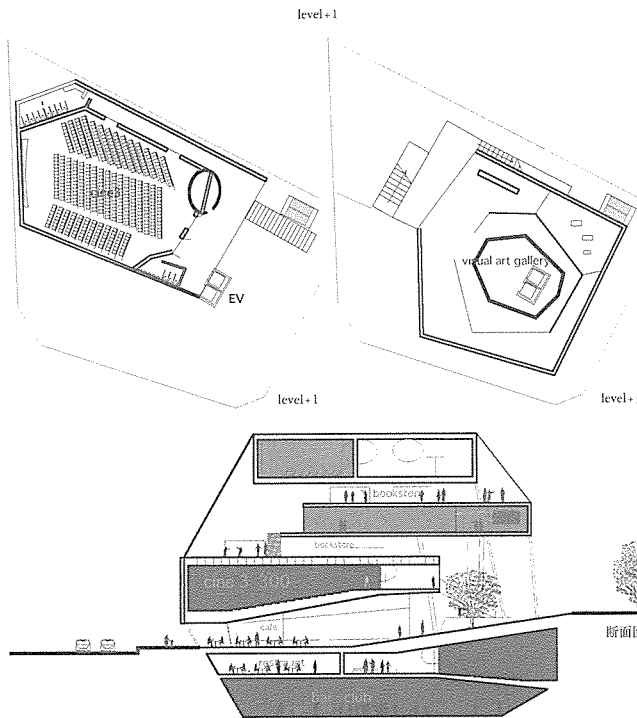
「shibuya-cinema-theque」大森真樹 OHMORI Masaki



模型写真



模型写真



**大森**——ボリュームを積層し、そのボリュームを少しずつずらしていくことによって、いろんな場所が横断しあい、別の使い方が出来たり、ホワイエとシネマという関係ができるようなことを考えました。

**塚本**——これは方向とか殆ど考えていないんじゃないかな。ダイアグラムのスタディということで評価している。

**小嶋**——やりたいことを作る力はある。模型で出来ているものは少なくともオール鉄では出来る。でもそれではコストが高いいので、何とかするのが構造設計だ、という話が東大でありました。模型をテープで貼るといのは、全体的にアンバランスでもったいない。

**金箱**——実際には縦断線とか出てくるから、それで支えるかももう少し構造ができてよかったんじゃないかな。

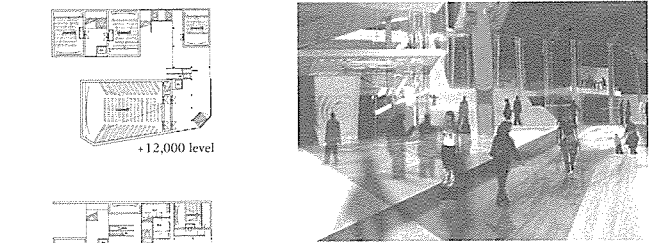
**小嶋**——ブックショップは実際は模型ほど透明でなくなるから、本箱が上下を繋ぐものに使えないとか、丁寧に空間の性格を読むべき。

**坂本**——周りの環境とかどううまく対応しているし、よくできていると思う。だからこそこれを成立させる構造をよく考えてほしい。柱を細くしたいけど、普通は出来ない。ほかの部分でうまく横力を受けるとか、そういうことを検討すればさらに良くなる。

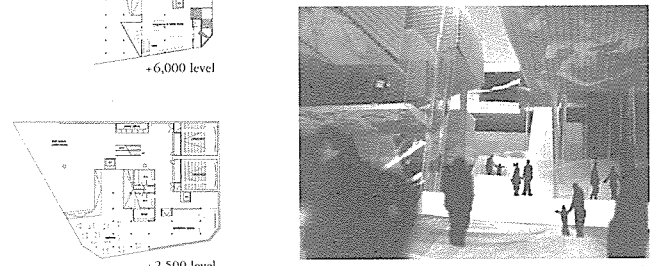
「CINEMA-COMPACT.COMPLEX.」松島潤平 MATSUSHIMA Junpei



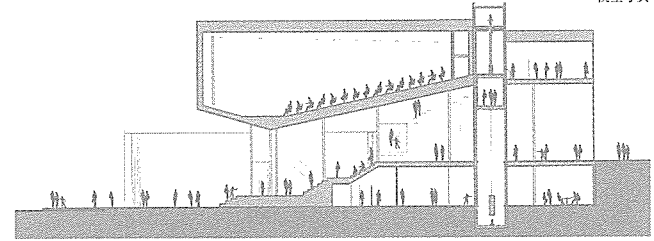
模型写真



模型写真



模型写真



断面図

**松島**——映画を観る空間や観たあとに出る空間が、詰まった感じではなくコンパクトに収まるようにしました。明治通り沿いに屋台村などを設定し、道の連続でもあったり公園でもあったりするような、渋谷の人々の活動の拠点になるような場所として考えました。

**小嶋**——写真のコラージュとか模型もよくできている。写真では柱が消えているけど、もう少し表現してもいい。ちょっと重ためのものをどれぐらい持ち上げるといいのかななどをよくスタディしている。

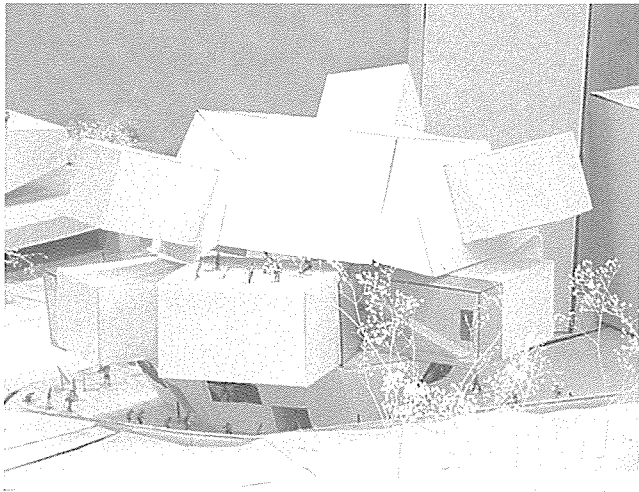
**奥山**——モンタージュは相当うまい。

**塚本**——「シネマコンプレックス」とは何かという回答というか、そのことによって建築ってこういう風に面白いんだよ、というのがない。バリエーションがあるのはいいけれど、ゆったりとしているから楽な状況を作っている。

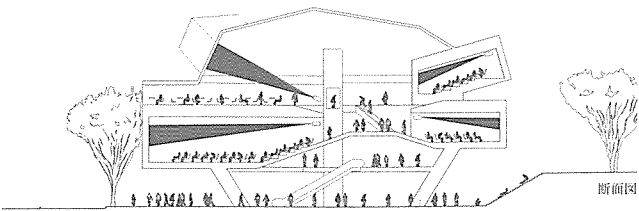
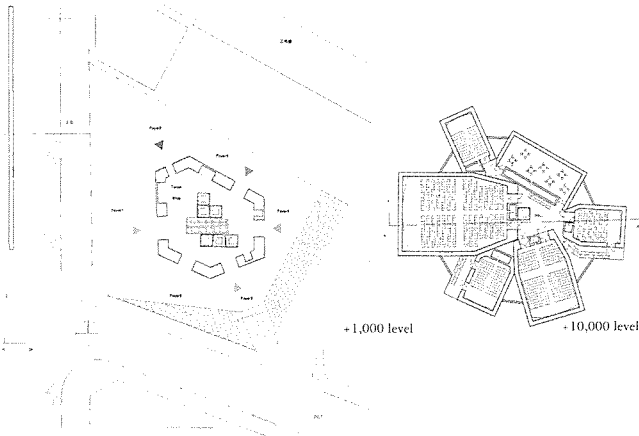
**小嶋**——建築の新しい可能性を開発しているというよりもすでにある言語を使って上手に描いている、ということなんだよね。ただ透明にするのは図式として判るけど、透明に見せるための努力をやめているので、きれいすぎる。

**塚本**——いろんなものとの相談が足りない。

「Wall Screen」服部拓庸 HATTORI Takuyou



模型写真



断面図

**服部**——小さなマッシブな躯体から映画館のボリュームがつきだしているようなものを考えました。その時に、下にできたスペースをホワイトエにすることによって、人が歩きながらいつの間にか映画館のホワイトエに入って映画を選ぶことが出来るような構成にしました。

**塚本**——全部を同じレベルにする必要ないんじゃないの？

**小嶋**——断面図はどうなっているの。フロアがあるのに一枚の図面ですまそうとするから、わけが分からなくなってしまう。

**服部**——一番大きいボリュームにはエレベーターで上がって、小さいのには階段があって、そこから入ります。

**奥山**——パビリオン形式の建物の周りを外部空間が囲む構成は面白いけど、中心部の平面的な処理が悪い。

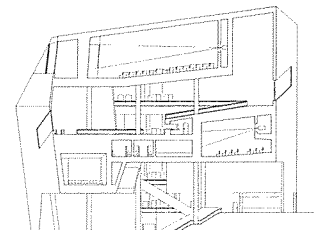
**塚本**——魅力的なプロジェクトだと思うけど、問題点が多すぎる。

**小嶋**——センターコアを広げるかもう少し積層するかしかないんだけど、最後まで最初のイメージを縛り付けたままやろうとしたので、うまくいかなかった。無理して進めてもうまくいかないというのを認めて、展開していけばもっと楽しくやれる。それが出来ない人が「イメージは早い段階からあったけれど、あまり進展していない」と言われている。

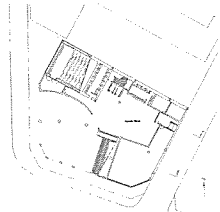
「Big Spiral」相楽正博 SAGARA Masahiro



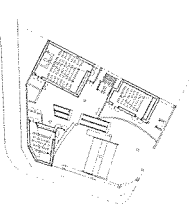
模型写真



断面図



level 1



level 3

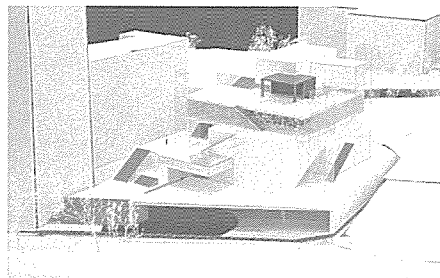
**相良**——渋谷から原宿に向かう人の大きな流れを敷地の中に取り込むことが、映画館を活性化させることになると思いました。スロープ状になっている大きな外部スペースに大きなスクリーンを作って映画、CMを流して映画を観るという行為を誘発しようと考えました。

**小嶋**——断面図がとてよくなった。模型とちゃんと応答している。

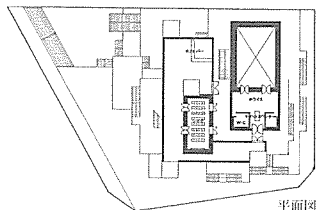
**塚本**——殻みたいなのが表現として面白いと思うんだけど、殻は殻、平面は平面みたいになってしまっている。建築でもあるんだけど、一つの大きな映写装置として見えてくると、面白いんだけどね。

**坂本**——この模型だから魅力的なんだよね。大きなシステムみたいなものはあるけど、それを使いながらの平面が出来ていないんだ。

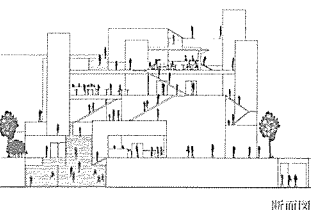
「借景式石組枯山水庭園」伊庭野大輔 IBANO Daisuke



模型写真



平面図



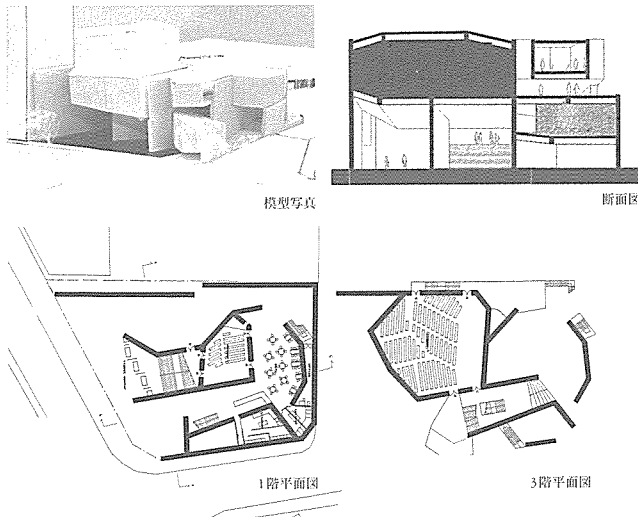
断面図

**伊庭野**——ボリュームで構成された躯体をいろいろ重ねることで、マッシブな環境を作ろうと思いました。動線を考えたときに、まずエレベーターで上の方に吸い上げられて、まるで水が流れるように、人が段差とか隙間とかを縫って流れ落ちていきます。

**塚本**——シネマコンプレックスにある表裏を考え始めるともっと複雑になると思うんだけど、全部表で作っているので物足りない。建物を使うプレイヤーが全然足りない感じがする。容しきない感じ。

**小嶋**——宮下公園から見たときにレベルが繋がっているように見えて面白いんだけど、最後が重たい感じだね。もっと本格的にやらないと、建築家にはならず企画屋さんになるのかなと思ってしまう。

「cinetiple」本橋亮介 MOTOHASHI Ryosuke



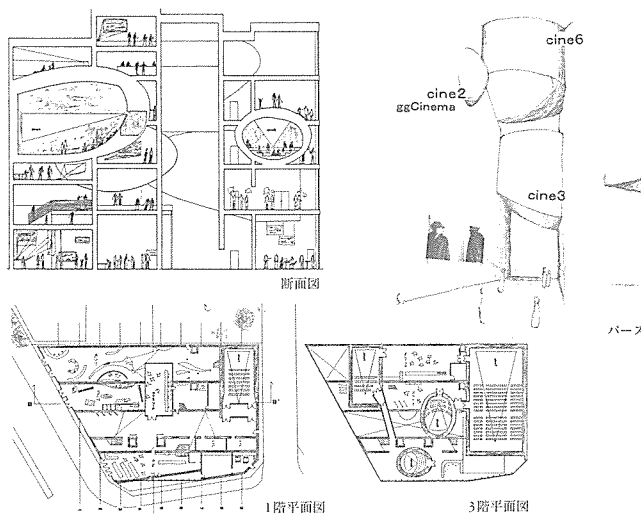
本橋——壁と映画館のボリュームという二つの要素だけで、全体をシンプルだけど複雑に見えるようにしました。いびつな映画館の形を壁で挟み、建物全体が動線になります。

奥山——不思議な形の壁の内外両方についてうまく提言できない。

小嶋——勾配屋根の必然性が、今の話を聞くとあまり無い。ずっと壁の話をしていただけ、これは壁の上をボリューム的に扱おうとしている。壁だけで勝負した方がクリアなんじゃない。

金箱——丈夫そうに見えるけど、スラブのところを下の階の壁で支えていて、とても危ういことをしている。

「Eggcinema」深澤千賀子 FUKASAWA Chikako



深澤——ペンシルビルを街の象徴として考え、都市の中から突然映画館に入るという動きを考えました。街の中を歩いているような感覚で映画館に入り、チケットを買ったら街にまた戻って、映画を見終わったあともそのまま直接都市に出れるという感じで計画しました。

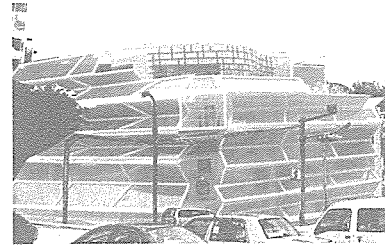
小嶋——デパートは動線がしっかりしているんだけど、ペンシルビルの中は全然違う。その違いを具体的に考えてくれるとよかった。

坂本——構造的なこと以外にペンシルビルである理由はあるのか？

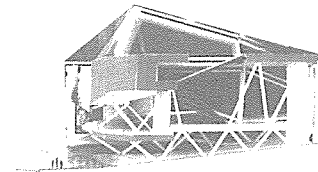
小嶋——映画館っていうのは入るときは迷わず入りたいけど、出るときはそうでなくてもよい。

奥山——本当にペンシルビルに見せたければ階のずれや袖看板が必要。

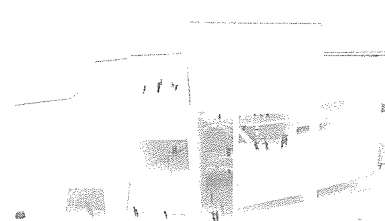
「GREEN & GREEN」エン・ミンニュット Duong Minh Nhuti



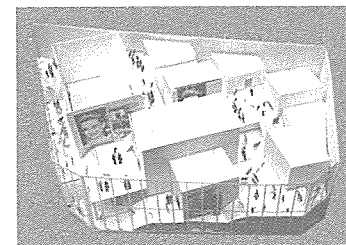
「cinema on cinema」稲用隆一 INAMOCHI Ryuichi



「Cinema street complex」貝塚佑樹 KAIZUKA Yuki



「CINEMA CITY」萩山裕子 HAGIYAMA Yuko



【総評】

小嶋——平面を考えれば建築が出来るというのとは違うものがあるということが判ってもらえればよいと思います。実際に建築を考えていく時には空間で考えないと、大勢の人間のアクティビティが全然わからない。講評会に出た人の特徴は、案にはっきりしたファーストプライオリティがあったと思いますが、そういう飛距離を意識してやってくれた方が面白いんじゃないかなと思います。

金箱——雑誌で構造を見るのも重要ですが、設計製図でもやって欲しい。どこで荷重を支えて、どこを開放するかという単純なルールが出来た上で、細かく分析するのが、構造力学なんです。

奥山——場所が都市部の限定された敷地だったので、シネマのボリュームを積んだだけで何となく格好が付いちやうという人が多かった。敷地条件だけでは決められない建築のつくり方を考えるののいい課題だろうと思いますが、そういう提案は少なかったと思います。

塚本——シネマの箱が乱雑に浮かんでいるというのをやりたい場合、構造や動線が成立するのかということにスタディが集中するべきなのに、おざなりにしながら最後まで設計をやっているという感じがあった。

坂本——条件の中でどのように設計すればより良くなるかを考えて欲しい。時間的にはきついですがクリアしてもらい必要があります。

# 建築設計製図第三/第3課題

Third-year studio Work: Spring Semester

## 「エコロジカル住宅」

"Ecological house"

担当:

**難波和彦** [非常勤講師、大阪市立大学]

NAMBA Kazuhiko (Guest Professor, Osaka City University)

**坂本一成** [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

**中井邦夫** [助手] **足立真** [助手] **安森亮雄** [D3.TA] **久野靖広** [D2.TA]

NAKAI Kunio (Assistant), ADACHI Makoto (Assistant), YASUMORI Akio (D3, Teaching Assistant),

KUNO Yasuhiro (D2, Teaching assistant)

それぞれが考える「エコロジカル住宅」を設計する。何をエコロジカルととらえるかは、各人が調査・研究し、考える。

[設計条件]

敷地: 東京近郊の住宅街にある約300m<sup>2</sup> (90坪)の敷地

用途地域: 第1種中高層住宅専用地域、第1種高度地区

建坪率: 50%

容積率: 100%

家族構成: 祖母(76)、父(50、会社員)、母(45)、長女(20)、長男(16)

車1台分の駐車スペースを設ける。外構もデザインする。

[提出物]

配置図: 縮尺適宜

平面図: 縮尺1/50、各階

断面図: 縮尺1/50、2面以上

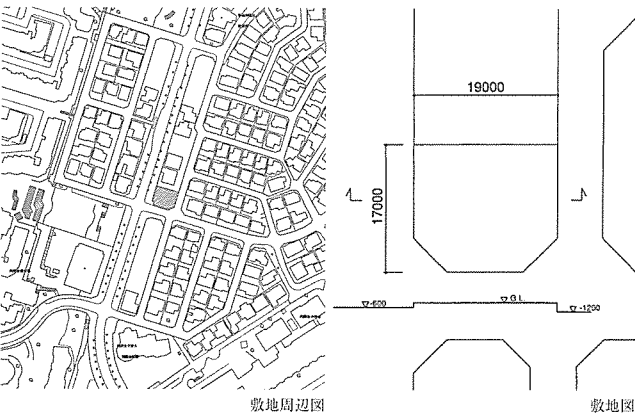
立面図: 縮尺1/50、2面以上

透视图: 要着彩

ダイアグラムまたはシステム図: エコロジカル住宅の考え方を示すもの

以上をA1×3枚以内にまとめる

模型: 縮尺1/50



**難波和彦**

NAMBA Kazuhiko

1947年 大阪府生まれ

1969年 東京大学工学部建築学科卒業

1974年 同大学院博士課程(池辺陽研究室)修了

1977年 界工作舎設立

1994~2001年 東京大学、東京工業大学、早稲田大学非常勤講師

現在、大阪市立大学工学部建築学科教授

1995年「箱の家-1」で第12回吉岡賞受賞

1998年「箱の家-17」で東京建築士会住宅建築賞受賞

主な作品: 一連の箱の家シリーズ、アルミエコハウス

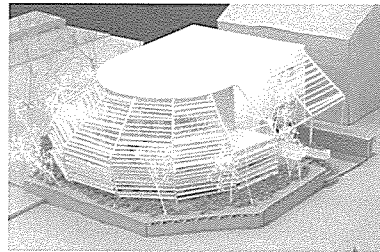
主な著書に「現代建築-空間と方法17 難波和彦」(同朋社出版)、

「現代建築の発想」(共著、丸善)、「建築的無意識」(住まいの図書出版

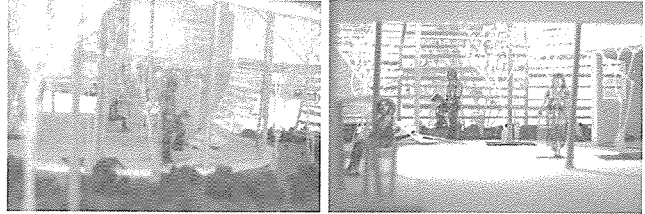
版局)、「戦後モダニズムの極北 池辺陽試論」(彰国社)など

以下は、2001年7月19日に行われた講演会の一部を、学生編集員の足立拓[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

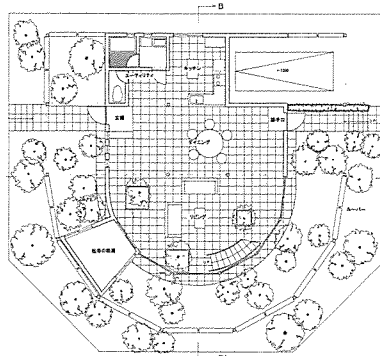
## 「Inside Garden House」中明子 NAKAMA Akiko



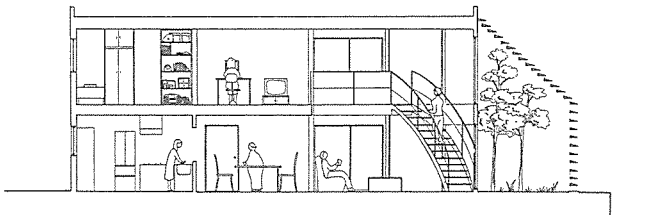
模型写真



内観写真



平面図



断面図

**中間**——できるだけ冷暖房設備を使わずに、快適な空間をもつ家をつくろうと思いました。庭全体をルーバーの壁と屋根で囲い、夏は直射日光を避けて風を通し、冬は昼間は太陽熱を土間で蓄熱し、夜はルーバーを全部閉じて暖かい空気を部屋に入れるようにしました。タイルを庭の方まで貼りめぐらせることによって外部と内部の曖昧な空間ができて、リビングが実際より広く感じられるようになって良いのではないかと思います。

**難波**——これはダブルスキンの典型的な解決法だね。床だけではなく、さらに内側の壁を使って蓄熱などをすればもっとよかった。

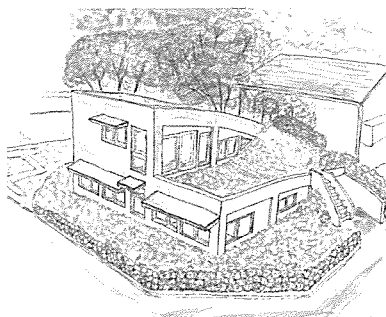
**塚本**——サンルームみたいな場所をつくると、南側にもってきて、南北の軸に合わせて計画することが結構多いんだけど、あなたのは同じヴォキャブラリーでずっと通して、ぐるっと三方を覆ったのがかたち的にもうまくいっている印象を与えている。それでけっこう広がりを感じられるのがよかった。

**奥山**——ルーバーで覆われたところは密閉しないとダメですか？

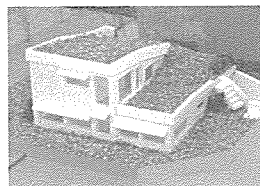
**難波**——理論的には閉じないとあんまり意味がない。温室じゃないといけない。ほくだったらこういうのやってみたいと思うけどね。でも難しいだろうな。でもアイデアはいいよ。

**坂本**——基本的な考え方をやればこういうことでしょう。それをみんなやろうとしないのが不思議ですね。

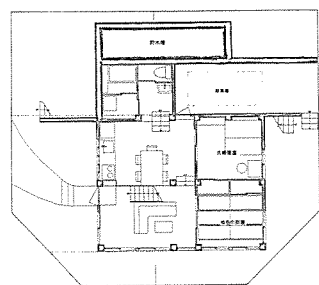
「ろかハウス」宇佐美洋平 USAMI Youhei



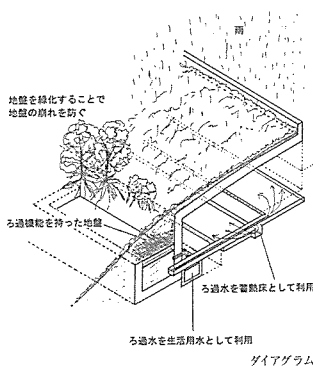
外観パース



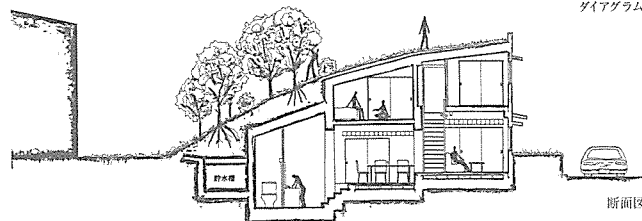
模型写真



平面図



ダイアグラム



断面図

宇佐美——雨水を利用できる住宅をつくりたいと思って、地盤に濾過機能を設けました。そこに雨水を通すことによって、その濾過水を生活用水や、蓄熱床などにうまく利用できないかと考えました。貯水槽は地下に入れています。

奥山——貯水槽にうまく水は貯まるんですか。風呂は？

宇佐美——風呂は水面が貯水槽より低いところにあるので重力で水圧だけで利用できます。

奥山——濾過しなくてもいいけど、とにかく雨水を貯めるということなら、もう少し効率のいい屋根形状があるんじゃないですか？ この形状だと必ずしも貯水槽にいかないで漏れるのも多いよね。

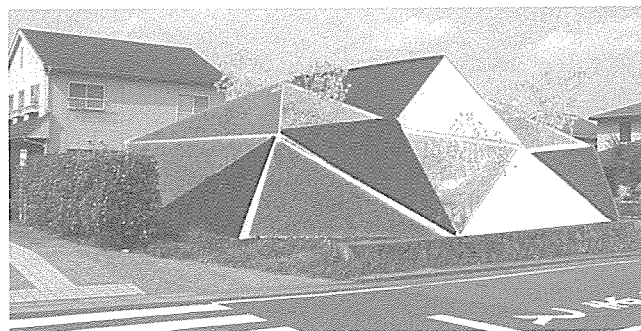
宇佐美——全体をロート状にしてしまえばいくらでも稼げます。

塚本——なんか全体に内部空間が重いね。そのためにとても重苦しい感じの家になっているんじゃない。

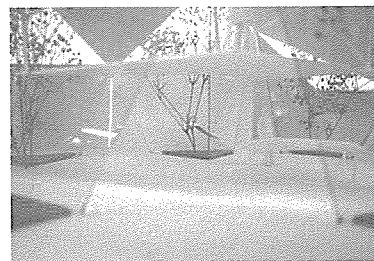
難波——上が緑でぼてっとしている。だから下がふわっと軽かったらすごくいいんだよ。どっしり要塞のような建築の上に土が載っていると考えてしまっているからね。

塚本——ここまでいくと、もうひとつエコロジカルなアイデアを組み合わせても、十分成立するんじゃないの？ 例えば南側の部屋をもうちょっとサンルーム的に扱ってみるとか。そうやって組み合わせればもっと面白くなる。

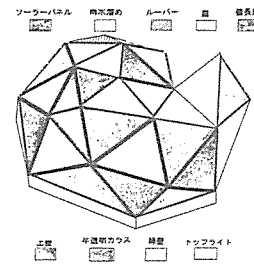
「ECODOME」小沢宣行 OZAWA Nobuyuki



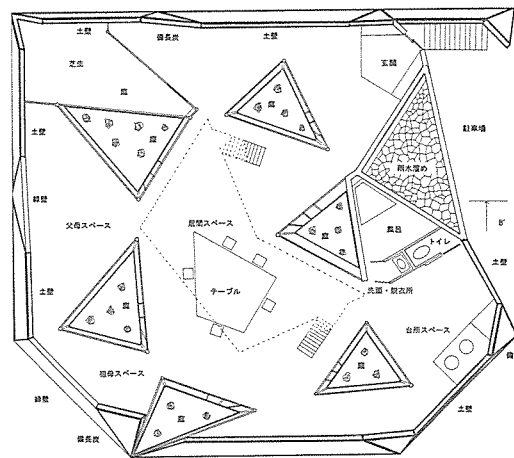
外観カラージュ



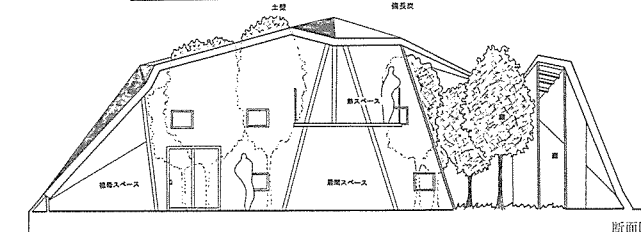
内観写真



ダイアグラム



平面図



断面図

小沢——三角形の面を組み合わせたドーム型の住宅をつくりました。構造は鉄骨でトラスを組んでいます。それぞれの三角形の面に、たんに内外を分けるという機能だけでなく、エコロジカルな機能という意味をもたせます。要素は、ソーラーパネル、雨水溜め、庭などうつつあるんですが、その要素によってドームの形がひとつに決まってくるようにしました。だからできあがったものはエコの集合体とでもいえるものだと思います。

難波——トラスの鉄骨と鉄骨の接合部とか三角形のパネルと鉄骨の接合部はどのようになっているの？

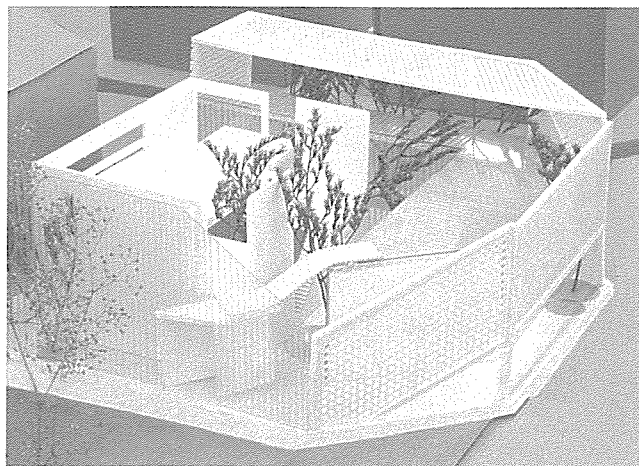
小沢——あまり考えていませんでした。

難波——アルミエコハウスの説明でも言ったように、ヒートブリッジの問題とかがあるからディテールは本当に大事だよ。この案はすごく可能性はあると思うんだけど、点数でいったら1000点満点で100点くらいかな。

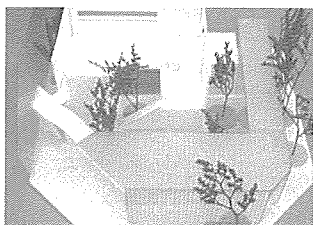
「エコロジカル住宅」

"Ecological house"

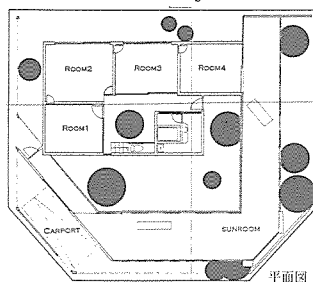
「ラセンハウス」鈴木万喜子 SUZUKI Makiko



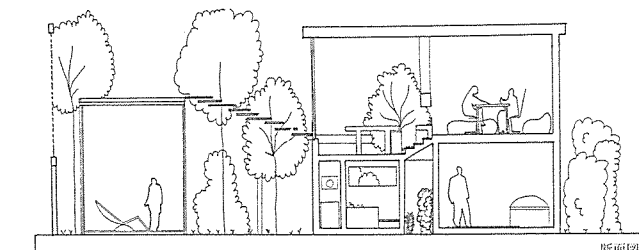
模型写真



模型写真



平面図



断面図

鈴木——コルビュジエの増殖する美術館からインスピレーションを受けて、螺旋形にしました。二重螺旋にすることによって、外部を取り込んだ空間にすることを考えました。外部を取り込むと、ダブルスキンの風通しや断熱の効果が期待できます。また動線によってプライベートな空間とパブリックな空間に分かれていますが、家族として一緒にいられる空間は台所を介した木の周りの涼しい空間になっています。

塚本——中庭は外部だからダブルスキンじゃないよね。

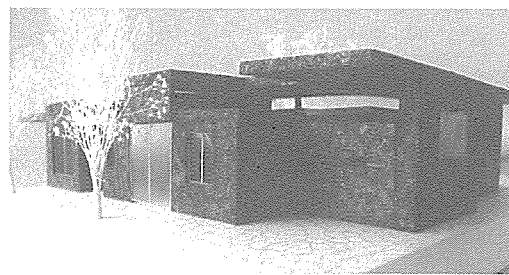
鈴木——ダブルスキンは、もとは中庭があるところに部屋があったからあるんですが、外部を取り込んできたから、結局プランニングの問題の方が優先されてきてしまいました。

奥山——おもしろいプランニングで、内部と外部の関係の組み合わせはうまくできているかもしれないけれど、今回の課題に対する解答はどうなるの？

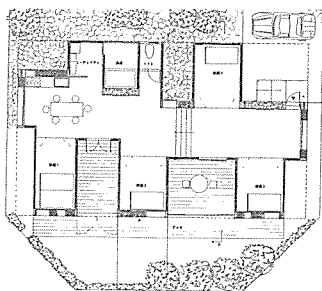
鈴木——南側にサンルームがあって、サンルームに直接当たる光をルーバーでコントロールすることで、夏場は涼しい空間、冬は暖かい空間にします。

坂本——日光を当てる地面を熱容量の高いものにし断熱しておいて、中庭側にヒートブリッジをおこさせて内側にもっていけばいいんじゃないかな。

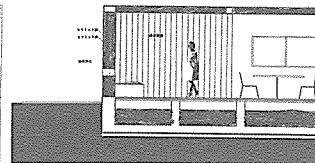
「炭のハウス」松本卓士 MATSUMOTO Takashi



模型写真



平面図



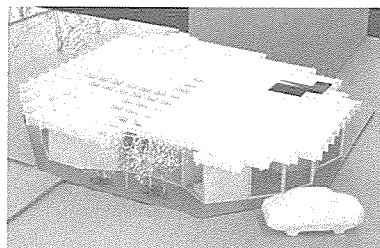
断面詳細図

松本——木炭を使って住宅をつくりました。炭の表面は多孔質なので、空気清浄や調湿の効果があります。そのため、表面積が多くなるように、壁を折り曲げたりしています。構造はスチールで、その間に炭をはさみます。スチール同士はセラミックで接合します。

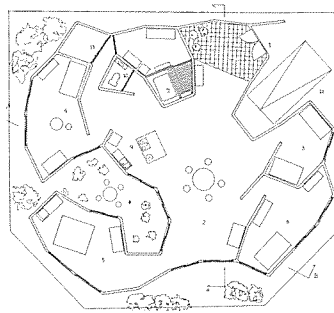
難波——すごいいいね。一室空間だけどおもしろい。こういう家って今ないの？もう少しディテールの説明がほしい。

松本——木炭の表面をセラミックとか空気を通すガラスみたいな透明な素材でコーティングして板状にして使います。

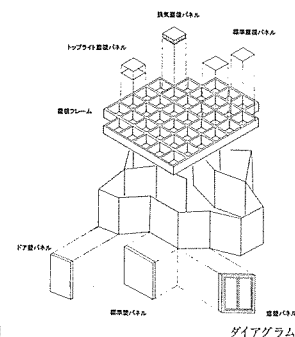
「GOOD HOUSE built by S.H.K」土屋貴佳 TSUCHIYA Takayoshi



模型写真



平面図



ダイアグラム

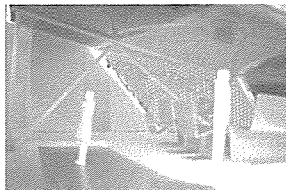
土屋——エコロジーを標準化という面から考えました。部材を規格化することで、工場生産によってコストが下がったり、リユースできるようになります。また壁が自由に設定できるので、平面が束縛されなくなって、自由な平面にすることができます。壁はアルミのジョイント部で固定します。格子状のアルミ屋根フレームに屋根パネルをはめ込むようになっています。

難波——屋根と壁の接合部が難しそう。ヒートブリッジをおこさないように屋根のフレームは木がいいと思います。

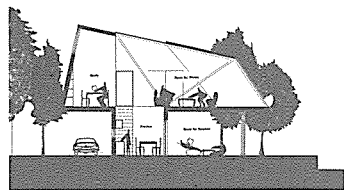
「夏のいえ。冬のいえ」劉敏永 YU Min Young



模型写真



内観写真



断面図

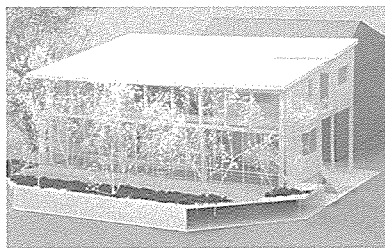
劉——冬の寒さ、夏の蒸し暑さに対応できるそれぞれの居間を設けることで、あまりエネルギーを使わずに、エコ的に快適に暮らせる家を考えました。冬は南側の温室から光を取り入れて暖かい空間にし、夏は庇があって風通しがいい空間にしました。

塚本——夏の居間は、冬は閉じてしまって使わないの？

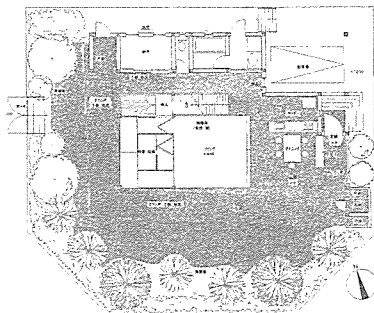
劉——いちおうここにガラス戸があります。でもガラス戸が入ると浮いた感じが薄れてしまうんです……。

塚本——網戸とか蚊帳みたいなものでもいいかもしれないよね。

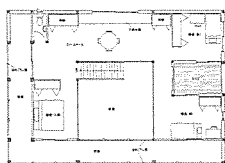
「Communication Box -With Ecology-」佐藤京子 SATO Kyoko



模型写真



1階平面図



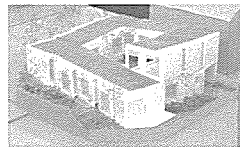
2階平面図

佐藤——ダブルスキンとか土間、自然換気といったエコロジカルな要素を、住宅の要素としてだけではなく、実際の生活にどのように組み込むかを考えました。土間床は、内部と外部が連続するようになっていて、季節の変化に応じて開け放せるようになっています。

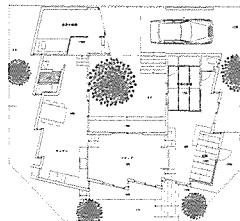
難波——土間床が狭いよね。縁側みたいになってしまったけど、もう少し広げた方がいい。

塚本——2階のスラブを部分的に伸ばしてブリッジにして、それを使って吹き抜けの開口をコントロールした方がいいと思う。

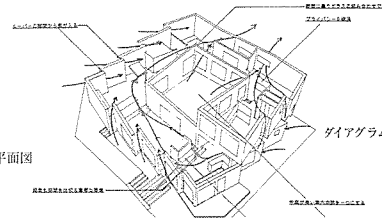
「TUBE of Life」相楽正博 SAGARA Masahiro



模型写真

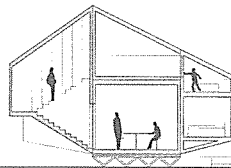


平面図

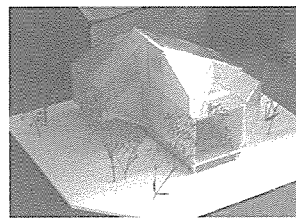


ダイアグラム

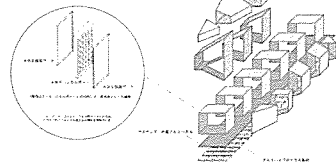
「eco-pla-house」松島潤平 MATSUSHIMA Junpei



断面図



模型写真



ダイアグラム

「総評」

難波——結果が全てではなくて、プロセスやテーマ・課題に対しての問題提起の可能性を評価したいと思います。最初はガタガタ言われても最後までがんばった人の方が、密度が高かったし、よかったと思いました。途中エスキスやらなくていい案を出した人はもう少しやったらもっとよくなったと思う。エコロジーをテーマにしている建築家のデザインはなんかつまらなくて、性能をとるかデザインをとるか、みたいにどうしようもない二者択一になってしまうとやだなと思います。デザインに進む、進まないに関わらず、非常に重要なテーマだから続けて考えてみてください。

塚本——環境についての危機感がみなさんに浸透してないのが多くには怖い。真摯に課題に取り組んでいるとは思んだけど、関心の広がりや狭いし、ほとんどの人は風通しがいいぐらいの話にまとめてしまっている。それは日本で家を建てようと思ったら常識ですからあまり新しい提案にはならない。環境についての危機感が建築の提案にもっと切実に表れてくるような世代だと信じているので、そういうことをもう少し考えてほしいと思います。

奥山——面白い住宅がなかったね。一番身近な空間で、日常的に使っている建物なのに、空間的な遊戯になってしまっている気がしました。

坂本——今回の課題は特に難しかったんじゃないですか。エコロジーをクリアーに表現するのは、建築家でもなかなかできないと思います。みなさんの課題では、パッシブな対応を記号的でなく即物的にやったのがよかったと思います。将来自分で設計するようになれば、現実の難しい課題を背負いながら、その中でいかに建築をつくっていくかということになるわけですが、考えた方向にできるだけ近づけることが必要だと思います。

# 建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

## 「ヒルサイドテラス第七期計画」

"Hillside Terrace Phase VII project"

担当:

**清田育男** [非常勤講師、清田育男計画設計工房] (本課題出題者)

SEITA Yasuo (Guest Professor, Yasuo Seita Architect Et Associates)

**宮城俊作** [非常勤講師] **金箱温春** [非常勤講師]

MIYAGI Syunsaku (Guest Professor), KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor)

**仙田清** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

[ゲスト・クリエイティブ]

**吉村純一**

YOSHIMURA Junichi (PLACE MEDIA)

横文彦氏の設計による代官山「ヒルサイドテラス」は1967年の第一期竣工以来継続してプロジェクトは展開されており、現時点では第6期(1992年竣工)までに至っている。このプロジェクトは一連の計画として四半世紀にわたり、ひとつのテーマを踏襲しながら、街並を形成してきた点が広く評価されている。しかしそれらをよくみると、同じ設計者の設計で、時間の経過や敷地条件などで変化している点がみられる。竣工以来、35年たった今日、現在の目で初期の建築を見た時、社会情勢や経済情勢の変化、法規制の改正、代官山という街並みの変化、また都市居住の多様なライフスタイルへの対応など今ならこういう計画を試みたいという点がありそうだ。

変化の具体的な例を挙げるならば、当時第1種住居専用地域・高さ10m指定現在は第2種住居専用地域・高さ制限なしの40%指定に、また同潤会アパートは再開発され街の若返りが進んでいる。

本課題では、隣接する南側斜面緑地を含めて計画敷地に拡大し、既存敷地と一体的なプロジェクトとして、第7期ヒルサイドテラス改造計画を考えてみたい。現計画の設計趣旨を尊重しながらも独自の発想による提案を期待したい。

### [計画敷地]

#### 2-1. 計画対象敷地

旧山手通北側のヒルサイドテラス現敷地と隣接南側の緑地を含めた約12,000m<sup>2</sup>とする。

#### 2-2. 計画するもの

都市型住居/他施設(自由に提案する)/外部空間/緑地(古墳緑地、南側敷地の斜面緑地を30%程度保存する)。その他(駐車場など)

#### 2-3. その他の条件

基本的にはヒルサイドテラスの既存の建物は残すこと。但し計画によっては部分撤去も認める。/計画の容積は全体敷地に対して200%以上とする。敷地の高低差を生かした計画とすること。



**清田育男**

SEITA Yasuo

1933年 神奈川県生まれ

1957年 東京工業大学建築学科卒業

1957-69年 坂倉準三建築研究所

1969-76年 (株)坂倉建築研究所(74-76同所取締役)

1976-81年 (株)TRIAD建築設計事務所代表取締役

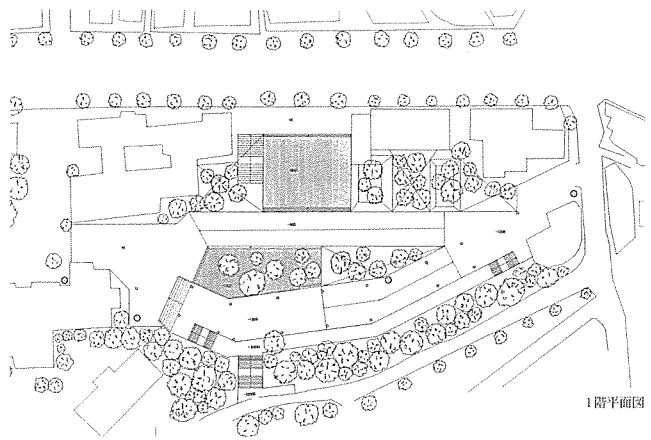
1981年- 清田育男計画設計工房設立

ピラ・セレーナやピラ・フレスカなどの都市型集合住宅やガーデン国立、ガーデン目黒などの都市型低層集合住宅を手がける。

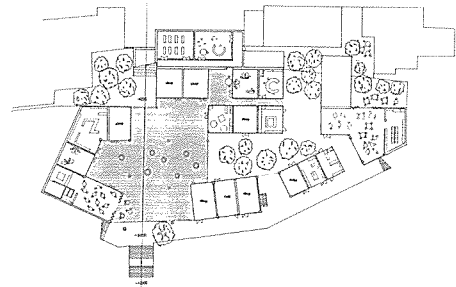
作品: コートハウス八雲、ロイヤルピラ・熱海等/著書: 「都市型集合住宅」(井上書院)「都市型低層集合住宅」(市ヶ谷出版)

以下は、2001年11月19日に行われた講評会の一部を学生編集員小林徹也[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

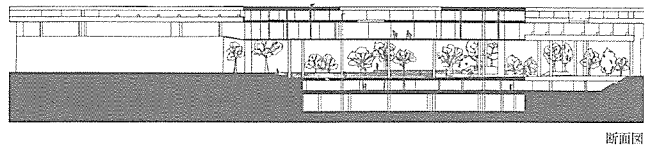
## 「ヒルサイドテラス第七期計画」 稲用隆一 INAMOCHI Ryuichi



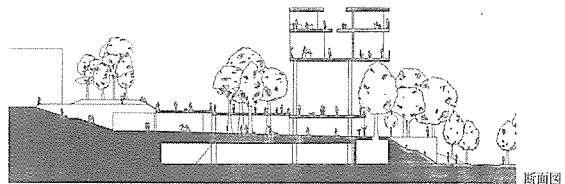
1階平面図



2階平面図



断面図



断面図

**稲用**——ヒルサイドテラスの中をぐるっと回れるようなサーキット状の動線をまず考えました。大きなサーキット状の動線の中に南北、東西方向のショートカットをつくることで緑豊かな空間を人が歩けたり、中目黒方面に簡単に行くことができます。また、各住戸に関しては個人が都市との距離感を自由に選択できるような住戸を複数つくることで多様な住まい方ができるようにしました。

**金箱**——図面を一生懸命書いているのはいいんだけど、柱の入れ方をもう少し考えた方が良さそう。中間講評のときに比べて柱のスケールは良くなったと思うが、スラブが薄い。短手方向の断面だけ縮尺を上げているが、なにか強調したいのか？

**稲用**——短手方向の断面によって、建物-外部空間-樹木が交互に現れる様子を表現しようと思いました。

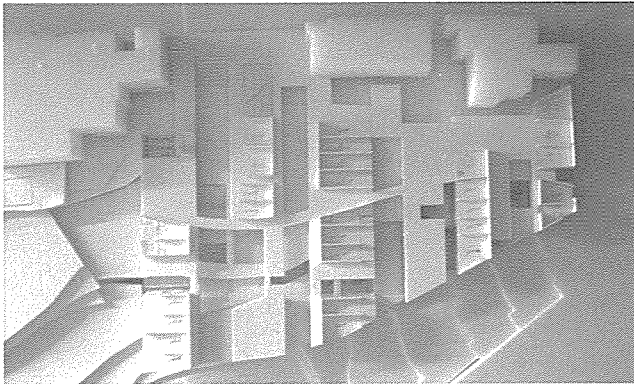
**金箱**——せっかく縮尺を上げてるのだから構造までしっかり表現して欲しかった。

**清田**——この建物は既存のヒルサイドテラスとどのような関係をとっているのか？

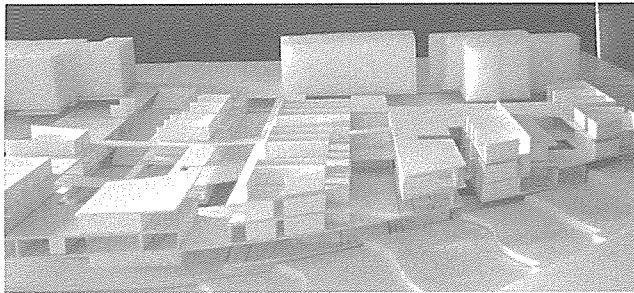
**稲用**——既存の建物の上に少し浮いた状態で建っていて既存の建物の構造を一部利用しています。

**清田**——この課題で既存のヒルサイドテラスとの絡みを考えた人は少なかったのではその辺を真剣に考えられていて良いのではないかと。

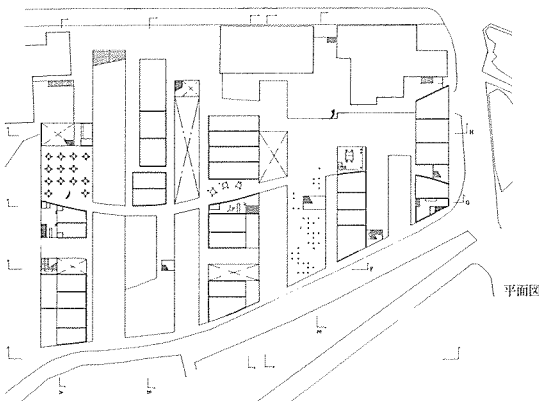
「ヒルサイドテラス第七期計画」四ヶ所高志 SHIKASHO Takashi



模型写真



模型写真



平面図

**四ヶ所**——この敷地周辺を実際に歩いて、代官山特有の雰囲気がこの敷地で切れていると感じました。そこで、代官山と中目黒というそれぞれのエリアの境界と、実際の高低差による境界という二つの境界を意識して設計しました。平面的には、それぞれの層ごとに既存の等高線に馴染むような緩やかなカーブを利用して、住居とそれ以外の部分を分けています。一方、断面的には緩やかなカーブ同士のずれを利用したメゾネットや縦動線を設けることで、上下のつながりをつくりました。全体的に境界が曖昧になっていくことを考えました。

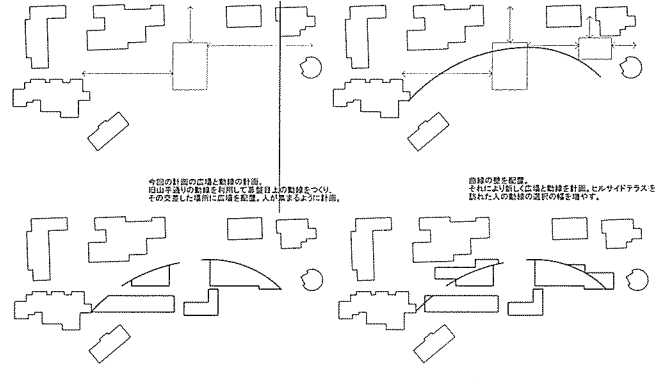
**清田**——周辺の状況を手がかりにして設計しているようだが、低層に抑えられたこのボリューム感は面白い。また内部空間も光のとり方や視線の抜けがよく考えられていると思う。

**吉成**——配置模型はすごくコンセプトをよく示しているんじゃないかな。水平方向の分割については実際に計画してみないとどうなるかわからないところがあるけれど、魅力的な計画だと思います。この配置模型のスケールはいくつ？

**四ヶ所**——1/2000です。広範囲な周辺の状況をつかもうと思ひ、つくりました。

**吉成**——周辺の状況をつかむために自分なりにいろいろ試したこと良い結果を生んでいると思います。

「差別化する壁、連続するガラス」中島敏明 NAKAJIMA Toshiaki



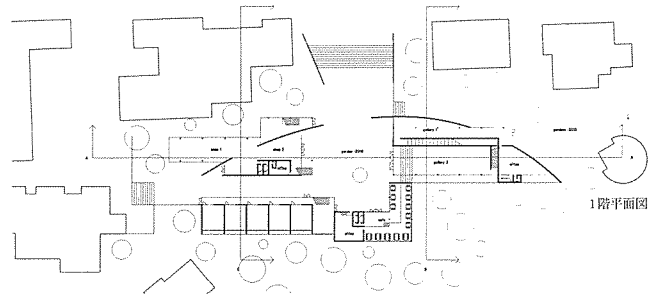
今回の計画の共通と数値の計画。旧山手通りの敷地を利用して高層住宅の敷地をつくり、その交差点に歩道と階段を配置し、人が集まるように計画。

自然の壁を配置。それにより同じ「生活と動線を計画、ヒルサイドテラスに訪れた人の動線の選択の幅を増やす。

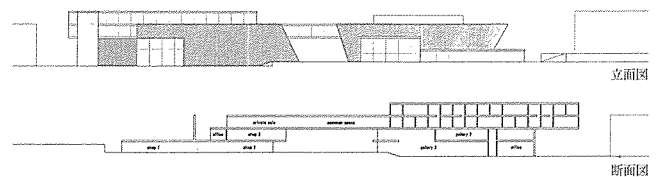
いままでも計画したことがあってボリュームを配置。両面の緑地はできるだけ残すように計画。

ガラスボックスを突き出すことによって連続性を確保。

ダイヤグラム



1階平面図



立面図

断面図

**中島**——既存のヒルサイドテラスは基本的に矩形で構成されていることに注目しました。そこで、今までのヒルサイドテラスにはない曲線の壁を挿入し、既存の建物との差別化を計りました。そのことで外部空間が活性化されることを狙いました。しかし、それだけでは全く別物の建物になってしまうと思ったので、壁を抜きガラスボックスを挿入することで旧山手通りとの連続性を計りました。また都市の中では公共性の高い場所の方がくつろげると思ひ、住民のためのコモンスペースとカフェなどが隣接するように計画しました。

**清田**——君はエスキスのとき、曲面で空間の変化をつけることから着想し、展開させていったんじゃないのかな？

**中島**——実際は確かにそうなのですが、逆から説明した方が説得力があると思ひました。

**吉成**——君の考えの進め方は建築的な考えの進め方だと思う。今のままだと、分かりやすいという点はいいけれど、その壁は果たして本当に必要なのかな。僕はむしろ、もしその壁が物理的に存在しなくても成立させることができれば違った面白さがでたと思う。

**宮城**——君は本当は最初に曲面の壁から考えを進めたのだろうけれど、説得力をもたせるために説明の仕方を変えるというのは、十分ありうることだと思います。あとこのテラスは気持ちよさそうだね。

# 建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

## 「自然を育む建築」

"Architecture for developing nature"

担当:

**宮城俊作** [非常勤講師、千葉大学教授] (本課題出题者)

MIYAGI Shunsaku (Guest Professor, Chiba University)

**清田育男** [非常勤講師] **金箱温春** [非常勤講師]

SEITA Yasuo (Guest Professor), KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor)

**仙田満** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

自然共生、省エネルギー・省資源、クリーンエネルギーの活用、リサイクルなど、地球環境問題への建築的などりくみは様々な側面において実践されつつあり、それらはエコロジーという概念を通じて理解され表現されています。しかし現段階においては、それらの多くは個別の要素技術の並列的な適用による「処方箋としてのエコロジー」にとどまっており、建築のひとつの様式に向かうものにはなっていないように思われます。一方、21世紀前半の人間社会は、生物学と環境科学を基盤とする科学技術がリードするであろうと考えられています。その過程においては植物的自然の存在がキーとなることはまちがいないでしょう。

そこでこの課題では、エコロジーという思想・理念・ライフスタイルを体現する美的な空間様式のひとつとして、植物的自然を育む建築のありかたを追求します。即ち、建築することは植物的自然を育む基盤を構築することである、という理念を空間的に表現することです。むしろ、この場合の植物的自然とは、単なる緑化建築に代表されるものではなく、植物の生育を支える様々な環境要素を含むトータルな自然のシステムを意味します。また、追求されるべきは、従来の概念における静的な形態としての様式美ではなく、ダイナミックなプロセスとしての様式美であることはいまでもありません。

### [設計条件]

- (1) 敷地：植物的自然を育むのにふさわしい、実在する場所であることが必要です。
- (2) プログラム：特に問いません。(3) 構造・設備：自由とします。しかし、あまりに荒唐無稽な提案は不可とします。(4) 法規：常識の範囲内で対応してください。

### [提出物]

敷地とその周辺的环境を解析した図版/提案の趣旨を簡潔に表現するダイヤグラム等/配置図、平面図、立断面図等(縮尺任意)/植物的自然が育まれるしくみとプロセスを説明するビジュアルな表現/上記をA1判用紙2枚にレイアウトする/模型(縮尺任意)



**宮城俊作**

MIYAGI Shunsaku

1957年京都府宇治市生まれ

京都大学大学院修士課程(造園学専攻)修了

ハーバード大学デザイン学部大学院修了

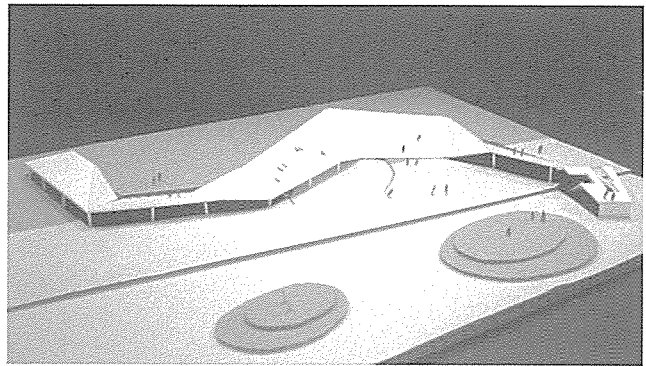
米国内の設計事務所勤務を経て1994年より千葉大学緑地環境学科助教授

1990年より設計組織PLACEMEDIA/パートナー

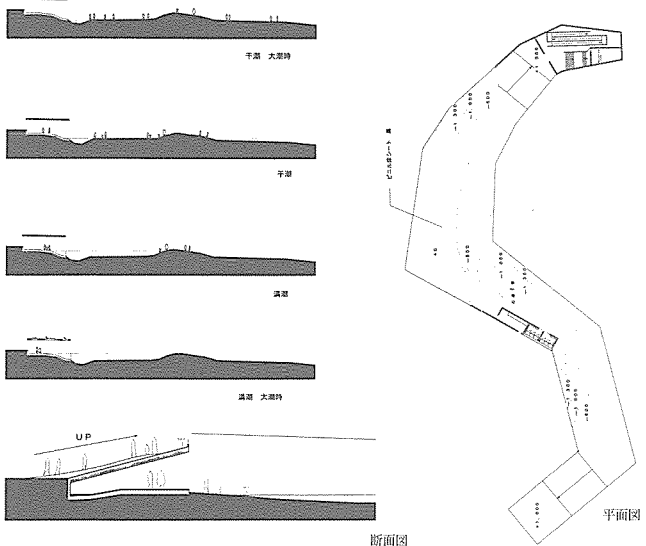
作品：植村直己メモリアルパーク(1996年度日本建築学会賞)、岡崎市美術博物館ランドスケープデザイン、飛騨高山美術館ランドスケープデザイン、多摩ニュータウン稲城長峰地区集合住宅地、平等院新宝物館ランドスケープなど

受賞：1994年日本造園学会賞、1996年日本建築学会賞(栗生明氏と共同受賞)

## 「Industrial Nature Museum」 小山永佑 KOYAMA Eisuke



模型写真



**小山**——敷地は大井埠頭です。湾岸での自然は、工業的な周囲の負のイメージを緩和するものとして扱われています。しかし工場やクレーン、倉庫、高速というのは湾岸の風景独特なものです。それを自然とあわせて同時に見せることで新たな風景の創出を狙います。建物のかたちは、周囲のコンテナ埠頭やお台場、青海埠頭、廃棄物処理場、倉庫といった様々な風景を取り込むこと、そして潮の満干を感じられるような場所となること考え決めています。折れ曲がった屋根、掘り込まれた床は周囲の状況に対して様々な視点を与えます。

**金箱**——下の図面で、点線が書いてあるけれど、それは潮の満干きをあらわしているの？ 砂浜のカフェみたいになが一日の中でも動かないと行けないんだよね。それは面白いと思う。ビニル床シートと書いてあるのは何か考えがあるの？

**小山**——波が入って来たときのことを考えてそうしました。また、黒にすることで外の緑が映えること考えました。

**金箱**——ビニル床シートというのは、このように水に浸るようなところで使う材料ではない気がする。

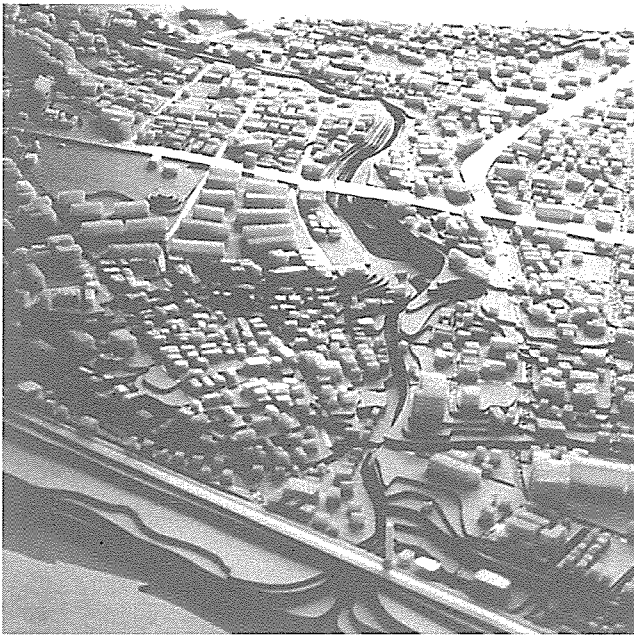
**宮城**——建物まで潮が入ってきたくないがこのプランの面白さは出てこないだろうね。後に残る汚れの問題はあるけど。

**清田**——僕はいいと思う。

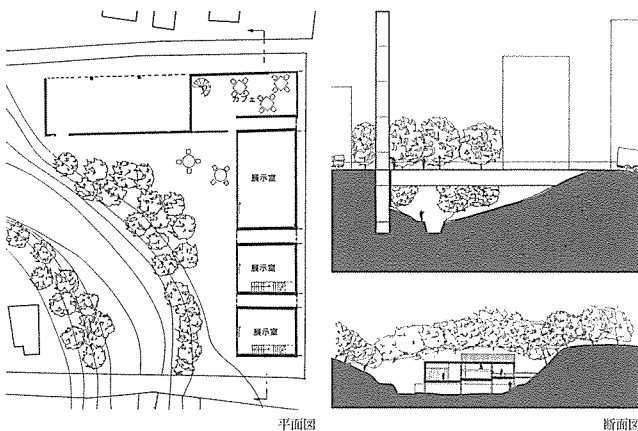
**金箱**——砂利敷きなら説得力があったと思う。せっきく変わったプランニングをするんだから材料も考えてくれたらと思う。コンクリートでも良いかもしれないし、予算が関係ないのなら石貼り、プールの仕上げなどに使う砂を成形したものもある。

以下は、2001年11月19日に行われた講評会の一部を学生編集員の森谷英和[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

「Todoroki City - Nature museum」松本卓士 MATSUMOTO Takashi



模型写真



平面図

断面図

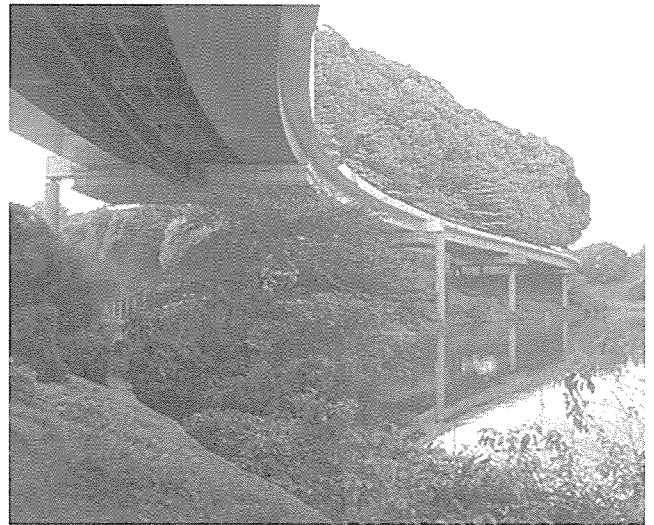
松本——敷地は学校から10分ほどの距離にある等々力渓谷です。等々力渓谷は現在、等々力駅から多摩川との中間点まで川沿いに道が整備されています。今回は中間点から多摩川までを整備し、駅から多摩川まで幾つか重要な場所をピックアップし、ミュージアムを作ります。自然が都市の中に入り込んでいるという現状をプラスにとらえ、現状の面白さをより生かすような建築を考えています。新たな建築をつくることで、都市と自然の関係が切れていたり、曖昧になっていたり、融合していたりという現状の一連の姿をさらに引き立たせることが出来ればとおもい、計画をしました。

宮城——等々力のような渓谷の上部の方にはびっちら住宅が張り付いていて、一方下部のほうは豊かな自然があって敷地選びはすごくよいと思います。ピックアップし、重要な場所だとした根拠はなんですか？

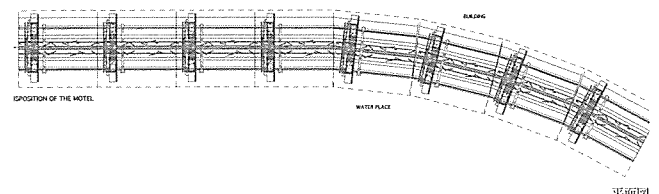
松本——この川は上部の都市と様々な関係をもっています。例えば駅周辺では川と都市はすごく分離しているのに、環八のあたりでは川の上を道が横切っているにも関わらず、お互いすごくよい関係になっていたり。下流のほうでは川が都市化されていたり、そのようなことを実際に川を何度も歩いてピックアップしています。

宮城——確かにピックアップした所もよいと思うのですが、自分がよいと思った場所をもっと多方面から分析して説得力をもたせた方がよい。そうすることで、今回は建築のことはエスキスから何も言わない方針でしたが、設計した建築ももっと具体的になっていくと思います。

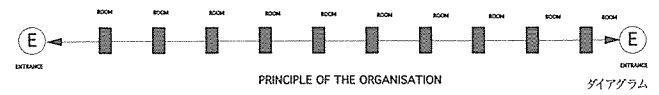
「GERMINATE」ピエール・オダ Pierre AUDAT



コラージュ



平面図



ダイアグラム

ピエール——敷地は赤坂見附の弁慶掘りです。お堀の上を通っている首都高速の下の道を地下に埋めてしまい、地上に出来た細長い空間を階段状に造成し直すことで水との関係をもった場所を作り出します。また、首都高速道路と直行したかたちでモーターを首都高速からぶら下げます。モーターの1ユニットは2室により構成されています。一方の部屋はお堀のほうを向いていて、もう一方は都市の方を向いています。そのことでこの場所に存在している二つの異質なものを取り込みます。エレヴェーションに現れているように人は下から入っていきます。道路の下に空間を広げていき、ポイント毎に首都高速から吊り下げた建物を入れていくことで、首都高速とグランドレベルのあいだに自然を観察することの出来る空間を作り出すことが目的です。

宮城——その機能はモーターだと言ってたよね。車を停める駐車場とかは無いの？

ピエール——駐車場は無いです。でも機能がモーターだということが問題なのではなく、この作り方が重要なんです。機能は他のレストランなどに置き換えて考えてもらっても構いません。使うひとが自由に愛えて使うということも想定できます。

宮城——でも確かにここなら地下鉄の駅に対してはアクセスがいいよね。

# 建築設計製図第四/第1課題

Second-year studio Work: Autumn Semester

## 「夢の島公園の中に建つ多目的スポーツ施設」

"Multifunctional sports center in YUMENOSHIMA park"

担当:

**金箱温春** [非常勤講師、金箱構造設計事務所] (本課題出題者)

KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

**宮城俊作** [非常勤講師] **清田育男** [非常勤講師]

MIYAGI Syunsaku (Guest Professor), SEITA Yasuo (Guest Professor)

**仙田満** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

[ゲスト・クリティーク]

**吉村純一**

YOSHIMURA Junichi (PLACE MEDIA)

夢の島はごみを埋め立てて出来た人工島であり、ここには1976年に完成した東京都の総合体育館が建てられている。しかし、完成当時と今日では周辺環境が大きく変化しており、今日ではさまざまなスポーツエリアを持つ緑豊かな公園として賑わっている。このような環境の変化を見据え、単独スポーツ施設として機能するだけでなく、公園の中心施設としての機能も果たす多目的スポーツ施設を計画する。

計画に当たって、既存の建物の扱いは自由とするが、屋外のスポーツエリアやランドスケープは現状の構成を維持するものとする。

本課題のもう一つの意義は、建築デザインとともに構造デザインを同時に意識し、計画を進めるということである。構造計画を意識しない建築計画というのは本来はありえないが、特に大空間建築ではそれらの密接な関係が重要である。構造デザインとは、材料や架構の構成を工夫し、力学的な整合性を確保するとともに、それぞれの建築デザインに適合したシステムを創り出していく個別的なものでもある。建築と構造の関係を再認識することから新たな空間や架構を生み出すことも可能であり、本課題では積極的にこの試みを行う。

[設計条件]

計画敷地: 夢の島公園内に自由に設定する。

施設規模・内容: 自由。

但しメインの施設として4000m<sup>2</sup>以上のスポーツ空間を含める。

[提出物]

配置図(1/500)、各階平面図(1/300)、立面図(1/300)2面以上、断面図(1/300)2面以上、説明文、パース、構造模型



**金箱温春**

KANEBAKO Yoshiharu

1953年 長野県生まれ

1975年 東京工業大学工学部建築学科卒業

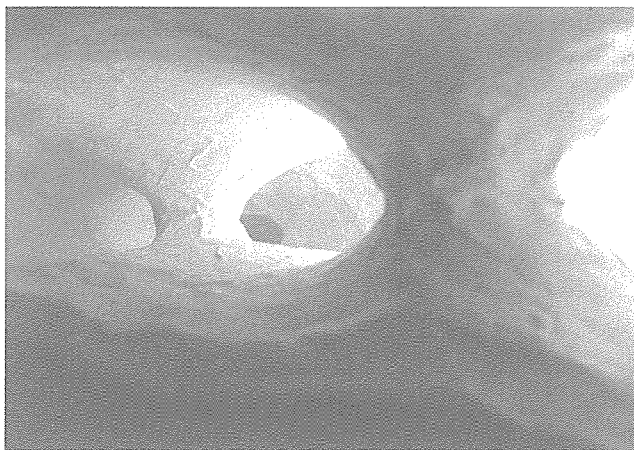
1977年 同大学院修了。横山建築構造設計事務所入社

1992年 金箱建築構造設計事務所設立

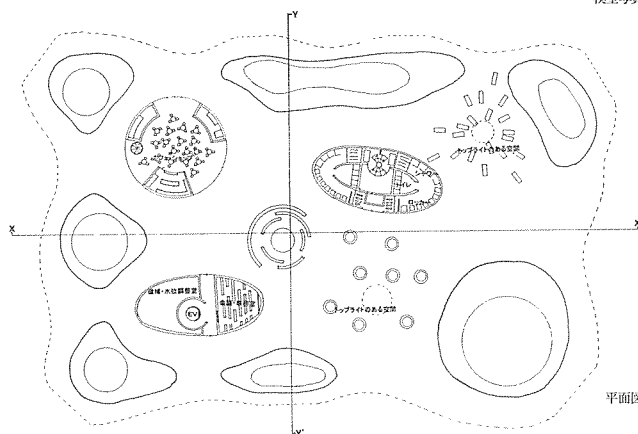
1998年 日本建築構造技術者協会賞受賞

主な作品: 京都駅ビル、ふれあいセンターいずみ、遊水館、渦博物館、広島市立基町高校、兵庫県新美術館

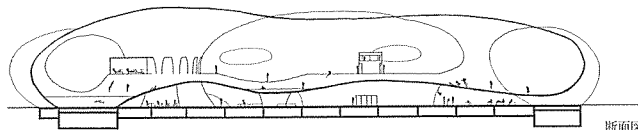
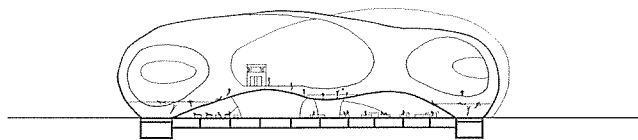
## 「水+コンクリート=雲」伊庭野大輔 IBANO Daisuke



模型写真



平面図



断面図

**伊庭野**——スラブをゆがめてできた窪みに水をためてその水位を変化させることで、大小の様々な形をしたプールを出現させたり、つなげたり、消したりすることが出来ます。そこで、人の密度や潮の干満などいろいろなパラメーターによって水位が変化し、そのことによって使い勝手や内部空間が変化していくシェル構造のプールを設計しました。スラブは歪んだ状態をそのまま維持しつつ、壁になり、屋根になり、全体で一体感のある大空間を形成しています。

**清田**——断面図を見ていると(シェルの厚みが)全部同じに見えるけど、本当はどうなの？

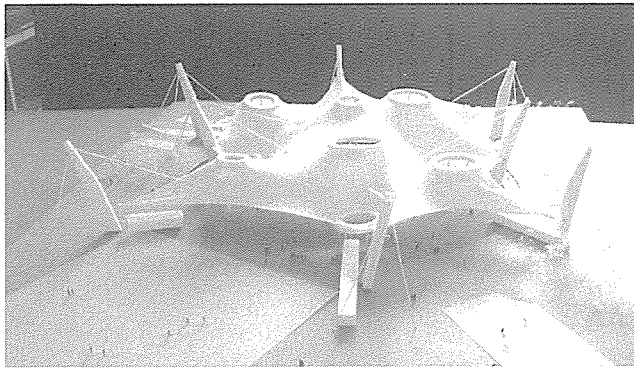
**伊庭野**——実際は床の部分がプールの水圧も考えて20センチぐらいで、屋根の部分が10センチぐらいで考えています。

**金箱**——なかなか普通の人じゃ思いつかない案で、とても意欲的で面白いと思う。屋根にあたる部分の厚みが10センチっていうのは少し気になるけど、逆さ吊り実験から形を決めているので構造的に成立する形態です。単に形態的に恣意的なだけではない。ただ、もうちょっと構造のスケールを具体的に詰めて提案したほうがよかったかな。

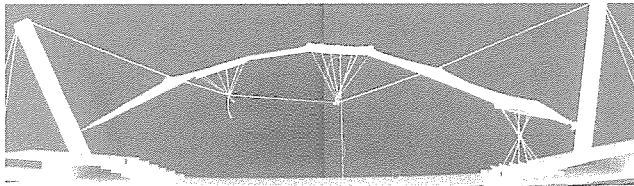
**清田**——こういう大空間構造もあるっていう提案だね。

以下は、2001年11月19日に行われた講評会の一部を学生編集員の大西康文[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

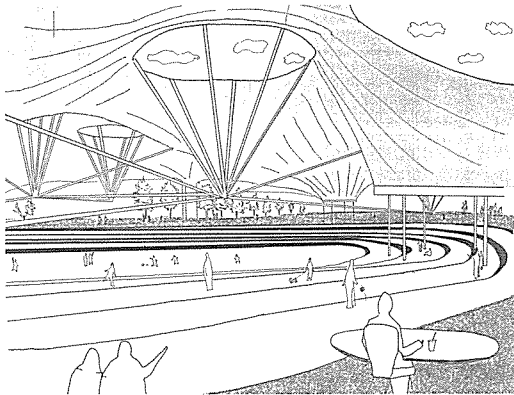
「Inside Out」 吉川寛華 YOSHIKAWA Hiroka



模型写真



模型写真



内観パース

吉川——夢の島に行ってみて、すごく閉じられた建物が多いように感じられたので、もっと人が自由に外に出て行ったり中に入ってきたり出来るような空間を作ろうと思いました。私が設計したのは半屋外的な運動場なのですが、外側にテニスコートなどのいろいろなものを設定することによって、使っている人が自由に中に入って来て、休んだりいろいろな活動を繰り広げられるよう、中心に向かって様々な施設を配置しました。具体的には、コロシアムの真ん中に向かってトイレや更衣室の建物が貫入するようにすることで、中と外のあいまいさを強調しています。構造は外側の柱とケーブル、突き上げ材によって持ち上げられたリングが膜を押し上げ、地盤に固定されたリングが膜を抑えるようになっています。リングは基本的には規則正しく並べられているのですが、少しずらしたり、リングの大きさを変えることによって、中の空間に変化を与えています。

清田——とても面白いと思う。

井上——実際には突き上げ材はこの太さで生きるかな？ 比率的にちょっと苦しいかなと。挫屈止めに何かが入ってくると思う。

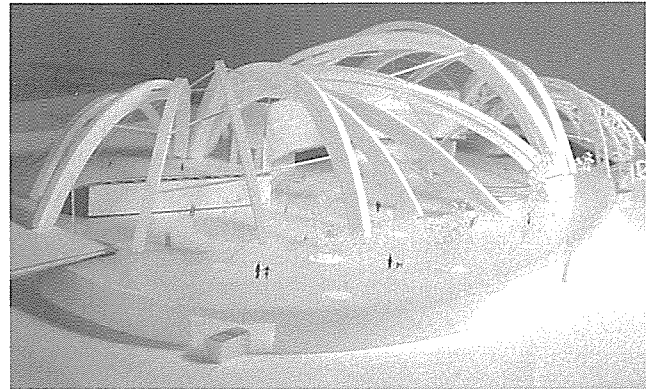
宮城——下はすり鉢状の敷地よりも、まったくフラットなほうが使い勝手もよかったんじゃないかな？

吉川——窪みから賑やかさが溢れ出てくるようなイメージなのですが。

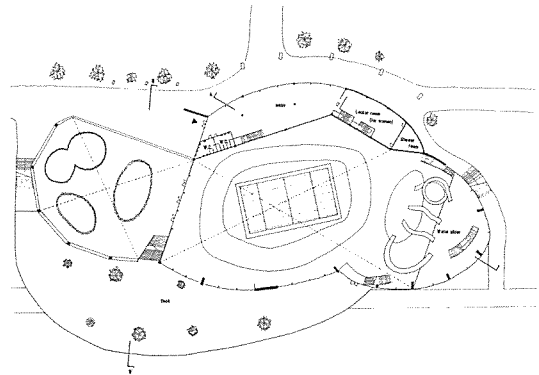
清田——(建物が)貫入すると言ってたけど(レベル差のせいで)切れていると思う。造形的にね。

金箱——こういうモニュメントが夢の島にあるといいと思いますね。

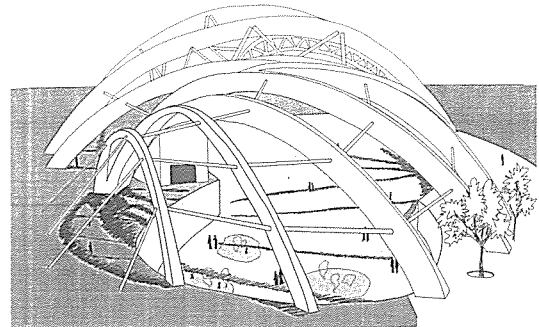
「THREE TREE」 宮崎昭子 MIYAZAKI Akiko



模型写真



平面図



内観パース

宮崎——夢の島は陸上競技場や多目的ホール、コロシアム等陸上競技用の施設がたくさんあったので、その施設を利用した帰り道に立ち寄れる温泉施設を計画したいと考えました。実際に行ってみて思ったのですが、夜になると夢の島の入り口付近が早く帰りたくなってしまうような暗さなので、その道を少しカーブさせて、上から光がおちてくることで明るくなるようにしました。南側には高速道路と駅があるので、大きく開口部をとって入れるようにし、どちら側からも見えるようにしました。施設内容は温泉と流れるプールとウォーター 슬라이ダです。その三つの部分を木に見立て、3本の木が互い違いにを幹を伸ばし、枝に見立てた材が幹の間にトラス状に入ることによって補強するような構造になっています。全体としては、真ん中の木がたいへんしっかりしていて、両側の木がそれに寄り添うようになっています。

金箱——一部だけトラスで他の所は単一のアーチになっているけどそれは意識してそうなの？

宮崎——トラスの部分はガラス張りで透明になっています。それ以外の部分は所々がガラスで、基本的には膜が張られていて空間の開放性を意識的に変えています。

金箱——ちょっと大味じゃないかな。スパンが20メートルっていうことになってるけど、実際のスケールを考えると部材がもっと密に入っているほうが見た時も美しいと思う。

# 建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

## 「CULTURAL RETAIL SPACE」

“CULTURAL RETAIL SPACE”

担当:

**押野見邦英** [非常勤講師] (本課題出題者)

OSHINOMI Kunihide (Guest Professor)

**栗生明** [非常勤講師] **工藤和美** [非常勤講師]

KURYU Akira (Guest Professor), KUDO Kazumi (Guest Professor)

**仙田満** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

いまや都市は、街区といった都市空間は無論のこと、駅舎や空港といった都市インフラ施設や美術館などの公共施設にいたるまで、OMAが指摘するようなジャンクなショッピング・スペースに侵食され、都市固有のアイデンティティが失われ、全体がコモディティでハイジャックされたような印象を与えている。そこで、こうした現象がもっとも著しい東京を舞台に、企業文化に裏付けられ、しかも都市のコンテキストに根ざした新たなCULTURAL RETAIL SPACEとしての新鮮な提案を求めたい。最近のレンゾ・ピアノの設計による銀座のメゾンドエルメスや、ヘルツォーク・ド・ムロンによって計画中である青山のプラダなどのリテールスペースを超える、若々しいデザインイメージを期待したい。

### 【設計条件】

STEP1: 各自、世界企業を自由に選び、それらの製品がどのような企業理念のもとに造られているのかを、会社概要やアニュアルレポート等から理解して企業コンセプトを明らかにする。

STEP2: そうした製品は、どのようなリテールスペースで販売されるべきなのか構想をたてる。単体のショップか、他の施設を併設するのか、どのようなショップ構成にすれば企業文化が伝えられるか、そして都市環境にとっても望ましいかを考えてプログラムを作成。

STEP3: 具体的にそうしたコンセプトやプログラムを実現するにふさわしい敷地を都内に想定し、そのデザインを具体化する。あまりに荒唐無稽なものは不可とするが、新たな素材や構法開発をはじめとして、計画規模や内容等自由とする。

### 【提出物】

企業理念や文化に対する、簡潔な記述と代表的な製品の紹介

プログラムについてのわかりやすい記述

具体的なリテールスペースのデザイン

配置図、平面図、断面図、立面図(縮尺任意)、素材や構法のイメージや内外部のヴィジュアル表現(CG、パース、模型写真等)

以上の全てをA1、2~3枚に美しくレイアウトする。



**押野見邦英**

OSHINOMI Kunihide

1941年生まれ

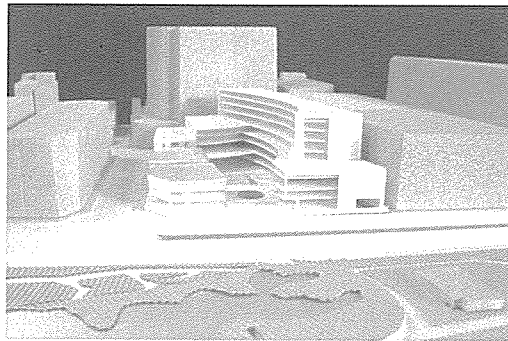
学歴: 横浜国立大学工学部建築学科1961 横浜国立大学工助手1965

職歴: 鹿島建設入社1966/鹿島建設A/E総事業本部建築設計部長(2001年末まで)。現在ケーオーデザインスタジオ主宰/横浜国立大学非常勤講師

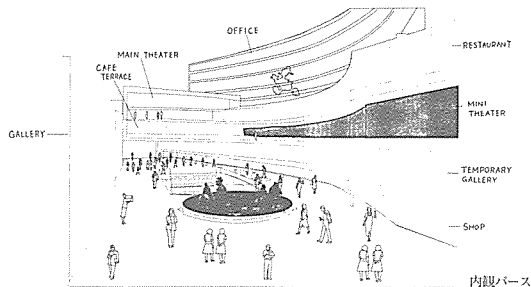
業績: 東京海上東日本研修センターの設計にて建築業協会賞JCDデザイン大賞(1995)/木とカーテンウォールの家の設計にて日本建築学会作品選奨(1998)/ECOLE DE HAYAMAの設計にてグッドデザイン金賞、建築業協会賞、東京建築賞(1998)

## 「CULTURAL RETAIL SPACE of TheWalt Disney Company」

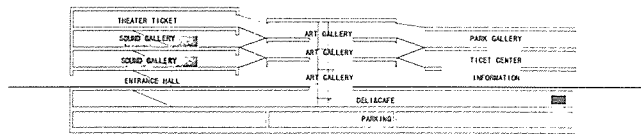
佐藤京子 SATO Kyoko



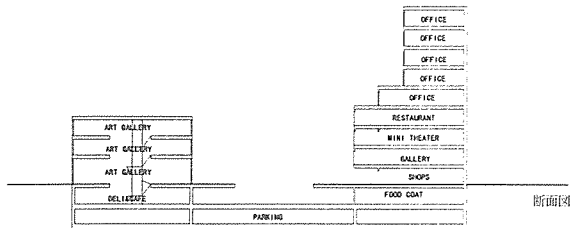
模型写真



内観パース



断面図



断面図

佐藤——これは、ウォルト・ディズニーカンパニーが、日本の商業・業務・官庁の集中する日比谷にパブリックスペースを提供する、というものです。敷地を日比谷公園とビジネス街に面する場所に設定し、日比谷公園に集う様々な人々が利用できる、オフィスを含んだ複合施設を提案しました。昼と夜では全く表情の違う都心の特徴に合わせ、この施設も役割を変えるように、それぞれの施設を考えました。ディズニーの原点であるシアターを中心とし、有楽町から日比谷公園に向けて透明度を増す音・アート・テーマパークのギャラリーの棟と、ミニシアターやカフェ・オフィスが入った棟に分け、真ん中にできたパブリックスペースを用い、ディズニーのリテールスペースを構成することで、周りのビジネス街、日比谷公園をも侵食していくような空間構成としました。

押野見——ディズニーのスペースをビジネス街におき、今までと異なった、都心における商業施設を構成しようとしたところはおもしろい。しかし、2棟の間のパブリックスペースにもっとディズニーらしさを表現してほしかった。

栗生——ギャラリーの上が使われないのはもったいない。間の空間は広くて魅力的なので、その空間を上から見る場所を持ったほうがよかった。

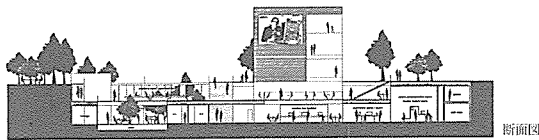
仙田——日比谷公園側だけが開けているのはなぜ? 有楽町側にも開いたほうがよかったと思う。

以下は2002年1月25日に行われた講評会の模様を、学生編集員の黒川智之[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(以下略)。

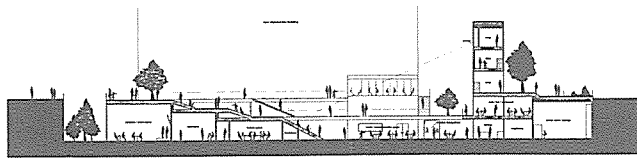
「Creator's hongout」 松島潤平 MATSUSHIMA Junpei



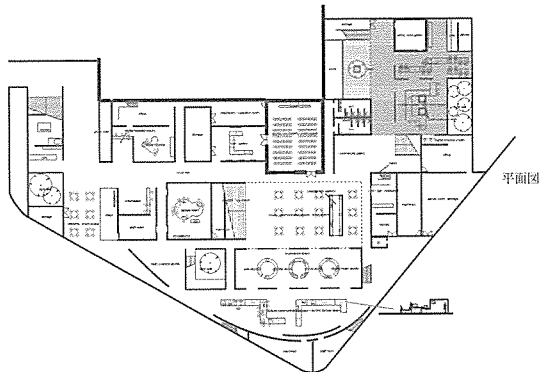
模型写真



断面図



断面図



平面図

松島——新御茶ノ水駅から地上へのアクセスとなる現在の日販ビルの公開空地に、アップルコンピュータのretail spaceを提案しました。お茶の水界隈には学校、病院、楽器街、本屋街、ビジネス街、電気街といった多くの文化が混在しています。それらの文化を持った人々が集積し、Macを中心にジャンルを越えた、新しいクリエイティブな提案が生まれ続ける事を期待して、様々な仕掛けを作っています。

栗生——図面のデザインや表現も非常に上手いし、プランもよく考えていて綺麗に作っている。公開空地と企業の広告空間を共存させる、というプログラムにも先見のリアリティがあるね。

松島——この提案は駅、公園、公開空地といった敷地元来のポテンシャルであるパブリックな要素を絡めた点に強みがあると思います。

押野見——模型が精巧でよく出来ているね。今蔓延している、超高層の足下のつまらない公開空地に対して、良いアンチテーゼとなる提案だと思う。日販ビルという強烈な凸と、ファサードの無い凹の建築というコントラストが都市に生まれるのも非常に面白い。

仙田——バリアフリーにはなっているの？

松島——試行錯誤したんですが、正直最低限の事しか出来ていません。

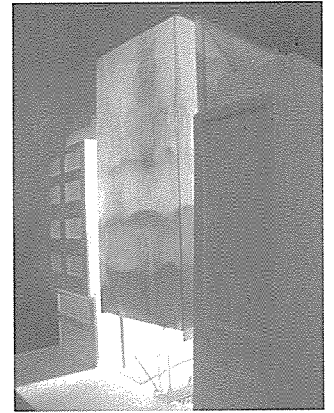
押野見——デジタルな世界には、本来ハンディキャップという概念が存在しないはずだからそれを計画に織り込まないと。

仙田——バリアフリーという要素は、デザインとして非常にポジティブに活用できるんだよ。その事を頭に置いて今後頑張してほしいね。

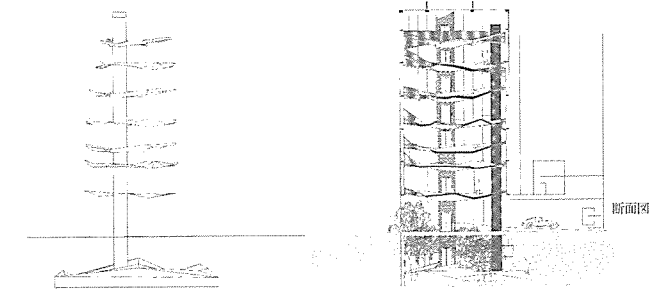
「Among sky and earth」 ビエール・オダ Pierre AUDAT



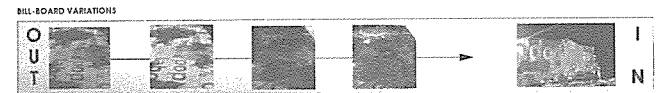
模型写真



模型写真



断面図

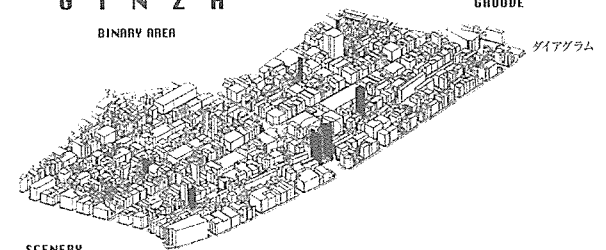


GINZA

GROUPE

BINARY AREA

ダイアグラム



SCENERY

비에ール——非常に小さなスペースに個々にバラバラなものが建っている、銀座というおもしろい土地に、飲料水や、チョコレートなどの様々な種類のものを製造している「ネスレ」という一つの会社の施設を、一つのボリュームではなく、数本のタワー状のものとして計画した。これらは、現在は駐車場として使われているような、空地として残っているスペースに、主に計画している。構造としては、中心に木の幹のような1本の太い構造体があって、それに折れ曲がったスラブが、葉っぱがとりついていっているようになっていっている。これは土地が小さいからできる、ということの他に、例えば普通に外側に4本柱を建てるよりも、隣のビルとの間に距離をとらなくてよい、ということも考えています。

押野見——「ネスレ」という会社の多面性をこの案では表現し、そしてそれらを統合するものとして、2本のゲートのようなものを計画している。それは僕はいいアイデアだと思っているんだよね。

栗生——そのゲートの部分は地下でつながっているんですね？

押野見——確かそうだね。もともと橋かなにかで地下がつながっているスペースで、地下に映画館があった不思議なところなんだよね。そのような場所における提案として、この案はまた一つユニークな魅力を引き出して成功している。

# 建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

## 「コンバージョン」

"Conversion"

担当:

**工藤和美** [非常勤講師] (本課題出題者)

KUDO Kazumi (Guest Professor)

**押野見邦英** [非常勤講師] **栗生明** [非常勤講師]

OSHINOMI Kunihide (Guest Professor), KURYU Akira (Guest Professor)

**仙田満** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

ライフスタイルや情報関連の変化は、社会そのものの構造を大きく揺るがそうとしています。日本では、スクラップandビルドによって、変化の波を越えてきた歴史がありますが、環境問題や経済問題が深刻化するなかで、これまでとは異なる価値観で、建築の可能性を提示しなくてはなりません。ビルディングタイプのなかに関じこめるのではなく、計画そのものをつくり込む事が求められています。

時代や周辺の状態を読み解きながら、すでに存在するもののコンバージョン(用途変換)。新しく生まれるものでも、将来のコンバージョンを予測して、仕掛けておくプログラミングこそ、建築家の腕の見せ所といえるのかもしれませんが。現在、駅前商店街が郊外の大型ショッピングセンターに人を奪われ、銭湯がその需要を失い、IT化に対応できなくなったビルが空き室となっています。ブロードバンドの到来で、働く場所そのものも変化するでしょう。この課題は単なる改装・改築・保存というテーマではなく、人の志向変化に取り残された特定の建築、あるいは場所を選定し、何にコンバージョンするかというシナリオを組み立てた上で、新たな建築を提案する事が目的です。

### 【設計条件】

敷地・建物の規模・構造等は特に問いません。用途変更上の法規は問いませんが、一般法規の範囲とします。

### 【提出物】

- (1) 計画主旨
- (2) 配置図・平面図・断面図
- (3) その他

模型・写真・パース・ダイアグラムなどを用いてわかりやすい解説

(4) 用紙

A1版 2枚程度



**工藤和美**

KUDO Kazumi

学歴:

横浜国立大学工学部建築学科 1985

東京大学大学院修士課程 1987

東京大学大学院博士課程 1991

職歴:

(株)シーラカンス設立 1986

昭和女子大学非常勤講師 (1994~1997)

横浜国立大学非常勤講師 (1997~)

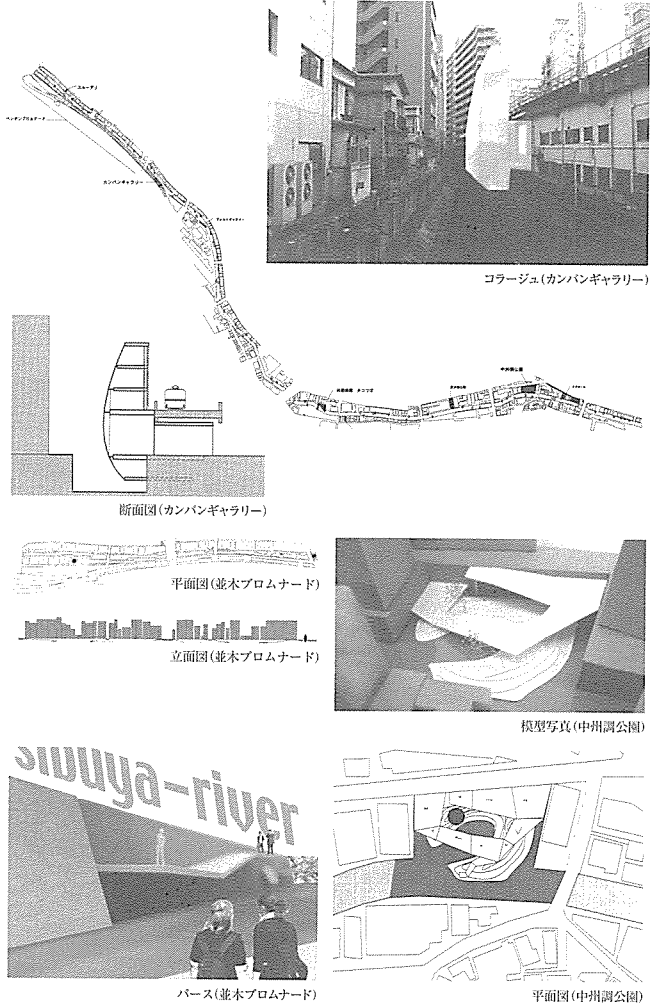
東京大学都市工学科非常勤講師 (1998~1999)

シーラカンス K+H (株) に改組

業績:

千葉県立打瀬小学校にて日本建築学会賞(1997)、「シーラカンス・JAM」,「S,D,S,9集合」共著

## 「s-r-p-s shibuya-river-public-space」 大森真樹 OHMORI Masaki



大森——これは渋谷の中でゴミとなった渋谷川を、具体的な利用のプログラムを与える事によって体質改善しようとしたものです。渋谷川の形状、地理性、周辺環境等を考慮して、様々な人のシェアする幅の大小の総体としての渋谷川公民館を計画し、護岸直接設置型の施設(オビ・タニシ)による方法論、そしてそれらにより川に対して意識的になった特異点(特殊系)を提案してみました。ここに提示したのは、それぞれの具体例です。ペンギンプロムナードはオビによって渋谷~並木橋間に場所を提案したもの、看板ギャラリーは設置や意識の対象を東横線の高架まで及んだタニシの変化系。中州調公園(中州チックパーク)は川岸の公園が川に対して意識的になった特殊系の公園です。

押野見——もっとおもいきりやってもいいんじゃない?

工藤——まともだった感じがするよね。

栗生——あいつはとんでもないやつだってくらい、僕らの想像をこえてやってほしい(笑)。

押野見——渋谷川に降りた時の視点って独特だから、それをいかして川を高速移動するとか、護岸にペイントしてビルの間から見えるとか……。

大森——それは場所がないからかもしれないですけど、建築的というよりもアート寄りになりますね。

押野見——そうだね。

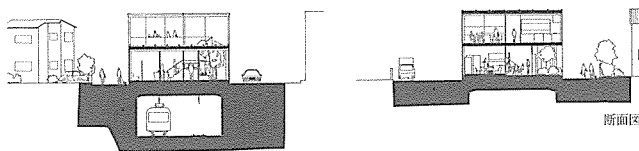
仙田——川を使ったイベントをたてる所から始めてもいいよね。これからの建築家は、建物を設計するだけでなく、企画から創りあげることが必要だと思うよ。

以下は2002年1月25日に行われた講評会の模様を、学生編集員の黒川智之[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(以下略)。

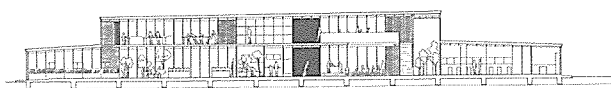
「コミュニティコンバージョン」 小林和子 KOBAYASHI Kazuko



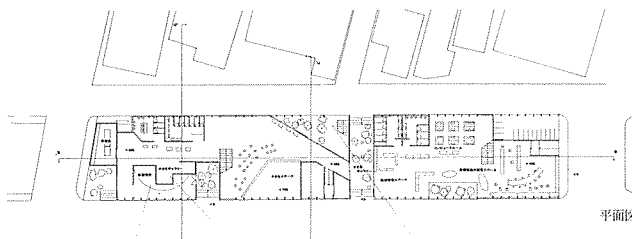
模型写真



断面図



立面図



平面図

**小林**——大岡山から洗足にかけての地域のコミュニティーは、その地下を走る目黒線の上部空間が有効に利用されていない為、緩やかに分断されています。日当たり、見通しを生かし、線路上の上を住人の興味を引く居心地の良い空間に変え、逆に人々の意識をつなぐ事を考えました。この辺りに特に元気な高齢者が多いので、彼らが家に閉じこもるのではなく、高齢者同士あるいは世代関係なく、住人同士が個人の持つ能力を表に出すことで、新しい交流が生まれることを狙っています。今まで自宅の居間でしていた事をここに来てやる、自分の趣味や技術を自発的に発表する場です。そしてコミュニティーの中身が変化するきっかけを作ります。

**押野見**——平面を見ると結構面白いところがある。

**小林**——この建物には歩道を歩く様に入り込め、人の活動を伺える様に外からの見え方や各空間へのアプローチを考えました。

**押野見**——立面はやりながらおかしいと思わなかった？

**栗生**——左右対称の様になっていて。

**小林**——はい、神殿の様になりましたが長手方向に視界が抜けるので、2階に眺めの良い休憩場所を作ろうと思いました。

**工藤**——屋根に上がって見れば良いことだし、富士山が見えるという事はこの建築にとって重要ではないのでは。

**押野見**——近隣住宅のことを考えても、平屋が良かった気がするね。

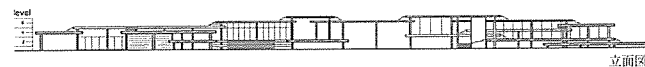
**工藤**——エスキスを通して余分な事を削ぎ落として、本当にやりたいことを明確にするという事が重要ですね。

**仙田**——敷地長手方向に垂直に、外部空間を通して、途中で南北からぶつかる道につながる様に斜めに入れた方が良かったね。

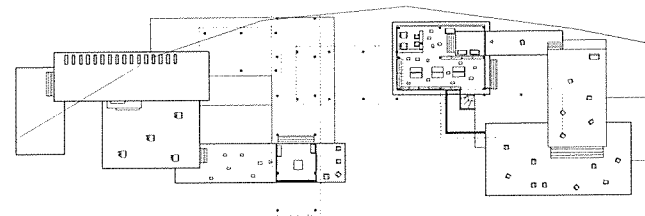
「urban kokyo resort project」 本橋良介 MOTOHASHI Ryosuke



模型写真



立面図



平面図

**本橋**——都市規模でコンバージョンするにあたって、高層ビルを建てる時総合設計制度によって公開空地を作るが、それは殆どデザインされていなくネガティブな空き地となっています。超高層ビルが並ぶ場所でこういった敷地をうまく利用できないかと考えました。ここでは460mの超高層ビルに対してヒューマンスケールなものを求めました。経済的なことを考えると成立しないため、公共建築を建てることにしました。

**工藤**——屋上はどうなってるの？

**本橋**——歩道橋がありますが、特別な提起はあえてしていません。スカイウェイで、連続的に巻き込むことで外部だったものが内部になってまた外部といった連続性をつくりました。作る段階では用途を考えず、外部と内部があいまいに連続することを提案し、その後に機能的なものを放り込むことを考えました。

**工藤**——屋上に行くことは通常の動線から考えれば遠回りですね。人がわざわざ回っていきたくなる仕組みが必要だと思います。

**栗生**——空間構成だけでそっけないだろうね。

**仙田**——人が交流するというしくみをつくるのは難しいんだよ。何か拠り所的なものが必要なわけであって、その場その場の特徴が欲しいところだ。

# 建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

## 「屋上建築」

"Architecture on the roof"

担当:

**粟生明** [非常勤講師] (本課題出题者)

KURYU Akira (Guest Professor)

**工藤和美** [非常勤講師] **押野見邦英** [非常勤講師]

KUDO Kazumi (Guest Professor), OSHINOMI Kunihide (Guest Professor)

**仙田満** [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

**井上寿** [助手] **山崎純** [科学技術支援委員] **川上正倫** [D3] **大成康隆** [技術補佐委員]

INOUE Hisashi (Assistant), YAMAZAKI Jun, KAWAKAMI Masamichi, OONARI Yasutaka

ル・コルビュジェの近代建築5原則(ピロティ、自由なファサード、フリープラン、水平連続窓、屋上庭園)の一つに屋上庭園がある。

マルセイユの集合住宅、ユニテ・ダビタシオンの屋上庭園は第五のファサードと考えられる屋根部分の利用形態に新しいビジョンを打ち出した。屋上はあたかもその下の部分を人工地盤とするかのように幼稚園と体育ジムがのり、煙突、階段などと共に、それらが様々な形態を与えられて、オブジェクトの集合が形造っている。ここでは自動車や外部歩行者の動線に解放したピロティ、中間階にはさまれたレストラン、マーケット、軽作業の職場などと共に、ある程度都市的な居住条件をひとつの建物で満たそうとしている。これはひとつの建築であると同時に都市の縮図でもあるのだ。しかしここで屋上庭園は、共同性を有しているものの、あくまでも一棟単位である。より開かれた公共性を獲得し、新しい都市空間としての屋上建築を提案しよう。

### [設計条件]

既存の建築を一つ選び、その屋上部分を新たに設計しなおし、新しい利用形態を含む、新しいビジョンをもった屋上建築の提案、あるいは独自の構想のもと、屋上利用を主眼とした新しい建築の提案をせよ。あまり細部にとらわれることなく、学生諸君の柔軟な発想とアイデアによる提案を期待する。

### [提出物]

設計主旨: 提案の背景やプログラムを文章・ダイアグラムで簡潔に、分かりやすく表現すること。

模型: 縮尺自由

配置図、平面図、立面図、断面図: 縮尺自由ですが内容が十分理解できるように。

その他: パース、スケッチ、写真など、ビジュアルな説明図を積極的に加えること。

用紙: A1サイズ



**粟生明**

KURYU Akira

1947年生まれ

学歴:

早稲田大学工学部建築学科1971

早稲田大学大学院工学研究科1973工学修士

職歴:

横総合計画事務所

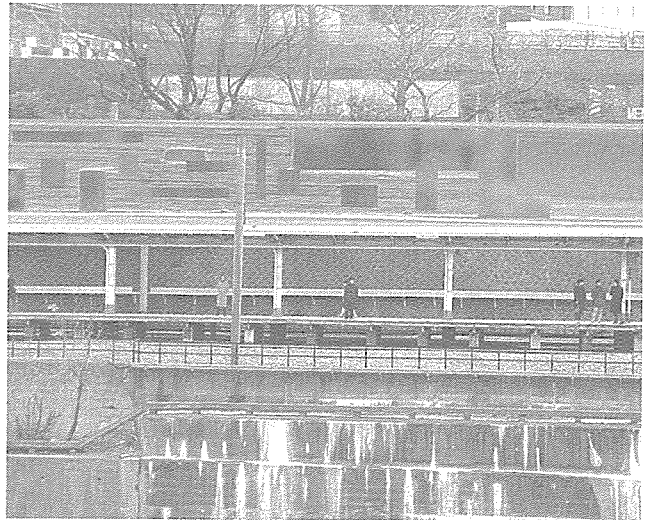
(株)粟生総合計画

1992千葉大学デザイン工学科建築系教授

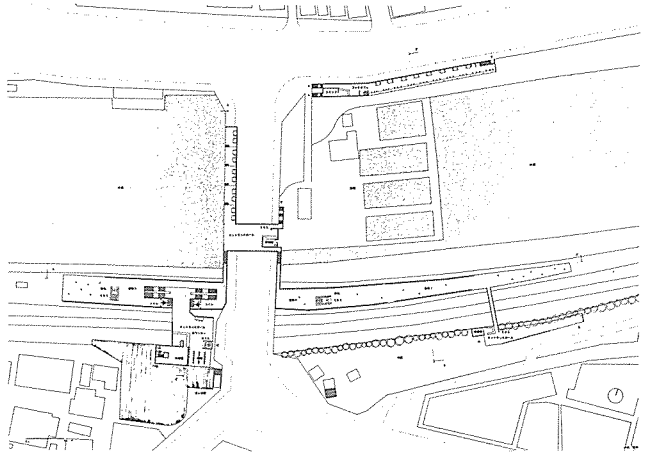
業績:

カーニバル・ショーケース [JIA 新人賞(1989)]、信州博覧会建設省ミュージアム、植村直己冒険館 [日本建築学会賞(1996)]、群馬県営相生住宅一期、コアやまくに [公共建築特別賞(2000)]、岡崎市美術博物館、パトリ+清里フォトアートミュージアム、平等院鳳翔館 [日本建築学会作品選奨(2002)]

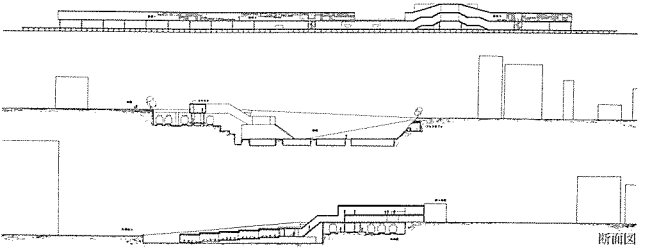
## 「LINE」小沢宣行 OZAWA Noriyuki



模型写真



平面図



断面図

小沢——市ヶ谷の駅の上に図書館を計画しました。計画する上で、書庫に本を収納する機能意外に、風景を切り取るという機能をもたせて、市ヶ谷の様々な景観を建築内部に取り込もうとしました。本棚の奥はガラスになっていて、本を取ることによってファサードが変化します。この図書館では本は偶然的に選ばれるので、切り取られる風景もランダムに変化します。

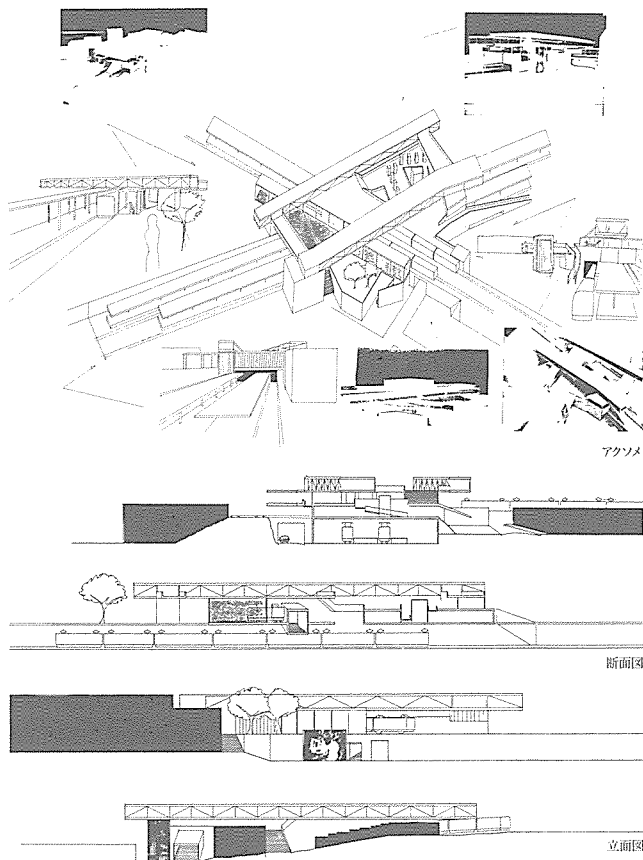
仙田——この課題の趣旨を考えれば、屋上の機能として新しい提案をしていくべきだと思うんだけど、君の場合はそれがファサードに向いているよね。

小沢——駅の形は細長いというのが特徴なので、駅の上にその形を活かせるように本棚を配置するという事は、説得力のあることではないかと思いました。

押野見——説得力に富む提案になっているかというところと少々むずかしいところですが、君が自分のしていることを信じてまっすぐに突き進む姿勢は好感がもてます。

以下は2002年1月25日に行われた講評会の模様を、学生編集員の黒川智之 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります (以下略)。

「屋上建築」北川立也 KITAGAWA Tatsuya



北川—下北沢駅の上に、通り抜けの可能なギャラリーを計画しました。というのは、下北沢は小田急線と井の頭線によって分断されており、線路を越えようとすると踏切まで回らないといけないからです。それと下北沢はごみごみしていて、何気なく居ることができない場所だと思います。それらを同時に解決できるよう、通り抜け可能で何気なくいられる場所を3つのギャラリーで構成して計画しました。

栗生—動線はどうなっているの？

北川—通り抜けのことを一番考えて計画しました。上まではあがらずに改札を通りぬけできるようになりました。

栗生—自由通路としたんだね。さらにギャラリーがあるのは通り抜けだけでなく目的性を持たせたの？

北川—それぞれのレベルにギャラリーを設けて通路も兼用にしました。

押野見—屋上というよりは、下北沢駅上計画みたいな感じだね。必ずしも電車の方向に沿わせる必要はなかったのでは？

北川—電車方向からずらすとさらに高くする必要性がでてくるのでそうしました。

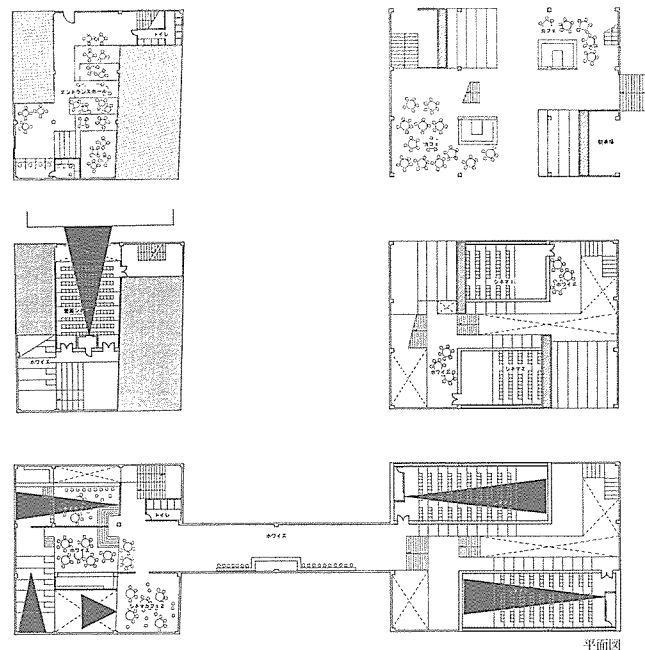
栗生—自由通路として利用する人は実際にいるのでしょうか？

北川—この辺りの踏み切りは、待たされて事故もあつたりするので使う人も多いと思います。

「Light volume」森剛平 MORI Kohei



模型写真



森—僕は、都市部によくある高層建築の間にひょこっと現れる低い建物に注目しました。高層建築の裏には公園の自然があり、それを山手線が仲介しているの、ここを繋ぐと面白いことになるのではないかと思います。また、夜になると公園は真っ暗で何も使われていないため、これを改善したいと思いました。ほのやかな明るすぎない光りをここでにじませることで、真っ暗で何も使われていない空間を生かします。この公園は現在人が交わる場所となり、通路としての役割を失わず、カフェなどもあるインフラのような役割をもたせたいと思って計画しました。

仙田—起伏面と30mの高さとはコートハウスの街並みは違うべきじゃない？例えば壁を抜いて両側の街路を見渡せるとか。30mの高さの特徴をもっと生かすと思うんだよね。

栗生—立体的な面白さ、開いて面白さを出した方がいいと思う。

工藤—やるんだったら実際に屋上で出ているところをいかにうまく隠すかなどコンセプトに盛り込むべきかな。そうするとvoid的な関係が出てきて、面白くなるんじゃない？

ここでは、設計競技の応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を紹介しております。

「ISLAND in nostalgia」

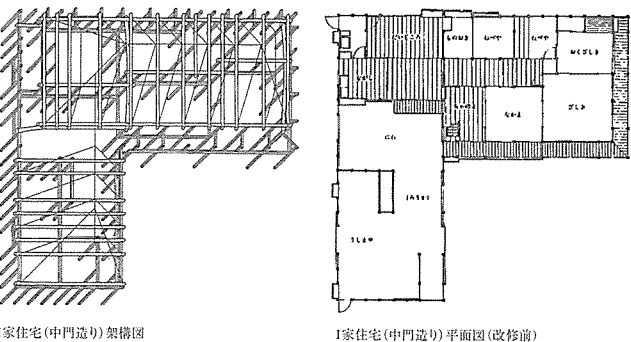
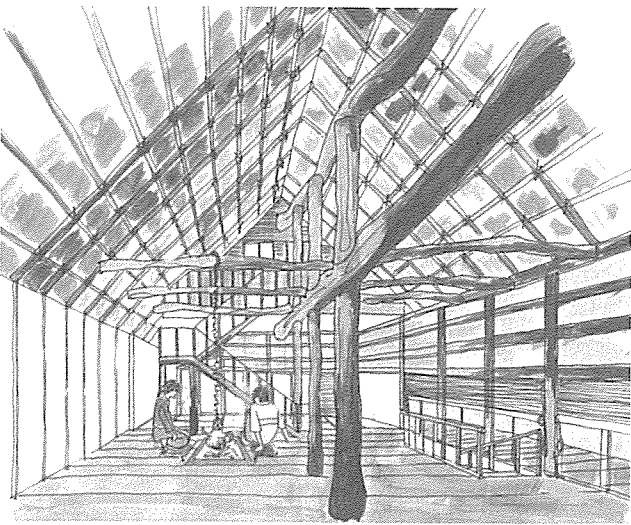
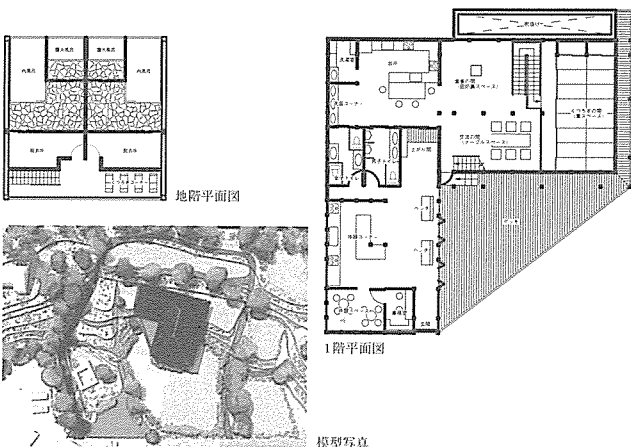
新潟県新井市主催 大滝の湯体験交流施設アイデアコンペティション  
[入選]

田中梨香[修士2年]+瀧川佐江子[修士2年]+西邑雅代[修士2年]

TANAKA Rika (M2), TAKIGAWA Saeko (M2), NISHIMURA Masayo (M2)

新潟県新井市の山間地に広がる棚田に自然や田舎体験を満喫できる体験温泉交流施設を計画することが求められた。

私達は、この地域に馴染みの深い「中門造り」という民家形式の古民家を移築・再生する提案をおこなった。既存の民家部分は以前の用途を採用しつつ新たに一階部にデッキを、地下部に温泉施設を挿入し棚田に浮かぶ『郷愁の島』をつくりだした。古いものを利用しつつさらに新しい魅力を加えることで、忘れ去られていた遺産を未来の財産に創り変えることができた。



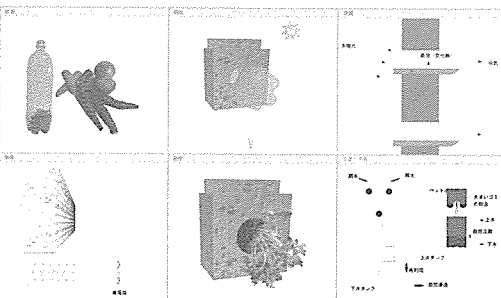
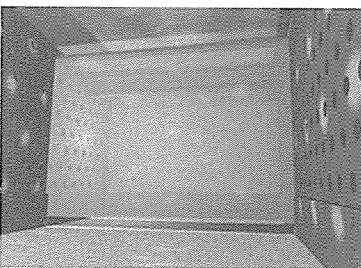
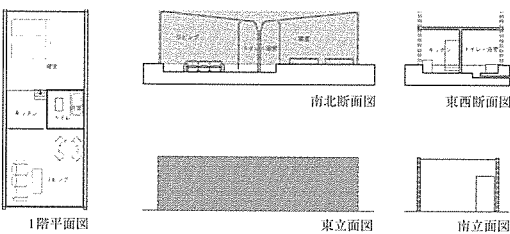
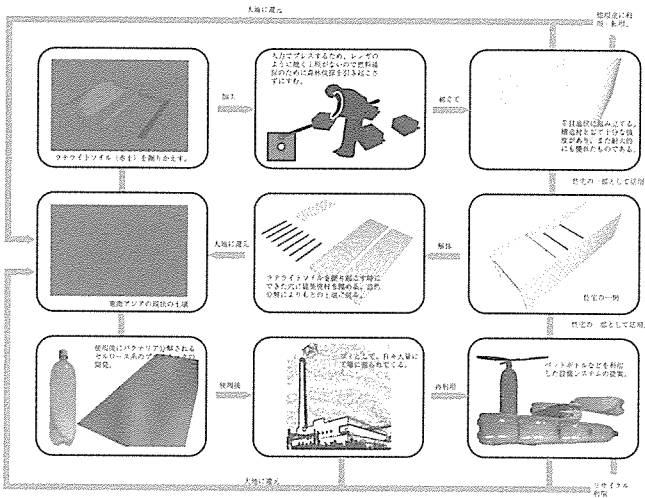
「World Wide Cycle」

第13回タキロン国際コンペティション「仮の恒久住宅」  
[三等]

黒川智之[修士2年]

KUROKAWA Masayuki (M2)

このコンペでは、仮設と恒久という本来相矛盾するかのように思われる考えをいかに連続的な意識で捉えるかということが問われていた。そこで伊勢神宮にヒントを得て計画したのが今回の提案である。伊勢神宮は20年に一度建て替えが行われ、解体に伴って生じる建材は他の寺社建築や鳥居、おみくじ等様々な形で転用がされる。そのような転用のあり方に仮設と恒久という考えを連続的な意識で捉える一つの解が見出せるのではないかと考えた。このことを住宅にあてはめ、住宅の生成から解体までのプロセスをもっと巨視的なサイクルに組み込むことによって、仮設的な住宅に恒久性を獲得させるのが狙いであった。表彰式では設備的な部分まで仮設性と恒久性という意識をもっていったところを高く評価されたが、もう少し提案の裏づけとなるようなものが欲しかったと指摘を受けた。



## TIT建築設計教育研究会会則

[第1条]名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

[第2条]目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

[第3条]事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

[第4条]会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

[第5条]会費

本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は10年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)

[第6条]役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名

(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

[第7条]総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

[第8条]会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

[第9条]存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。

(この項 削除=第5回総会にて承認)

[第10条]会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。(以上)

〈細則〉

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

[第1条]役員

本会の役員は構成は下記による。

運営委員9名

(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

[第2条]総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

(以上)

**2001年度役員(01.12.31現在)**

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事・鹿島建設(株)顧問、林昌二(1953卒)(株)日建設計名誉顧問、戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役/運営委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役所長/副委員長:三栖邦博(1963卒)(株)日建設計取締役社長/監査役:藤江澄夫(1960卒)清水建設(株)常勤監査役/運営委員:岡部富雄(1964卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長、服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店取締役、仙田満(1964卒)東京工業大学大学院教授、坂本一成(1966卒)東京工業大学大学院教授、八木幸二(1969卒)東京工業大学大学院教授

**2001年度法人会員(01.12.31現在)**

(社名/本会への代表)

大林組/杉山直、鹿島建設/高橋司、清水建設/日置滋、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、構造計画研究所/日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、IAO竹田設計/竹田秀道、金箱構造設計事務所/金箱温春、環境デザイン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、建築資料研究社:日建学院/井澤真悟、構造計画研究所/岡部富雄、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、レーモンド設計事務所/森山興真、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、伊達計画文化研究所/伊達美徳、山下設計/井上雄治

**2001年度個人会員(01.12.31現在)**

(氏名(卒年))

田口武一(S10)/東久世秀禱(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/石野治(S23)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/半澤重信(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/城間勇吉(S31)/渋谷実(S32)/中神弘(S32)/松下謙三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/星野利一(S35)/松野公一(S35)/森孝夫(S35)/佐々木雄二(S36)/鈴木歌治郎(S37)/武岡茂生(S37)/最上

達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田桂吉(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/森山興真(S39)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/守谷一彦(S40)/岩沢二郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/鈴木清友(S41)/大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/荻谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/保坂一夫(S48)/森行臣(S48)/尹原基(S48)/有里公徳(S49)/高田典夫(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S50)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮木宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康憲(S52)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/飯利昌人(S53)/鈴木敏彦(S54)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/平島信一(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/帽田秀樹(S59)/中村安志(S60M)/大佛俊泰(S60)/小田宏正(S60)/所司護(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/今井賢治(H1)/栗原正明(H1)/鹿野秀馬(H2)/木島千嘉(H3M)/渡邊哲也(H3M)/片庭修(H3)/櫻井康雄(H4)/菅原正則(H5M)/保住秀樹(H5)/藤岡務(H6M)/井澤真悟(H7)/村田淳(H7)/井上寿(H8D)/七田裕(H8M)/菅菜々子(H8)/笠井啓仁(H9)/吉田佳代(H9)/以上165名

**2001年度大岡山建築賞**

2001年度大岡山建築賞受賞者は、以下の通りに決定し、6月18日第12回総会にて授賞式が行われる。詳細については次号で報告する。

[大岡山建築賞]

倉林貴彦(B4)「tsuchi・stadium park」

玉井洋一(B4)「ビルズ」

[大岡山建築賞銀賞]

野地智美(B4)「ウエノエキ」

諸藤弘之(B4)「tsumikichi project」

編集委員: 八木幸二 / 奥山信一 / 那須聖 / 是永美樹 [以上幹事] / 横山裕 / 堀田久人 / 湯浅和博 / 足立真 / 井上寿 / 木下芳郎 / 中井邦夫 / 山崎嶋介

学生委員: 内山森 / 斉藤哲也 / 松本淳 / 増田泰良 / 川合英介 / 小池秋彦 / 足立拓 / 卜部祐加 / 黒川智之 / 鈴木悠子

取材協力: 大学院修士課程1年有志

編集協力: デザイン=秋山伸+久世健 / 翻訳=デイヴィッド・スチュアート

表紙: 新風館(中庭) ©Katsuhisa Kida [図面:リチャード ロジャース パートナーシップ ジャパン]

発行: TIT 建築設計教育研究会 [2002年6月発行]

(事務局: 東京工業大学理工学研究所建築学専攻 坂本一成研究室)

定価: 800円

# ka023

Spring/Summer, 2002

## 編集後記

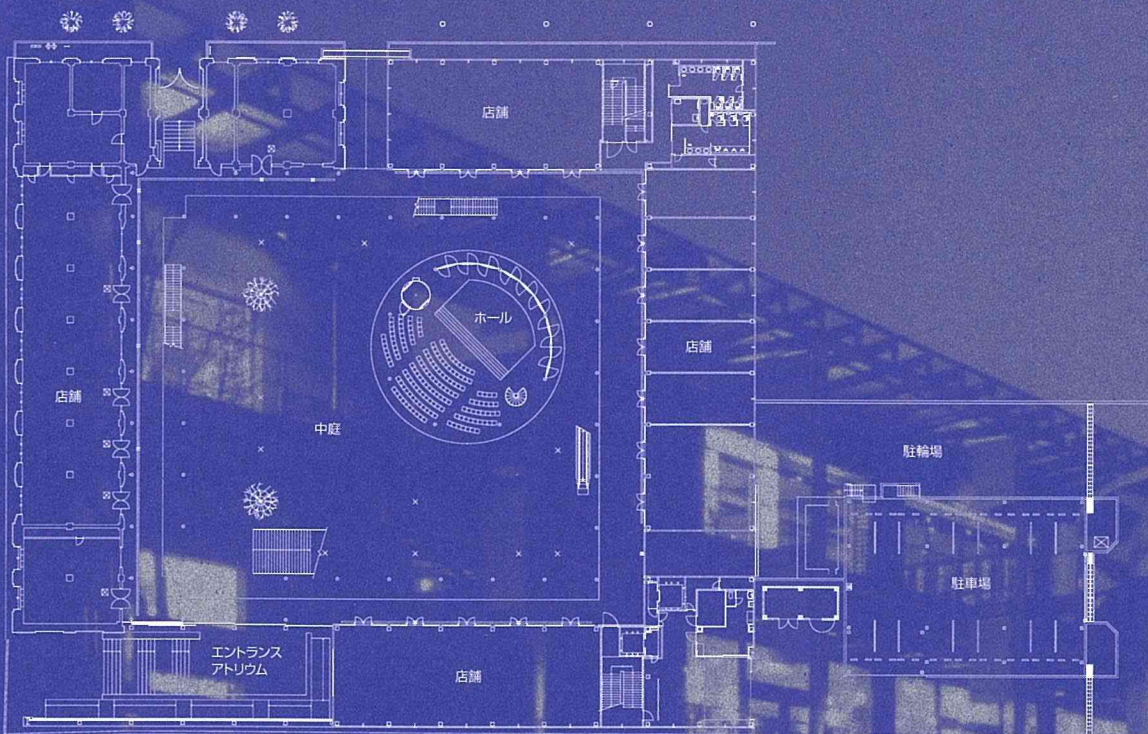
編集幹事の那須聖さんが4月から札幌市立高専へ転出されました。

学位論文の最終段階にもかかわらず本号の編集を中心となって進めて頂き、ご苦労様でした。

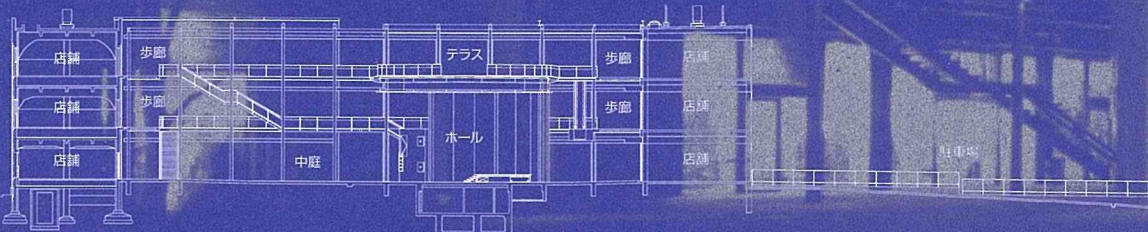
新たに是永美樹が幹事に加わりました。

御意見がございましたら、是永 kore@arch.titech.ac.jp へお寄せ下さい。

[八木幸二]



新風館 平面図



新風館 断面図

## [新風館データ]

建築設計=NTTファシリティーズ+リチャード ロジャース パートナーシップ ジャパン

施工=清水建設

構造=既存棟:鉄筋コンクリート造/増築棟:鉄骨造

建築面積=3,381.49m<sup>2</sup> 延床面積=8,233.60m<sup>2</sup>

建蔽率=53% (許容:80%) 容積率=123% (許容:700%)

階数=地下1階、地上3階

設計期間=1998年8月-2000年3月

施工期間=2000年4月-2001年1月